

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第81集
田布施町埋蔵文化財調査報告 第3集

かい かい
開 明
お しろ
尾 尻
い い
遺 遺
せき せき
跡 跡

2013

公益財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
田布施町教育委員会

序

本書は熊毛郡田布施町に所在する開明遺跡・尾尻遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。この調査は南周防農地整備事業に先立ち、公益財団法人山口県ひとつづくり財団が実施し、また一部は、田布施町教育委員会と共同で実施しました。

調査の結果、開明遺跡では弥生時代から古墳時代を中心とする竪穴建物跡や土器棺墓等が確認され、当時の集落跡の様相を明らかにすることができました。尾尻遺跡では県内遺跡からは初の出土例となる古代の銅印をはじめ、緑釉陶器、土錘といった特徴的な遺物が多数出土しました。これらの調査成果は、田布施川中流域における当時の生活の様子や社会状況等を考える上で、大変貴重な資料となります。

本書が文化財保護に対する理解をより深める資料として、また、教育ならびに学術研究、郷土の歴史を学ぶ資料として広く活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査の実施ならびに報告書作成にあたってご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成25年 3月

公益財団法人 山口県ひとつづくり財団
理事長 松 永 貞 昭

例 言

- 1 本書は平成23年度に実施した開明遺跡・尾尻遺跡（山口県熊毛郡田布施町川西・宿井地内）および同24年度に実施した開明遺跡・尾尻遺跡・堀川遺跡・平井遺跡（同田布施町川西・宿井・波野地内）のうち開明遺跡・尾尻遺跡の発掘調査報告書である。なお、堀川遺跡・平井遺跡の発掘調査報告書については、同25年度に作成・発行する計画である。
- 2 調査は平成23年度に財団法人山口県ひとつくり財団が中国四国農政局の委託〔契約名：平成23年度南周防農地整備事業葛岡・瓜迫団地埋蔵文化財発掘調査委託業務〕および同24年度に公益財団法人山口県ひとつくり財団が中国四国農政局の委託〔契約名：南周防農地整備事業波野（木地）団地外埋蔵文化財発掘調査委託業務〕（第1回変更）を受けて実施したものである。また、一部は田布施町教育委員会が平成23・24年度文化庁国庫補助事業として実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。（所属は調査時のもの）

調査主体	公益財団法人（平成23年度は財団法人）山口県ひとつくり財団・山口県埋蔵文化財センター 田布施町教育委員会		
調査担当	文化財専門員	岩崎仁志	（平成23年度）
	文化財専門員	石川彰	（平成23・24年度）
	文化財専門員	光永辰男	（平成23・24年度）
	文化財専門員	上田克也	（平成23年度）
	文化財専門員	四元努	（平成24年度）
	調査員	岩崎麻衣子	（平成23年度）
	調査員	山田圭子	（平成24年度）
	埋蔵文化財発掘等専門員	池本篤	（田布施町教育委員会）
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、中国四国農政局南周防農地整備事業所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「柳井」を複製（縮小）使用した。第2図は山口県柳井農林事務所提供の地図を元に作成した。
- 6 本書の方位は、遺跡周辺図、遺構配置図に関しては国土座標（世界測地系）の北で示し、個別遺構に関しては、磁北で示している。なお、掘立柱建物跡の棟方向に関しては、国土座標（世界測地系）の北を基準とする。また、標高は海拔高度（m）である。
- 7 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 8 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 9 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SA：柵列跡	SB：掘立柱建物跡	SD：溝	SI：竪穴建物跡
SK：土坑	SP：柱穴	ST：墓	SX：性格不明遺構
- 10 銅印の文字判読に関しては、山口大学名誉教授 八木充氏（古代史）、中国産輸入磁器については、山口県立萩美術館・浦上記念館館長 上田秀夫氏、同学芸員 徳留大輔氏、緑釉陶器他については、同志社大学文学部嘱託講師 橋本久和氏にご教示を賜った。
- 11 資料の鑑定・分析に関して、リン酸・カルシウム分析、蛍光X線分析、放射性炭素年代測定（AMS測定）について、株式会社加速器分析研究所に依頼し、その成果を付編として掲載した。
- 12 本書の作成・執筆は、石川・光永・四元・山田が共同で行い、編集は石川が行った。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査に至る経緯と調査の概要	3
III 開明遺跡調査の成果	9
1 遺構	9
2 遺物	27
IV 尾尻遺跡調査の成果	57
1 遺構	57
2 遺物	66
V まとめ	81
付編 開明遺跡・尾尻遺跡における自然科学分析	84

挿図目次

第1図 開明遺跡・尾尻遺跡の位置と周辺の遺跡 …………… 1	第36図 出土遺物実測図(17) …………… 44
第2図 遺跡周辺図 …………… 5	第37図 出土遺物実測図(18) …………… 45
開明遺跡	第38図 出土遺物実測図(19) …………… 46
第3図 開明遺跡西部遺構配置図 …………… 6	第39図 出土遺物実測図(20) …………… 47
第4図 開明遺跡中央部遺構配置図 …………… 7	第40図 出土遺物実測図(21) …………… 48
第5図 開明遺跡東部遺構配置図 …………… 8	尾尻遺跡
第6図 S I 1 実測図 …………… 10	第41図 尾尻遺跡北部遺構配置図 …………… 58
第7図 S I 2 実測図 …………… 11	第42図 尾尻遺跡南部遺構配置図 …………… 59
第8図 S I 7・8 実測図 …………… 12	第43図 S I 1 実測図 …………… 60
第9図 S I 13・10 実測図 …………… 13	第44図 S B 1・3 実測図 …………… 61
第10図 S I 15・16 実測図 …………… 14	第45図 S B 2 実測図 …………… 62
第11図 S B 1・3 実測図 …………… 15	第46図 S K 12 S D 8 実測図 …………… 63
第12図 S B 9 実測図 …………… 16	第47図 S P 521・524・523・522・529 実測図 …………… 64
第13図 S B 14・16 実測図 …………… 17	第48図 出土遺物実測図(1) …………… 66
第14図 S T 1・2・3 実測図 …………… 18	第49図 出土遺物実測図(2) …………… 67
第15図 S K 2・3・8・16 実測図 …………… 19	第50図 出土遺物実測図(3) …………… 68
第16図 S K 6 S D 2・6 実測図 …………… 21	第51図 出土遺物実測図(4) …………… 69
第17図 S P 275・114・150・901・220 実測図 …………… 23	第52図 出土遺物実測図(5) …………… 70
第18図 S P 353・281・219・401 実測図 …………… 24	第53図 出土遺物実測図(6) …………… 71
第19図 S P 399・909・467 遺物包含層出土 ミニチュア土器群実測図 …………… 25	第54図 出土遺物実測図(7) …………… 72
第20図 出土遺物実測図(1) …………… 28	第55図 出土遺物実測図(8) …………… 73
第21図 出土遺物実測図(2) …………… 29	第56図 出土遺物実測図(9) …………… 74
第22図 出土遺物実測図(3) …………… 30	第57図 出土遺物実測図(10) …………… 75
第23図 出土遺物実測図(4) …………… 31	
第24図 出土遺物実測図(5) …………… 32	
第25図 出土遺物実測図(6) …………… 33	
第26図 出土遺物実測図(7) …………… 34	
第27図 出土遺物実測図(8) …………… 35	
第28図 出土遺物実測図(9) …………… 36	
第29図 出土遺物実測図(10) …………… 37	
第30図 出土遺物実測図(11) …………… 38	
第31図 出土遺物実測図(12) …………… 39	
第32図 出土遺物実測図(13) …………… 40	
第33図 出土遺物実測図(14) …………… 41	
第34図 出土遺物実測図(15) …………… 42	
第35図 出土遺物実測図(16) …………… 43	

表目次

開明遺跡

第1表 掘立柱建物跡一覽表	26
第2表 土坑一覽表	26
第3表 出土土器・土製品觀察一覽表	49
第4表 出土石器・石製品觀察一覽表	56
第5表 出土鉄器・鉄製品觀察一覽表	56

尾尻遺跡

第6表 掘立柱建物跡一覽表	65
第7表 土坑一覽表	65
第8表 出土土器・土製品觀察一覽表	76
第9表 出土石器・石製品觀察一覽表	80
第10表 出土金属製品觀察一覽表	80

図版目次

開明遺跡

- 図版1 調査区全景(北から)
調査区西部近景
- 図版2 調査区中央部近景
調査区東部近景
- 図版3 調査区東部上層遺構面完掘状況(西から)
S I 1 完掘状況(南から)
- 図版4 S I 2 完掘状況(北から)
S I 2 周溝部南西側土器出土状況(南東から)
S I 2 周溝部東側土器出土状況(北から)
S I 2 内土坑土器出土状況
S I 2 内柱穴土器出土状況
- 図版5 S I 7 完掘状況(北から)
S I 7 土層断面(北から)
S I 7 カマド完掘状況(東から)
S I 8 完掘状況(北から)
- 図版6 S I 13 完掘状況(北から)
S I 10 完掘状況(西から)
- 図版7 S I 15 完掘状況(南東から)
S I 15・16 完掘状況(北東から)
S I 16 内柱穴土器出土状況
S I 16 内柱穴土器出土状況
- 図版8 S B 1・3 完掘状況
S B 9 完掘状況(南から)
- 図版9 S T 1 検出状況(北から)
S T 2 検出状況(南西から)
S T 3 検出状況(西から)
S K 2 土層断面(東から)
S K 3 完掘状況(西から)
S K 8 土器出土状況(北から)
S K 16 土器出土状況(北西から)
S K 6 土器出土状況(北から)
- 図版10 S D 2 土器出土状況(東から)
S P 275 土器出土状況
S P 150 石斧出土状況
S P 901 土器出土状況
S P 220 土器出土状況
S P 353 土器出土状況
S P 281 土器出土状況
S P 219 土器出土状況
- 図版11 S P 401 土器出土状況
S P 399 土器出土状況

- S P 909 土器出土状況
S P 467 土器出土状況
遺物包含層出土ミニチュア土器群(北から)

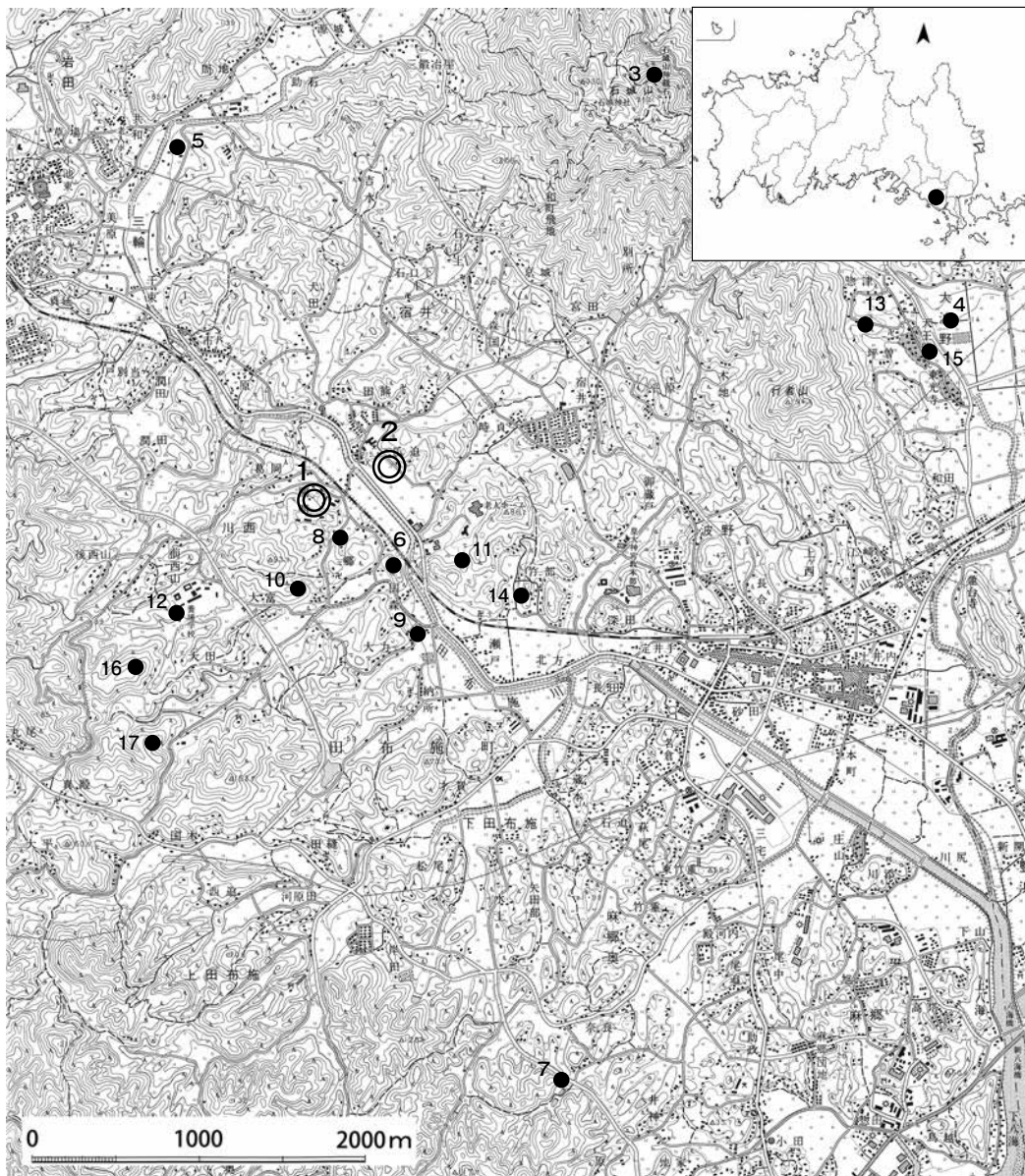
- 図版12 出土遺物(1)
図版13 出土遺物(2)
図版14 出土遺物(3)
図版15 出土遺物(4)
図版16 出土遺物(5)
図版17 出土遺物(6)
図版18 出土遺物(7)
図版19 出土遺物(8)
図版20 出土遺物(9)
図版21 出土遺物(10)
図版22 出土遺物(11)
図版23 出土遺物(12)
図版24 出土遺物(13)

尾尻遺跡

- 図版25 調査区全景(南西から)
調査区北部近景
調査区南部近景
S I 1 銅印出土状況(南西から)
- 図版27 S I 1 銅印出土状況
S I 1 銅印出土状況
S I 1 土器出土状況
S I 1 土器出土状況
S I 1 完掘状況(北西から)
- 図版28 S B 1 完掘状況(北東から)
S B 3 完掘状況(南西から)
- 図版29 S B 2 完掘状況(南東から)
S D 8 完掘状況(北東から)
- 図版30 S K 12 土器出土状況(南から)
S P 521 土器出土状況
S P 524 土器出土状況
S P 523 土器出土状況
S P 522 土器出土状況
S P 529 柱根検出状況
- 図版31 出土遺物(1)
図版32 出土遺物(2)
図版33 出土遺物(3)
図版34 出土遺物(4)
図版35 出土遺物(5)
図版36 出土遺物(6)

I 遺跡の位置と環境

開明遺跡は田布施町川西地区に、尾尻遺跡は同町宿井地区に所在し、同町を貫流する田布施川中流域をはさんで並ぶ。両遺跡は北に神籠石で知られる石城山、南に白石山、西に呉麓山という低い晩壮年期の山に囲まれ、それらの山々のなだらかな裾野が開析されてできた台地上の丘陵と、丘陵間を樹枝状にぬうように広がる、堆積の進んだ細長い谷からできる盆地内に位置する。この盆地内を、浅瀬が多く水量の乏しい田布施川が北西から南東に流れ、平生湾に注いでいる。田布施川右岸に位置する開明遺跡は、呉麓山から樹枝状に伸びる丘陵の先端部に位置し、田布施川左岸の尾尻遺跡は石城山か



- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-------|
| 1 開明遺跡 | 2 尾尻遺跡 | 3 石城山神籠石 | 4 明地遺跡 | 5 林遺跡 |
| 6 石走山遺跡 | 7 奈良ニッ池遺跡 | 8 宮川遺跡 | 9 国森古墳 | |
| 10 木ノ井山古墳 | 11 後井1号墳 | 12 相ヶ迫古墳 | 13 納蔵原1号墳 | |
| 14 稲荷山古墳 | 15 天王原古墳 | 16 大田A古墳群 | 17 大田B古墳群 | |

第1図 開明遺跡・尾尻遺跡の位置と周辺の遺跡

ら広がる丘陵下部の沖積平野上に位置している。

両遺跡の下流域にあたる田布施町本町一帯と平生低地、さらに柳井市余田を経て古開作にかけては県下屈指の遺跡密集地帯となっているが、標高10m以下の低地には古墳時代以前の遺跡を見ることはできない。この低地は古柳井水道と呼ばれ、古代海進期には海面もしくは干潟であった可能性が指摘されている。したがって両遺跡の周辺は現在の景観と異なり、古代においては瀬戸内海の入江が間近に迫る場所であったことが推測できる。

弥生時代から古墳時代にかけての周辺の遺跡を概観してみると、まず山口県東部で最大級の低地性集落である明地遺跡があげられる。明地遺跡は弥生時代中期から古墳時代にかけての多数の住居跡や墓が発見され、周防南部の拠点集落の在り方を知る上で重要な遺跡である。また弥生時代中期から古墳時代にかけての集落跡が発見された林遺跡や、県内で初めて発見された鉄釧が弥生時代後期のものとされる石走山遺跡がある。これらに加えて、弥生時代中期から後期にかけての典型的な周防型土器が出土した奈良二ツ池遺跡、土器棺墓等が出土した宮川遺跡、竪穴建物の集落跡が見つかった大崩遺跡なども周辺に見られる弥生時代の遺跡である。

古墳時代の遺跡では両遺跡の南東方向1kmに位置する国森古墳が注目される。国森古墳は、防長地域において定型化した前方後円墳が出現する以前の方墳で、4世紀初頭に築造された県内最古の古墳である。また県内では数少ない粘土槨を埋葬主体とする5世紀中頃の円墳である木ノ井山古墳、弥生時代終末期から古墳時代後期にかけての方形台状墓や低墳丘の円墳などからなる石走山遺跡、中国地方でも有数の石室規模を誇り、周防国造の系譜に連なる首長の最後の古墳として位置づけられる後井1号墳、横穴式石室を主体部とし、6世紀末の築造とされる円墳の相ヶ迫古墳などが、それぞれ両遺跡と1km前後を隔てて位置する。その他の田布施町内の古墳時代の遺跡としては、円筒埴輪をもち6世紀中頃の築造とされる前方後円墳の納蔵原1号墳、横穴式石室をもつ6世紀末の稲荷山古墳の他、天王原古墳、大田A古墳群、大田B古墳群など数々の古墳がある。

古代以降の歴史については、考古学的な資料がそれほど多くないため、限られた文献に基づかざるをえない。古代に入ると律令制の下、周防国の成立とともに熊毛郡が置かれるが、郡衙の位置は未だ確認されていない。平安時代の「和名抄」によると熊毛郡は七郷から構成され、両遺跡の含まれる地域はそのうちの美和郷に属していたとされる。その後、美和荘として京都の最勝光院領の荘園となり、関連する資料にも両遺跡付近の地名が見られる。

南北朝時代になると、美和荘は在地武士勢力により支配される傾向を強める。その後、大内家家臣による支配を経て、毛利氏の治める時代となる。19世紀の「防長風土注進案」には、尾尻遺跡を含む宿井村の中心、宿井市について、32軒の家数があり、「家並間ばら」、宿井村の様子を「農業一途の村方」としている。また開明遺跡を含む川西村については「棚田浴田之所多く、人家まばらに有之、市中と申程之所無之」と記述する。農家が点在する田園地帯が両遺跡近辺に広がっていた様子が見てとれる。

引用・参考文献

田布施町教育委員会『相ヶ迫古墳』(1976) 田布施町史編纂委員会『田布施町史』(1990) 山口県埋蔵文化財センター『明地遺跡』(1993) 山口県埋蔵文化財センター『林遺跡』(1993) 山口県埋蔵文化財センター『石走山遺跡』(1993) 山口県埋蔵文化財センター『明地遺跡Ⅱ』(1994) 山口県埋蔵文化財センター『木ノ井山古墳』(1994) 田布施町教育委員会『納蔵原古墳』(1996) 山口県『山口県史 資料編 考古Ⅰ』(2000) 宮田伊津美『図説 岩国・柳井の歴史』(2005) 山口県埋蔵文化財センター『石走山遺跡Ⅱ』(2006) 山口県文書館『防長風土注進案』

Ⅱ 調査に至る経緯と調査の概要

中国四国農政局は、柳井市、熊毛郡田布施町及び光市の一部で、ほ場整備事業（南周防農地整備事業）を実施することになった。これに伴い、平成22年度に山口県教育委員会による試掘調査が行われた。その結果、開明遺跡では竪穴建物等の遺構が確認されたほか、弥生土器、須恵器などが出土し、尾尻遺跡でも、土師器、須恵器、土錘などが出土した。これを受けて、山口県教育委員会と中国四国農政局などの関係機関によって協議が重ねられ、現状保存が困難な開明遺跡2,300㎡、尾尻遺跡2,700㎡を対象に、記録保存を図るための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、中国四国農政局からの委託を受けた財団法人（現 公益財団法人）山口県ひとつくり財団・山口県埋蔵文化財センターと田布施町教育委員会が平成23・24年度の2年間にわたり実施した。なお、関係機関との事前協議の中で、両遺跡とも排土場を十分に確保できず、調査対象地区を一括調査することが難しいと判断されたため、調査区を分割し、実施時期を2期に分けて調査を進めることとなった（第2図）。また、現地調査を始めるにあたっては、関係機関との打ち合わせや調査区の現況確認、環境整備等を行い、近隣の小・中学校、警察署、消防署等に安全確保のための理解と協力を要請した。

平成23年11月28日、重機による表土除去作業を尾尻遺跡から開始し、12月2日に現地事務所を設置した。12月4日には開明遺跡でも表土除去作業を開始し、6日に両地区の作業を終了した。同日、発掘調査器材等を搬入し、作業員による遺構検出、掘り込み作業等を本格的に開始した。調査の進展に伴い、両遺跡に国土座標杭を設置し、以後はこれを基準に調査員が各遺構の実測図等を随時作成し、あわせて記録写真撮影を行った。

開明遺跡には、調査区内を中央部から東部に横断する水路がある。表土除去後に、この水路下にも遺構が埋存する可能性が高まったため、平成24年1月5日より、これを撤去し、新たに仮設水路を設置する工事を行った。また、調査区内は南側斜面から常時雨水や地下水が染み出し、頻繁に排水する必要があったため、土置場に濁水処理装置を設置し、泥水対策を講じた。

尾尻遺跡では調査の結果、調査区南側の一部（約350㎡）において、堆積した遺物包含層の下層約40cmで新たに遺構が確認されたため、改めて1月23日より重機による土砂除去作業を行い、遺構検出、掘り込み作業を進めた。



表土除去



遺構検出作業

平成24年に入ると、気温が平年を大きく下回り、遺構面が凍結する日々が続いたため調査の進行は大幅に遅れたが、3月になると好天に恵まれて作業は順調に進み、3月14日に空中写真撮影、空中写真測量を実施し、完掘状況および周辺地形等を記録した。その後、3月22日に平成23年度の現地調査を終え、山口県埋蔵文化財センターにおいて整理作業を行った。



空中写真撮影・測量

平成24年度は6月中旬に現地での作業を開始した。23年度の調査状況から、開明遺跡においては、調査区内のみで排土処理を行うのは困難であると判断し、調査区から約300m離れた地点に仮設土置場を設定して、排土を搬出することとした。調査開始時期が梅雨時と重なったため、思うように作業が進まず、最終的に両遺跡の表土除去作業を終了するまでに1か月を要したが、その後は梅雨明けとともに天候も安定し、8月、9月と作業員を動員しての遺構検出、掘り込み作業は順調にすすめることができた。



現地説明会

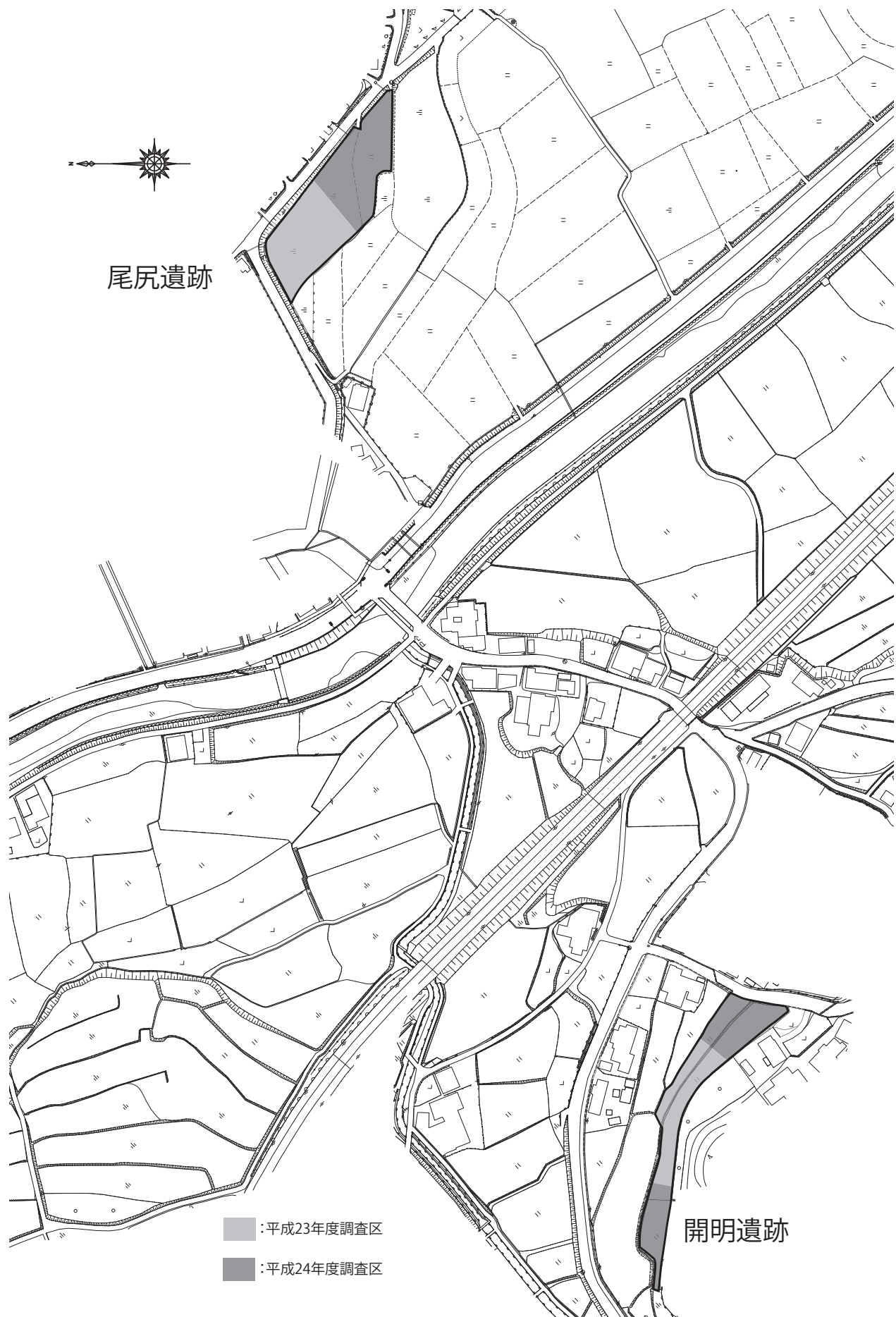
開明遺跡東側の一部（約160㎡）では、調査の結果、当初の遺構面よりさらに20～40cm下層に遺構が確認されたため、上層面完掘後の写真撮影、グリッド実測等による記録保存終了後、再度重機による表土除去、人力による遺構検出を行った。約50個の柱穴が確認された。

尾尻遺跡では、10月12日に竪穴建物跡から、県内遺跡では初めての出土例となる古代の銅印が出土した。なお、この銅印は、劣化・腐食を防ぐため専門業者に委託して保存処理を行った。

調査も終盤に近づいた11月9日、今年度調査区の空中写真撮影、空中写真測量を行った後、11月17日に城南小学校体育館にて、それまでの調査で得られた成果を公開する現地説明会を開催した。当日はあいにくの雨で調査区内を公開することはできなかったが、映像による遺跡の紹介と銅印をはじめとする出土遺物の解説を行い、約130名の参加者があった。また、1月28日、10月11日には、隣接する田布施町立城南小学校の児童が発掘体験学習を行った。身近な文化財に触れる貴重な機会となったようである。

その後、記録作成や両遺跡の埋め戻し作業を行い、現地での調査を12月17日に終了した。これを受け、翌12月18日に、中国四国農政局南周防農地整備事業所による完了確認の後、現地を引き渡した。

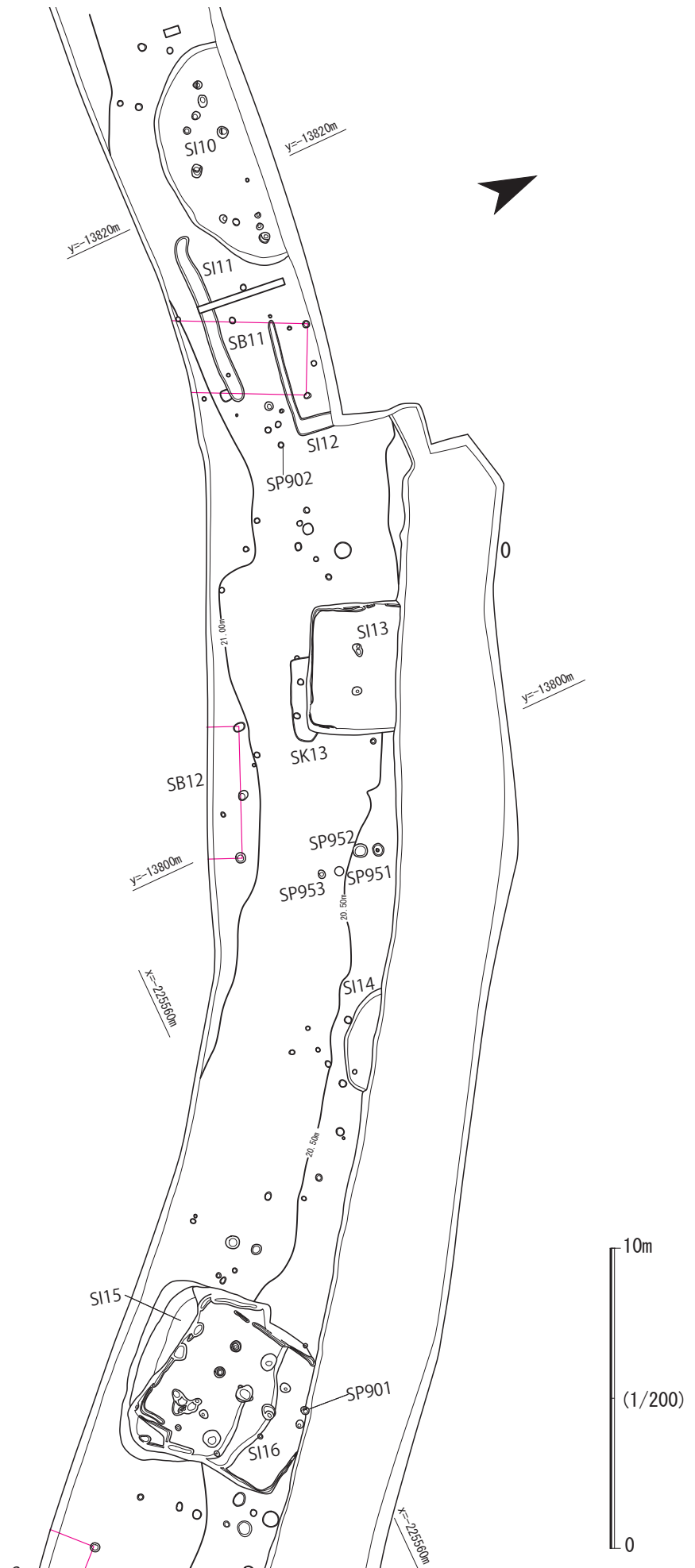
以後、かねてから進めていた記録類の整理に本格的に着手し、新たに遺物の実測図作成および写真撮影を行った。あわせて、挿図・写真図版の作成、原稿執筆等の作業を続け、平成25年3月21日に発掘調査報告書（本書）を刊行した。



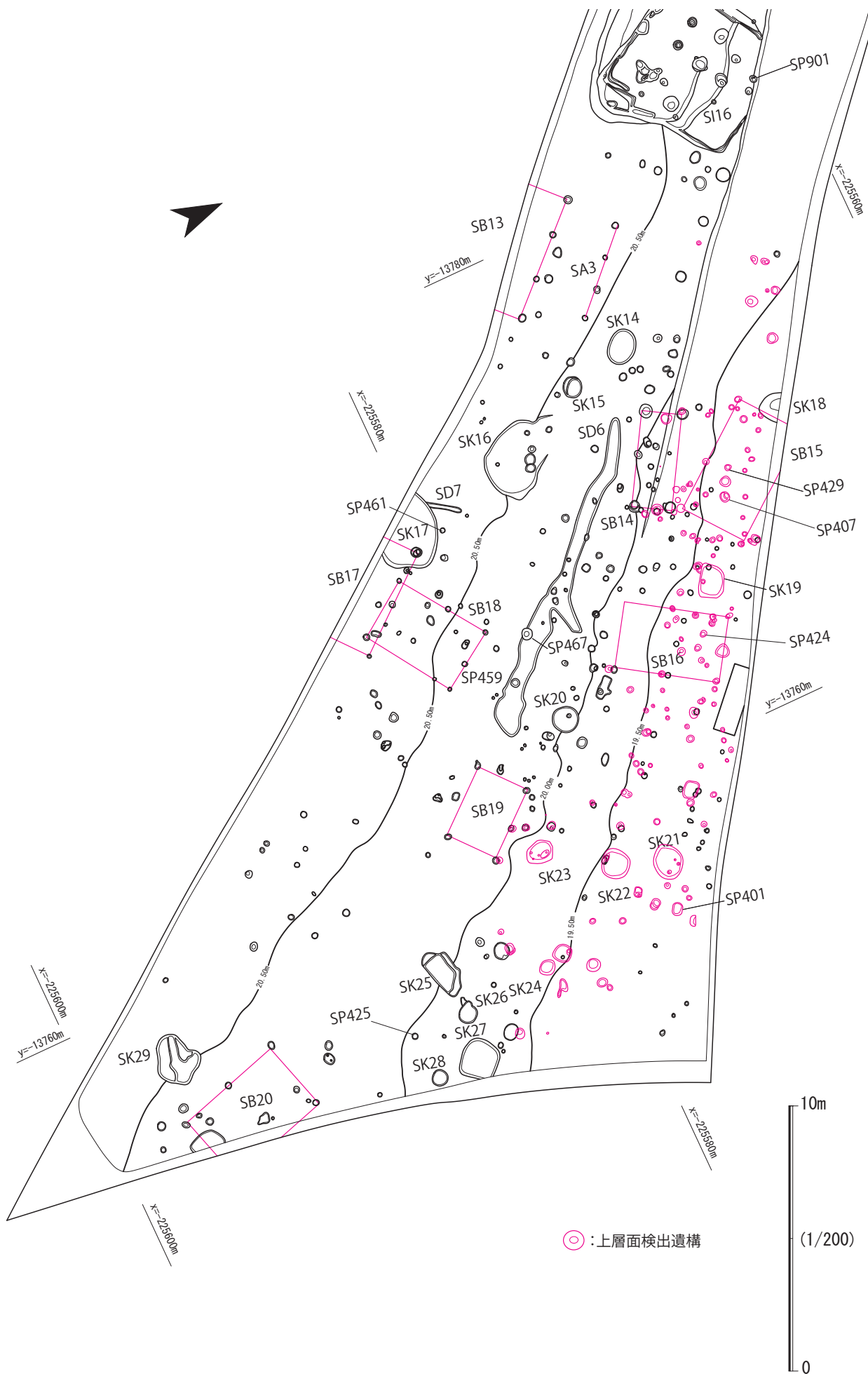
第2図 遺跡周辺図



第3図 開明遺跡西部遺構配置図



第4図 開明遺跡中央部遺構配置図



第5図 開明遺跡東部遺構配置図

Ⅲ 開明遺跡調査の成果

1 遺構

今回の調査では、竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡20棟、柵列跡3条、溝7条、土器棺墓3基、土坑29基、柱穴約980個を検出した。遺構の密度は、調査区の西側が最も高く、中央付近は希薄になり、東側で再び増加する。周囲より一段低くなっている中央北側は、水田造成時に削平を受けたと考えられ、遺構はほとんど検出できなかった。遺構面は黄橙色粘質土層上面であり、これを灰褐色マンガン混じり土ないし暗褐色砂質土（遺物包含層）が覆っている。調査区中央から西側にかけての狭小な地域と北東側では、この遺物包含層上面を遺構面とする一帯がある。なお、この遺物包含層からは弥生土器や須恵器などの遺物が多量に出土した。以下に主な遺構を紹介するが、平成23年度調査区を中央部、平成24年度西側調査区を西部、同東側調査区を東部と表す。

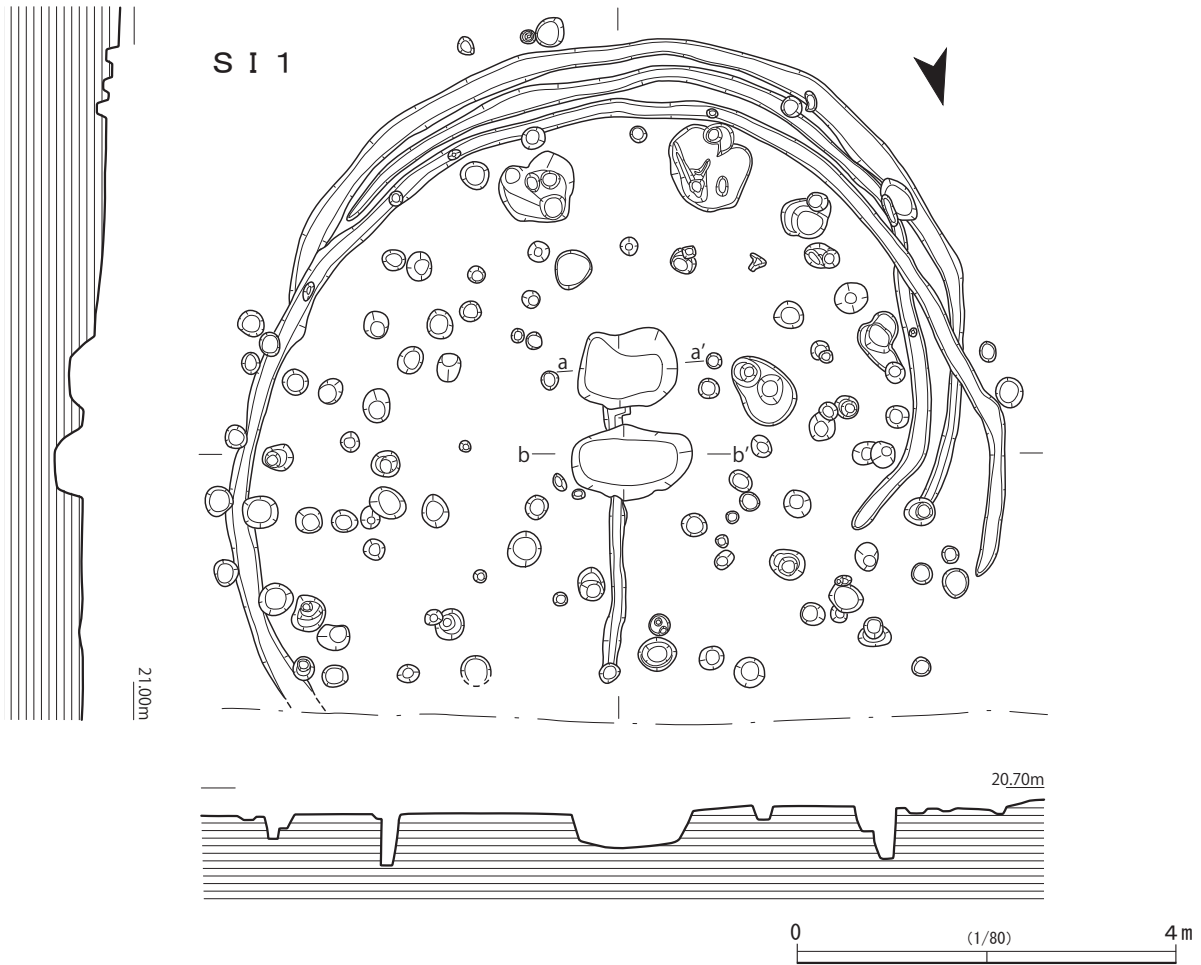
(1) 竪穴建物跡

今回検出された竪穴建物跡16棟は、8棟が西部、残りの8棟が中央部に位置しており、東部では確認されなかった。平面形が円形を呈する建物跡は3棟で、ほかはいずれも方形である。また、屋外に周溝を伴う建物跡が1棟ある。調査区は南から北に向かって緩やかに傾斜しており、竪穴建物等の大型遺構は、いずれも地形の傾斜に合わせて斜面下位側の北側が流出しやすく、残存状況が良好なものは少ない。

S I 1（第6図 図版3）西部に位置する大型の円形建物跡である。遺構上面をかなり削平されており、周溝のみが残存していた。規模は東西方向で約8mである。また、少なくとも3条の周溝を確認でき、建て替えが行われたと考えられる。建物内には屋内土坑、炉跡とみられる中央穴を有しており、炉から屋外に向けて排水溝が敷設されている。建物内部には無数の柱穴跡があり、主柱穴を特定するのは困難である。なお、中央の屋内土坑からは弥生土器の壺・甕・甑などが出土した（第20図1～6）。弥生時代中期後半に比定される。

S I 2（第7図 図版4）西部に位置し、今回の調査では唯一明瞭な屋外周溝を有する。主体は方形の建物跡で、一辺の長さは東西方向が4.6mであるが、南北方向は北側が削平されているため不明である。壁下の周溝は確認できなかった。残存する壁高は南側で5～12cmである。主柱穴は4本であり、そのうち南東側の柱穴からは土師器甕（第20図11）が出土している。主体となる建物と比較して屋外周溝の残存状況は良好で、最大幅は60cmを超え、南側では深さ24～32cmを測る。なお、この屋外周溝からは弥生土器、土師器などが多量に出土した（第21図12～30）。弥生時代終末期～古墳時代前期に比定される。

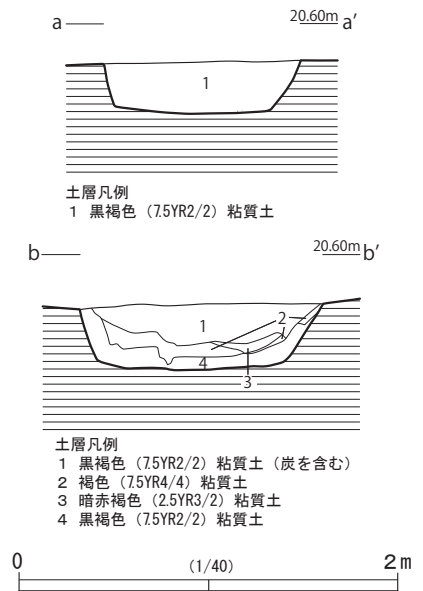
S I 7・8（第8図 図版5）西部と中央部の境に位置する、いずれも方形の建物跡である。先後関係はS I 8廃絶後S I 7が構築されたと考えられる。S I 7は東西に3.4m、南北は推定で3.5mの規模をもつが、土層観察では掘り込み面を確認できなかった。壁下を周溝が巡り、主柱穴は2本で、建物西側には造り付けのカマドと考えられる施設がある。残存壁高は南側で28cm。残存する周溝幅は2～10cm、深さは2～5cmである。弥生土器や土師器（第22図31～54）、磨石（第39図306）などが出土した。S I 8は東西に6.4mの規模をもつが南北方向は不明である。主柱穴は4本で、建物



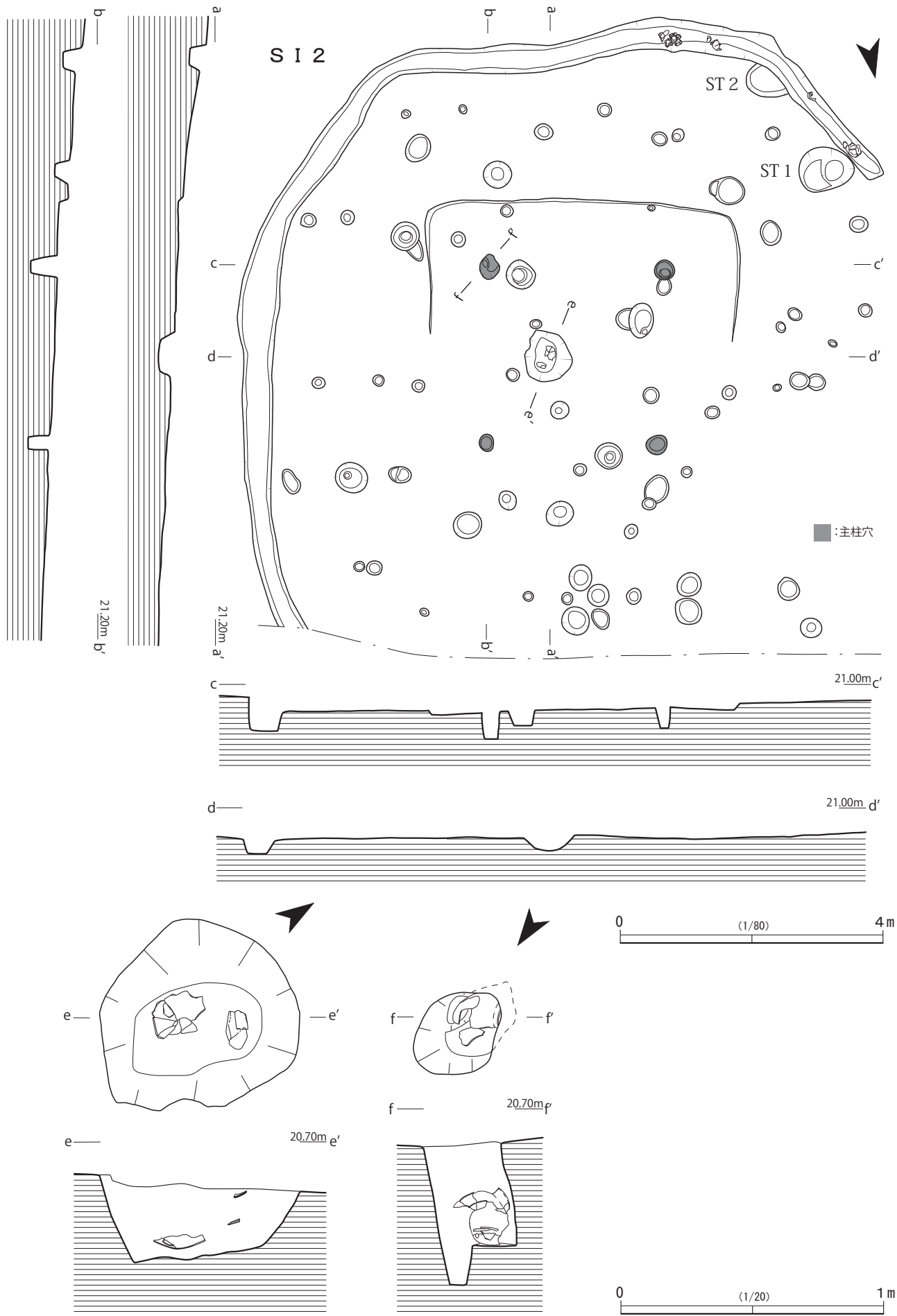
の東側をSK 9、西側をS I 7にそれぞれ切られている。建物の東西に周溝とみられる溝があり、東側では2条確認できるため、建て替えが行われた可能性を指摘できる。なお、このS I 8からは絵画土器（第23図 64）をはじめ、弥生土器壺・甕・鉢、土師器高杯などが出土した（第23図 55～66）。S I 8が弥生時代終末期、S I 7が古墳時代前期にそれぞれ比定される。

S I 13（第9図 図版6） 中央部に位置する方形建物跡である。東西に4.4mの規模をもつが北側は削平されている。壁下を周溝が巡り、周溝の最大幅は16cm、残存する壁高は最大で38cmである。支柱穴は2本。建物の底面近くからは木炭、土師器高杯（第26図 110）などが出土した。古墳時代前期に比定される。

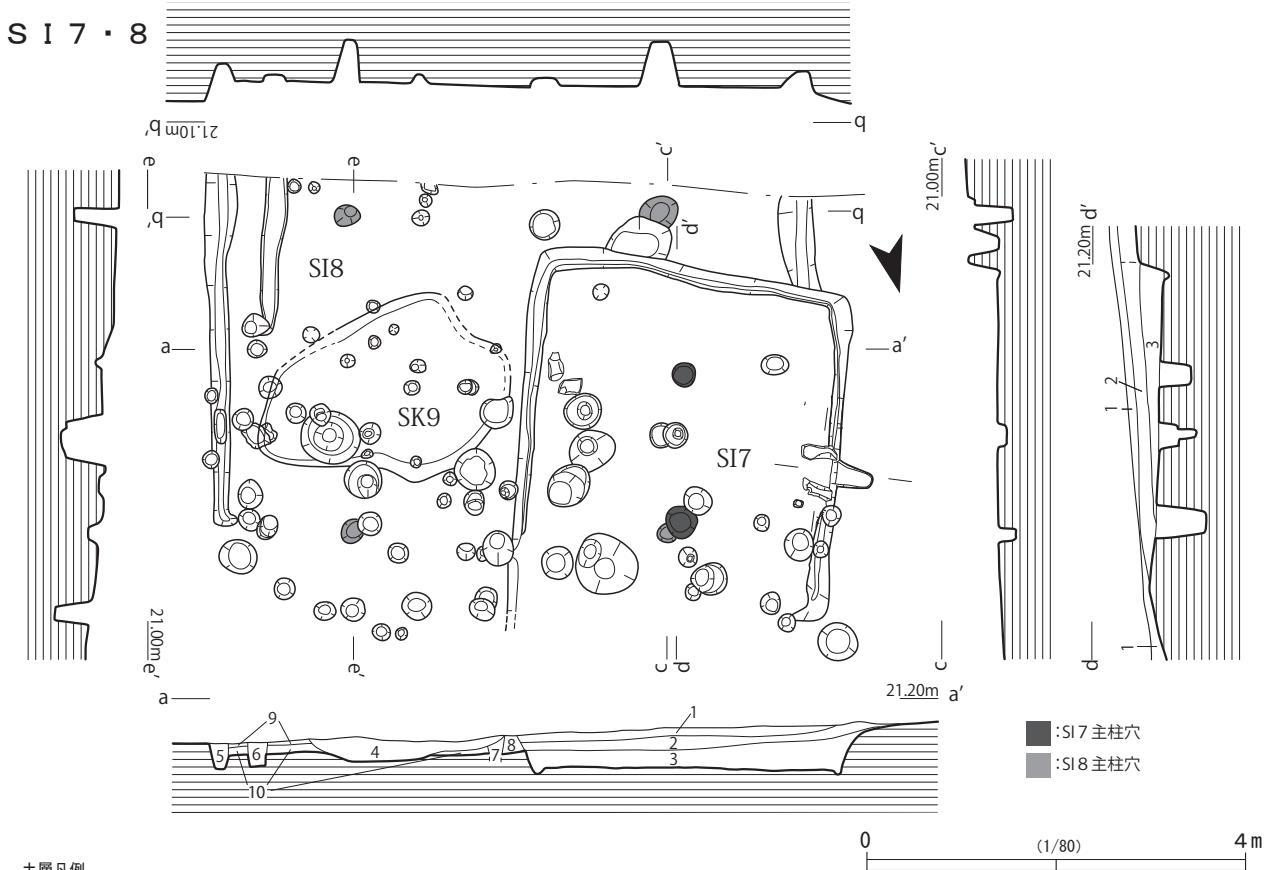
S I 10（第9図 図版6） 中央部西よりに位置する円形の建物跡である。北半部は調査区外へ続くが、東西方向に7.7mの規模をもつ。南側の壁高は約36cm。弥生土器壺・甕をはじめ、ミニチュア土器、紡錘車、分銅形土製品など、多量の遺



第6図 S I 1 実測図



第7图 S I 2 实测图



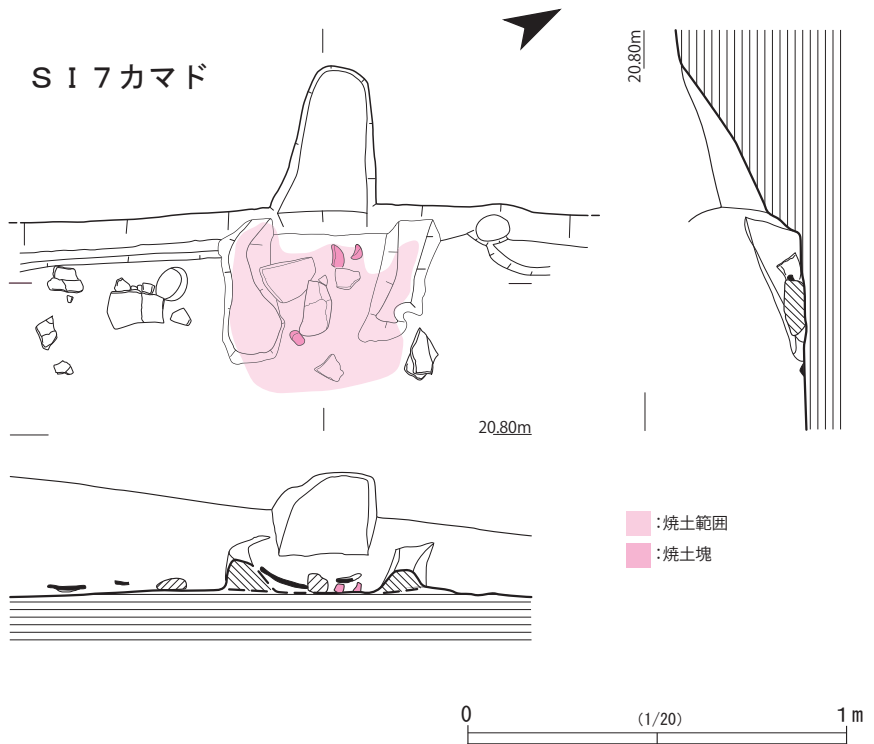
土層凡例

- 1 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土に暗褐色 (7.5YR3/4) 砂質土がわずかに混じる
- 2 黒褐色 (7.5YR3/2) 弱粘質土に明褐色 (7.5YR5/6) 弱粘質土がわずかに混じる
- 3 黒褐色 (7.5YR3/2) 弱粘質土に明褐色 (7.5YR5/6) 弱粘質土が多く混じる
- 4 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土に明褐色 (7.5YR5/6) 弱粘質土が多く混じる
- 5 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土に褐色 (7.5YR4/6) 砂質土が多く混じる

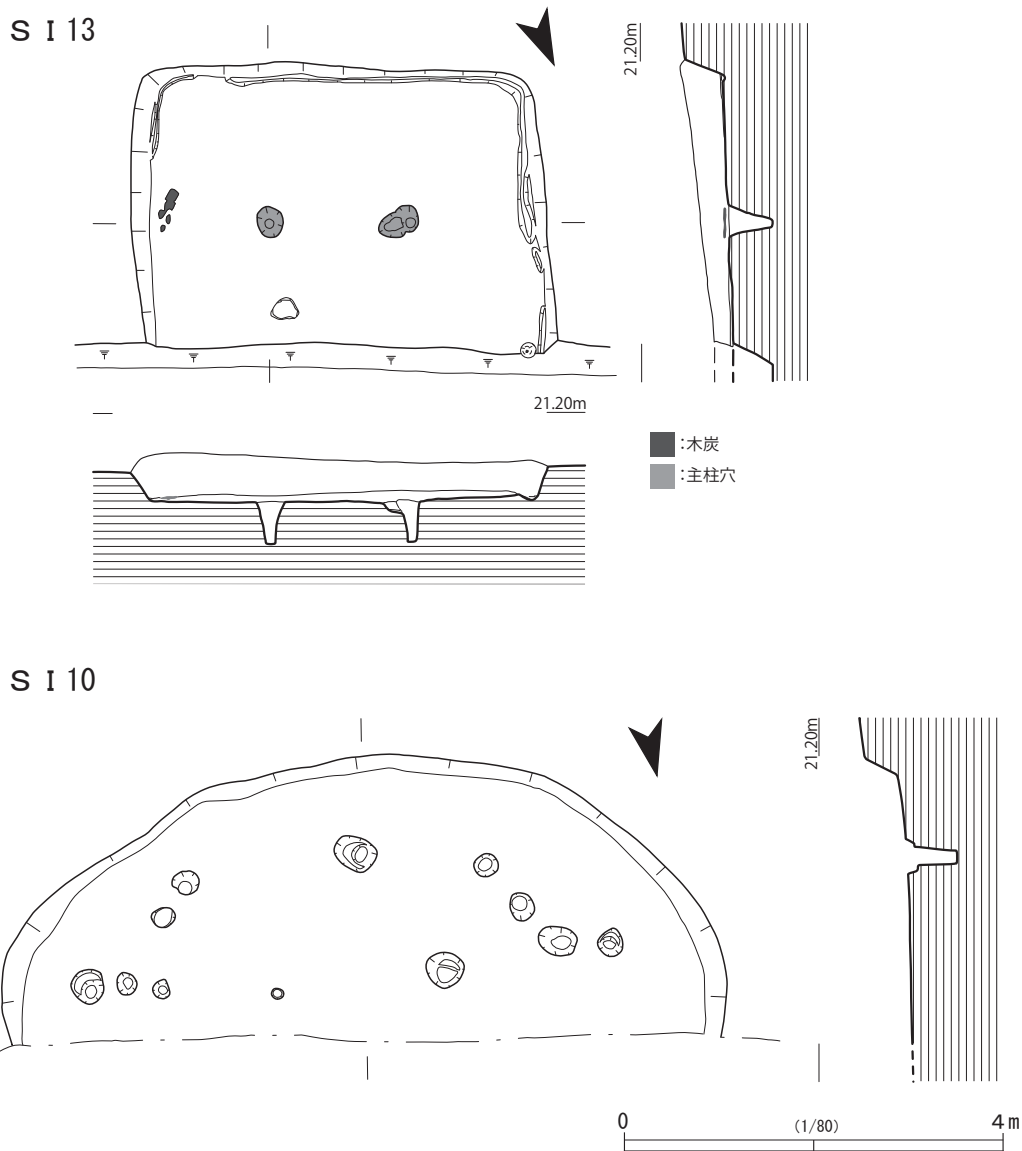
- 6 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土に褐色 (7.5YR4/4) 砂質土がわずかに混じる
- 7 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土ににぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土が混じる
- 8 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土
- 9 黒褐色 (5YR3/1) 砂質土に褐色 (7.5YR4/4) 砂質土がわずかに混じる
- 10 明褐色 (7.5YR5/6) 弱粘質土と黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土の混合土

物が出土した (第24・25図 68～102)。弥生時代中期後半に比定される。

SI 15・16 (第10図 図版 7) 中央部東よりに位置するいずれも方形の建物跡である。SI 15は東西に6.0m、南北は推定で4.2m。主柱穴の数や周溝の有無は不明であるが、規模から建物跡と判断した。残存する壁高は最大で約70cmを測る。弥生土器壺・甕などが出土した (第27図 114～132)。SI 16の規模は南東-北西方向に5.2m、北東-南西方向に推定で5.3mである。内部には周溝の一部がわず



第8図 SI 7・8実測図



第9図 S I 13・10実測図

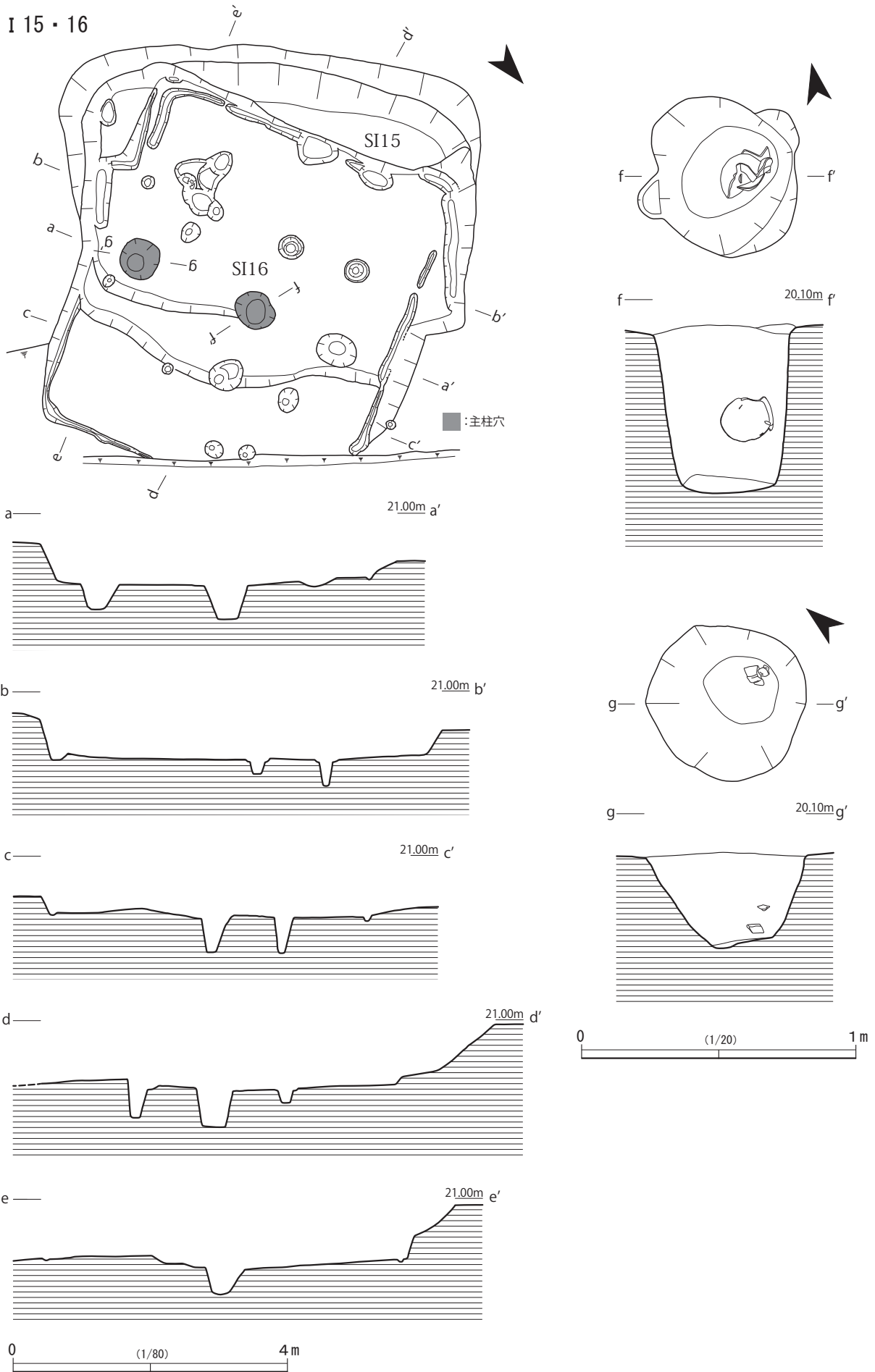
かに残る。支柱穴は中央の2本と考えられるが、中心よりも東側に配置されており、土師器甕（第27図 135）とミニチュア土器（第27図 136）がそれぞれ出土した。建物の廃絶儀礼と考えられる。土層観察から先後関係を明らかにすることはできなかったが、出土遺物からS I 15廃絶後S I 16が構築されたと考えられ、S I 15は弥生時代終末期、S I 16は古墳時代前期にそれぞれ比定される。

なお、本文中で取りあげなかった建物跡については、S I 5が弥生時代中期後半、S I 9が弥生時代終末期、S I 11が古墳時代前期、S I 14が弥生時代後期にそれぞれ比定され、それ以外のものについては不明である。

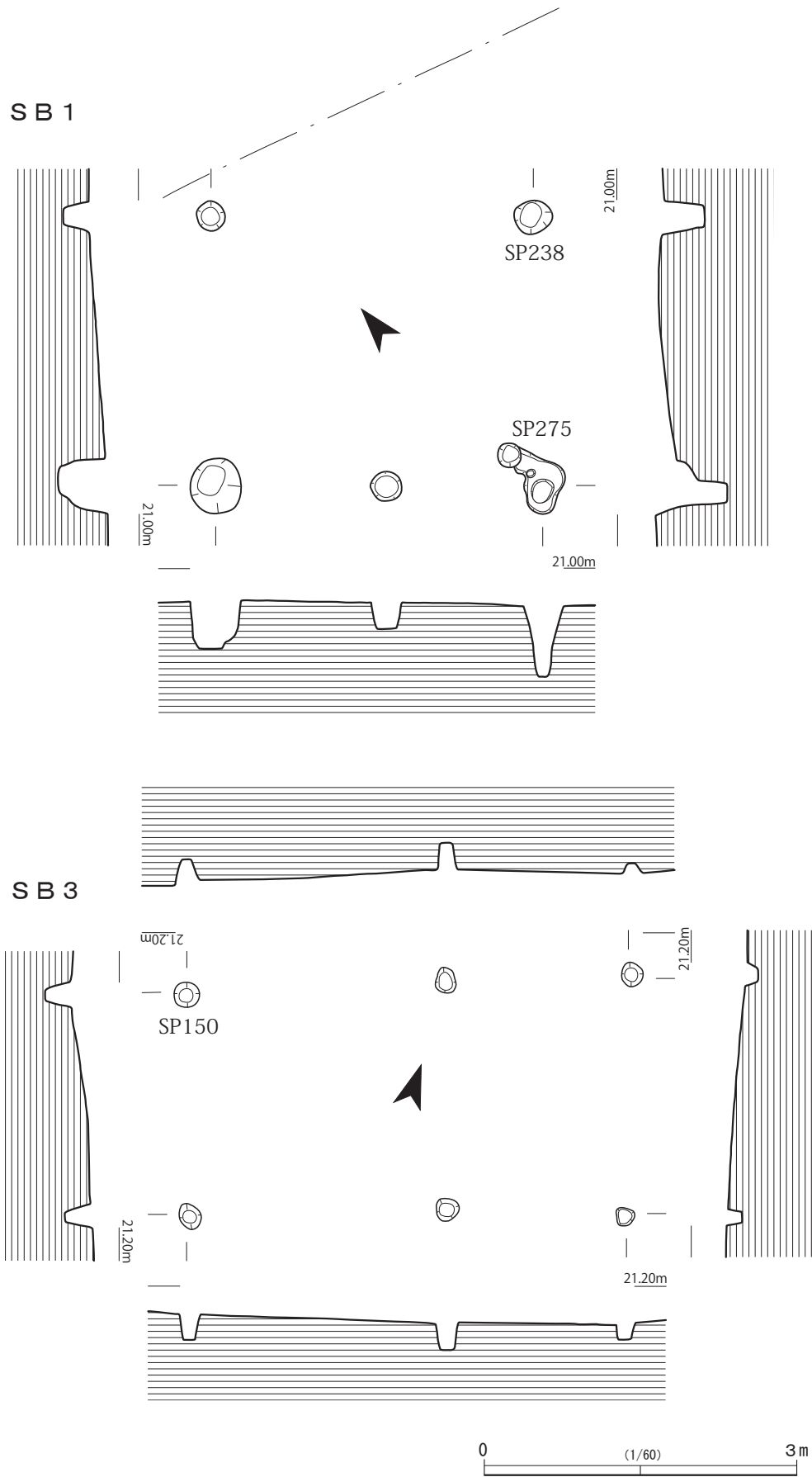
（2）掘立柱建物跡

掘立柱建物として20棟が復元できた。特に西部に柱穴が密集しており、継続的に居住し、建て替えが行われていたことがうかがえる。調査区の南北方向の距離が5～20mと短いこともあり、建物群の棟方向の明確な規則性は確認できなかった。柱の大きさに比べ柱穴の大きい、倉庫としての用途を

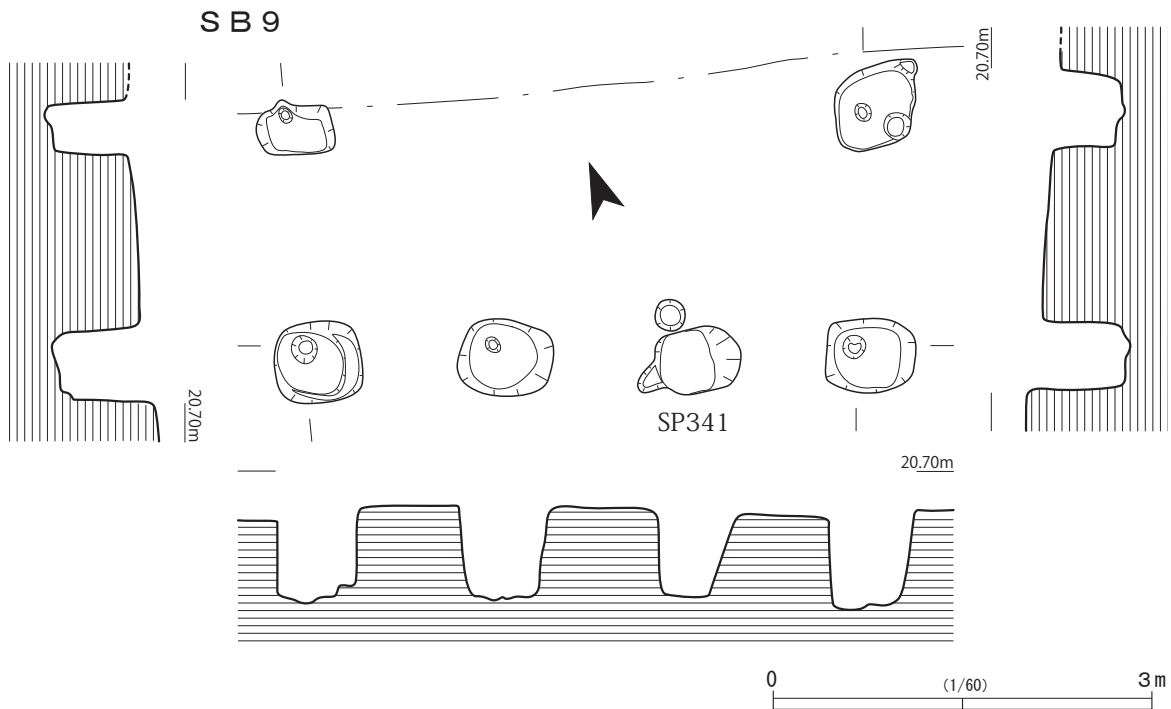
S I 15 · 16



第10图 S I 15 · 16实测图



第11図 SB 1・3実測図



第12図 SB9実測図

もつ可能性のある建物が2棟復元されている。

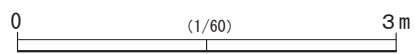
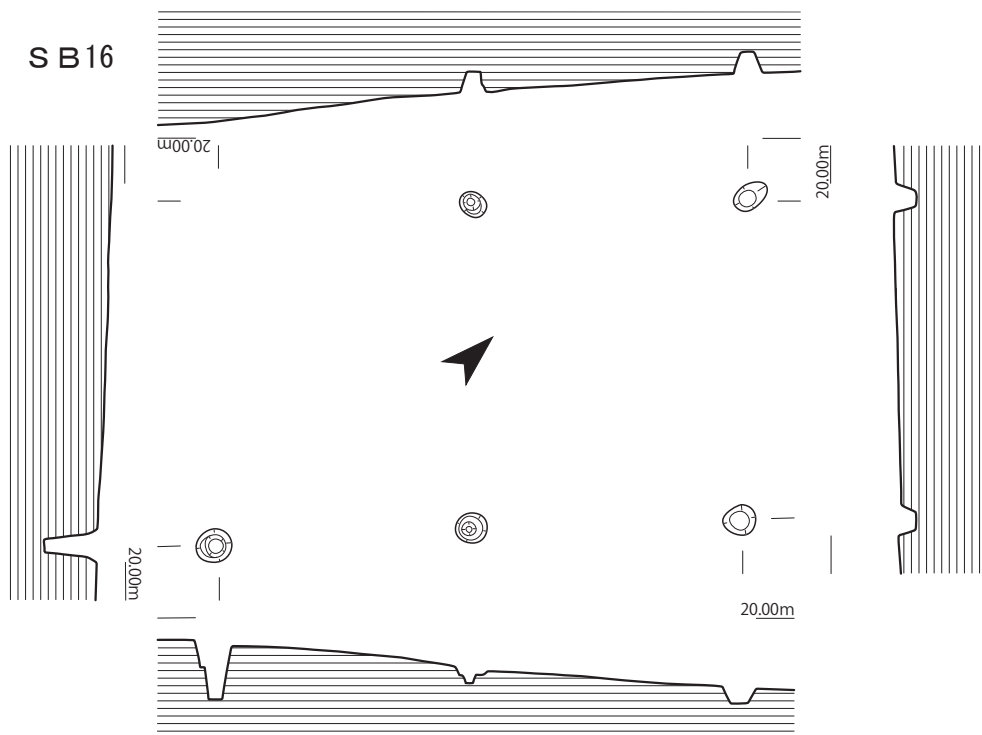
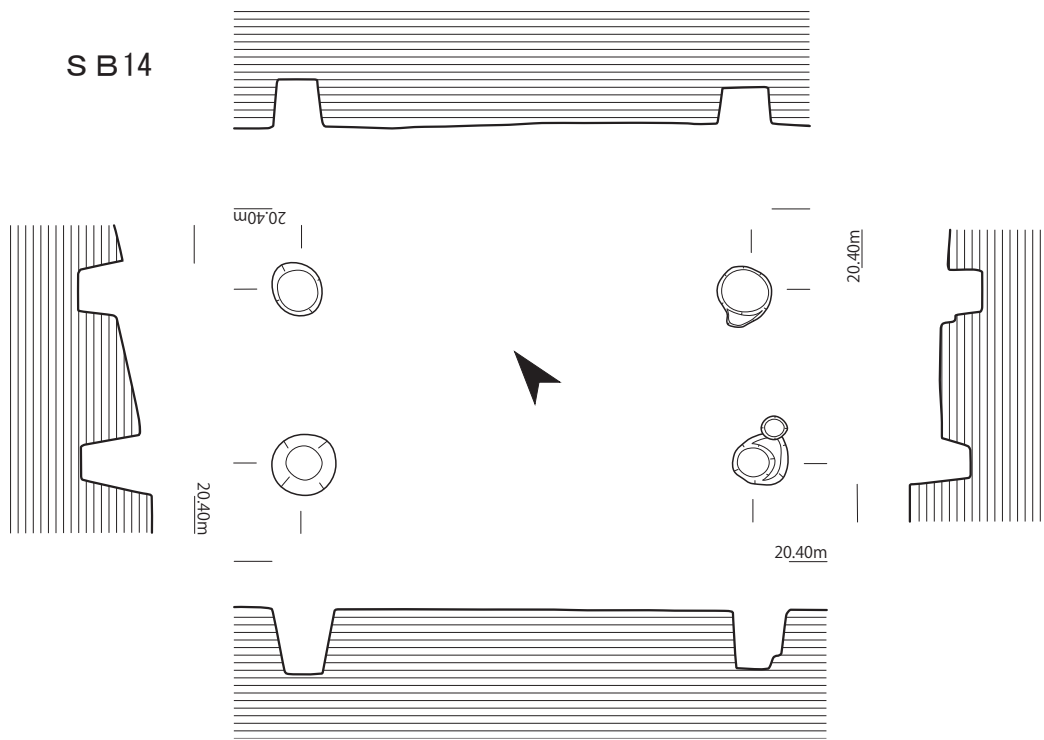
SB1 (第11図 図版8) 西端に位置する建物で、残存する規模は1間(2.5m)×2間(3.2m)であるが、柱穴の位置関係から建物の北東側は調査区外へ続く可能性がある。棟方向はN35°Eと推定される。建物を構成するSP275(第17図 図版10)から弥生土器の甕(第32図 183)・高杯(第33図 191)が出土した。出土遺物から弥生時代中期末に比定される。

SB3 (第11図 図版8) 西部に位置する建物で、桁行2間(4.2m)×梁行1間(2.1m)、床面積8.82㎡を測る。棟方向はN63°Eである。建物を構成するSP150(第17図 図版10)から弥生時代のものと考えられる磨製石斧(第39図 304)が出土した。

SB9 (第12図 図版8) SI7・8の北側に位置する建物で、建物の北側は調査区外へ続くと推定される。規模は、桁行3間(4.4m)×梁行1間以上(1.8m以上)を測る。棟方向はN70°Wである。柱穴の掘方は隅丸方形をなし、長軸は70cm、短軸は50cmを超える。また柱間寸法は南北方向で1.8m、南側の東西方向で東へ向けて1.5m+1.4m+1.5mである。柱痕に比較して、柱穴が大きく深いことから、倉庫として使われた建物の可能性もある。建物を構成する柱穴であるSP341から弥生土器の壺(第32図 177)、SP205から剥片石器(第38図 298)等が出土した。これらの遺物から弥生時代後期の建物と考えられる。

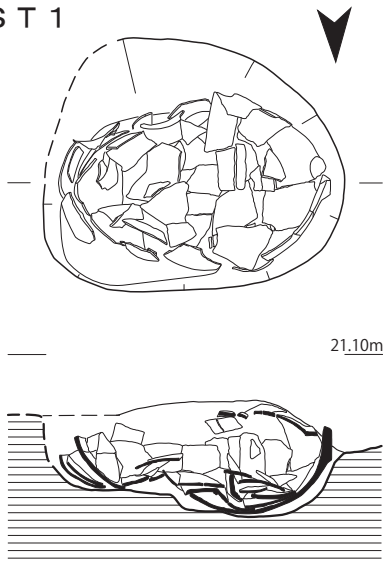
SB14 (第13図) 東部に位置する建物で、桁行1間(3.6m)×梁行1間(1.4m)、床面積5.04㎡を測る。棟方向はN59°Wである。この建物も柱穴の掘方が大きく、倉庫としての用途も考えられる。建物を構成する柱穴から弥生土器、土師器が出土したが、小片のため詳細な年代は不明である。

SB16 (第13図) 東部の上層遺構面で確認できた建物である。桁行2間(4.2m)×梁行1間(2.6m)、床面積10.92㎡を測る。棟方向はN38°Eである。建物を構成する柱穴から弥生土器が出土した。

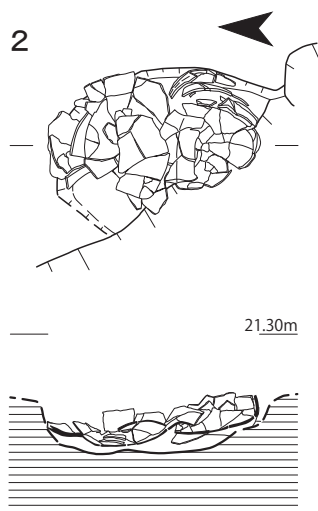


第13图 SB14・16実測図

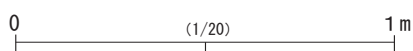
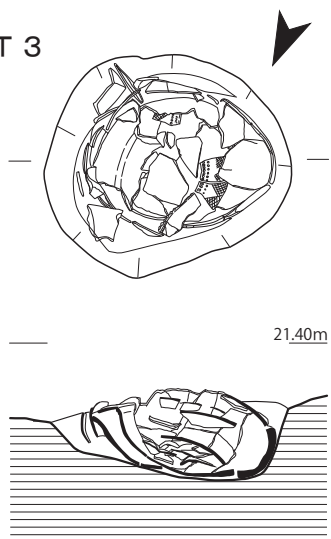
ST 1



ST 2



ST 3



第14図 ST 1・2・3実測図

(3) 墓

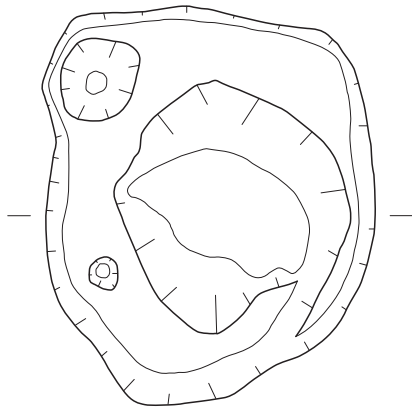
SI 2の南側周溝部付近で土器棺墓が3基検出された。棺身となる土器の大きさは38～48cmであり、いずれも新生児から幼児の遺体を、住居である竪穴建物のすぐそばに埋葬したものと考えられる。出土遺物から弥生時代終末期に比定される。またST 1～ST 3のいずれの土器棺墓とも、湿性な環境であり、小児遺体のためその成分が少なかったのか、リン酸・カルシウム分析では、遺体を埋納した明確な根拠は得られなかった。詳しい分析結果は付編を参照されたい。

ST 1 (第14図 図版9) SI 2の南西側周溝部の内側に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸77cm、短軸65cm、深さ31cmを測る。この中にほぼ隙間なく、棺身となる大型の壺(第28図 138)とその棺の蓋として使用された壺(第28図 139)が据えられていた。棺身の口縁部は東に向けられ、ほぼ水平に納められていた。さらに棺身と蓋の接合部周辺を甕2個体(第28図 140・141)で覆っていた。棺身の壺は遺体を納めるため、頸部から上を打ち割られ、その破片である口縁部は同じ土器棺墓内に納められていた。また、接合部を覆う甕の土器片の一部が棺の支えに利用されていた。人骨や遊離歯冠は出土せず、副葬品も伴っていない。

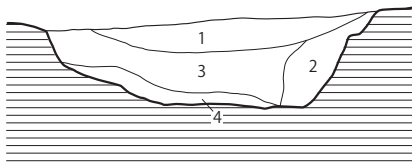
ST 2 (第14図 図版9) SI 2の南側周溝部の内側に位置する。周溝に接しており、土器棺墓の南西側の境は明確でない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸64cm、深さ14cm、残存する短軸40cmを測る。ST 1と同様の形態で、頸部を割られた大型の壺(第28図 143)の棺身とその蓋となる甕(第28図 146)が据えられ、その接合部を甕1個体(第28図 145)および壺の口縁部片(第28図 144)で覆う。棺身の口縁部は南に向けられ、やや口を上に向けた状態で納められていた。墓坑の大きさがほぼ土器棺に合わせて掘られ、甕の破片および棺身の壺の頸部片を棺の支えとしている。上面は削平されたと考えられ、棺身と蓋となる甕は上部を欠いた状態で出土した。人骨や遊離歯冠は出土せず、副葬品も伴っていない。

ST 3 (第14図 図版9) SI 2の南側周溝部の外側に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸67cm、短軸56cm、深さ24cmを測る。棺身となる壺(第29図 147)の口縁部は東に向けられ、棺はやや斜め上方を向くように角度をもたせて納めら

SK 3



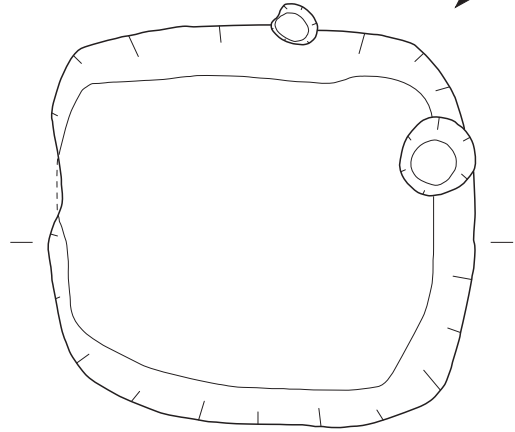
21.30m



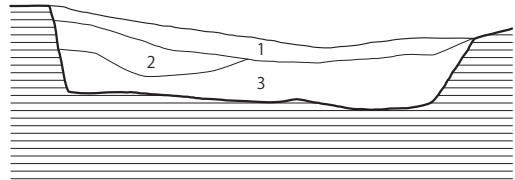
土層凡例

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 強粘質土 (土器片を多く含む)
- 2 橙色 (7.5YR6/8) 強粘質土
- 3 灰褐色 (7.5YR4/2) 強粘質土に黄褐色 (10YR5/8) 粘土がブロック状に混じる
- 4 黒褐色 (7.5YR3/1) 強粘質土

SK 2



21.30m

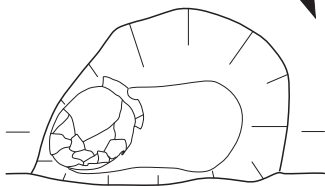


土層凡例

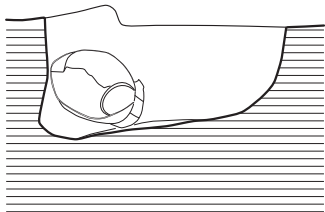
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土に褐色 (7.5YR4/4) 粘質土がブロック状に混入

0 (1/20) 1 m

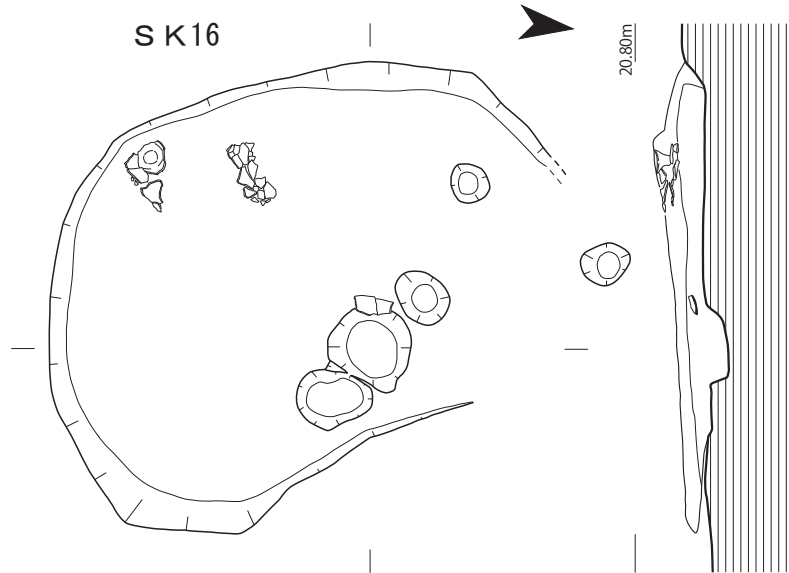
SK 8



20.90m

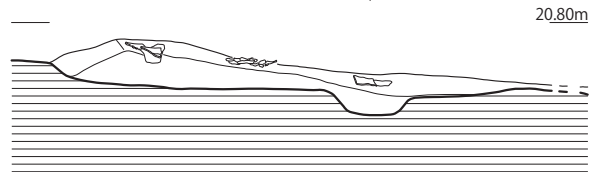


SK 16



20.80m

20.80m



0 (1/20) 50cm

0 (1/40) 2 m

第15図 SK 2・3・8・16実測図

れていた。また、棺蓋となる壺（第29図 149）は、その上部（第29図 148）を打ち欠いて、隙間に差し込んでいた。人骨や遊離菌冠は出土せず、副葬品も伴っていない。

（4）土坑

29基の土坑が検出された。中央部に少なく、西部と東部に多い。深さが20～30cm程度のもが多く、列をなして配置されたものは確認できなかった。以下、主なものについて取り上げる。

SK2（第15図 図版9） 西部に位置し、平面形は方形を呈する。規模は長軸110cm、短軸104cm、深さ30cmを測る。埋土中から弥生土器片が出土した。

SK3（第15図 図版9） 西部に位置し、平面形は不整形を呈する。規模は長軸106cm、短軸90cm、深さ24cmを測る。埋土中から弥生土器片が出土した。

SK8（第15図 図版9） 西部に所在し、SI7の南に位置する。SI7に切られ、SI8を切っているため、SI8の廃絶後、SI7が構築されるまでの間に存立したと考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸64cm、深さ33cmで、残存する短軸は38cmを測る。壁面の立ち上がりは比較的急で、直線的である。底面は平坦で底面付近から土師器の甕（第30図 165）が口縁部を水平よりやや下に向けた状態で出土した。出土遺物から4世紀代に比定される。

SK16（第15図 図版9） 東部に位置し、平面形は不整形を呈する。規模は長軸272cm、短軸188cm、深さ6cmを測る。比較的大型の土坑であるが、深度は浅く、貯蔵施設などに使われた竪穴建物の下部が残存した可能性もある。検出面に近い位置で、弥生土器の壺（第31図 170）が出土した。出土遺物から弥生時代中期に比定される。

SK6（第16図 図版9） 西部に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸214cm、短軸160cm、深さ8cmを測る。比較的大型の土坑であるが、長軸断面形は皿状で、周辺の土坑の深度に比べて浅い。検出面に近い位置で、弥生土器の壺・甕・高杯等（第30図 150～161）が出土した。出土遺物から弥生時代後期に比定される。

（5）溝

7条の溝が検出された。いずれも数cm～18cmと浅く、方向もまちまちである。また出土遺物も小片のものが多く、時期や年代も不明なものが多い。

SD2（第16図 図版10） SI7・8の西側に位置する。北から南へSI7にはほぼ並行する形で走行する。確認長は1.56m、幅17～29cm、深さ1～9.5cmである。埋土中から土師器の椀（第31図 171）が出土した。出土遺物から5世紀の遺構とみられる。

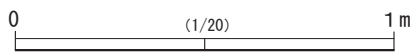
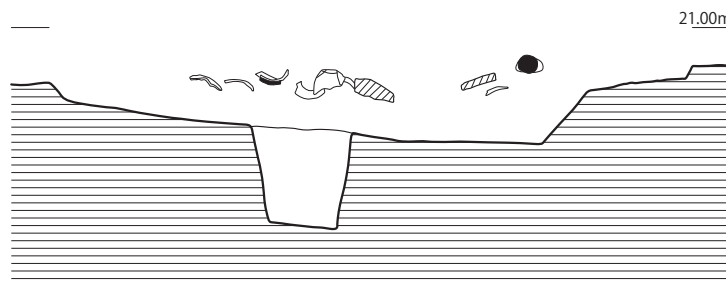
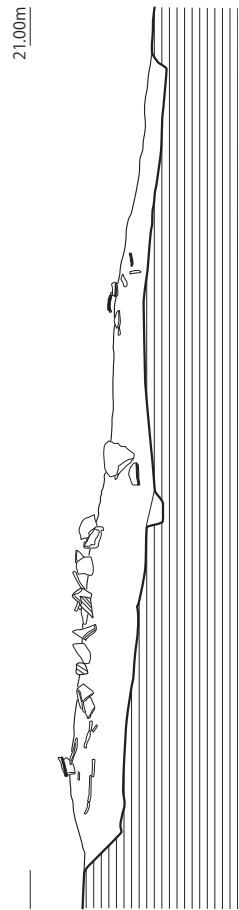
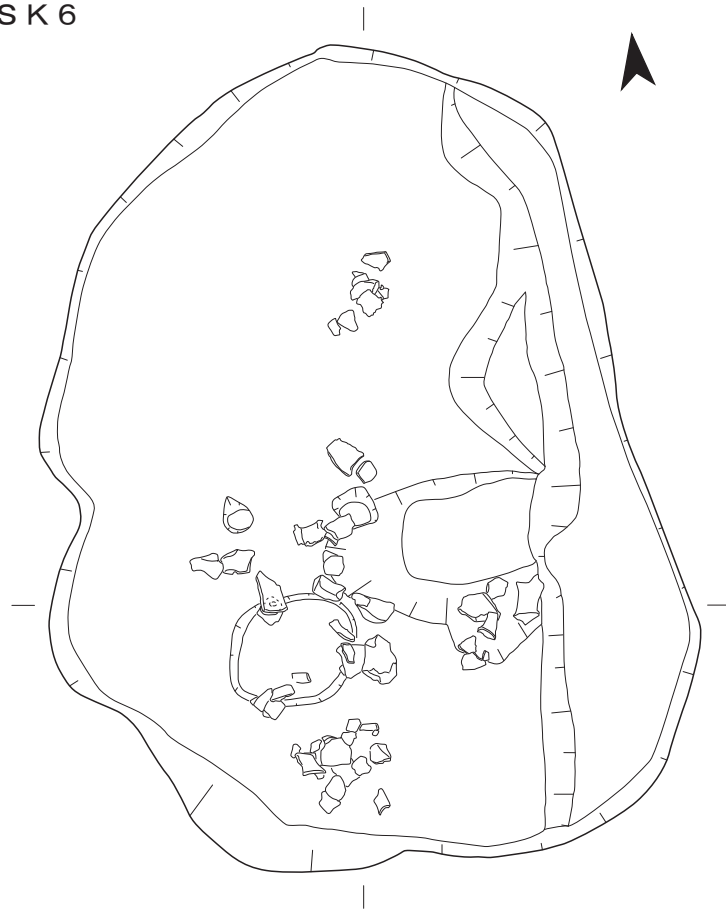
SD6（第16図） 東部に位置し、南東から北西方向へ走行し、中央部付近で一部が北東方向へ屈曲する。確認長は12.60m、幅48cm～102cm、深さ11～18cmである。埋土中から弥生土器片が出土したが、小片のため詳細な年代を決定する資料とはならなかった。

（6）柱穴

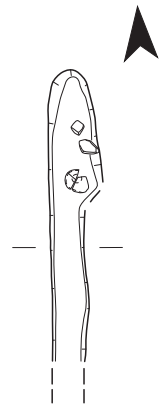
検出された柱穴は980個あまりで中央部に少なく、西部と東部に密集する。遺物が出土している柱穴は約450個である。以下、主なものについて取り上げる。

SP275（第17図 図版10） 西部のSI1内に位置する。SB1を構成する柱穴の一つである。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸51cm、短軸33cm、深さ68cmを測る。埋土上位で人頭大の角礫、その下

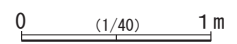
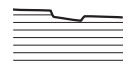
SK 6



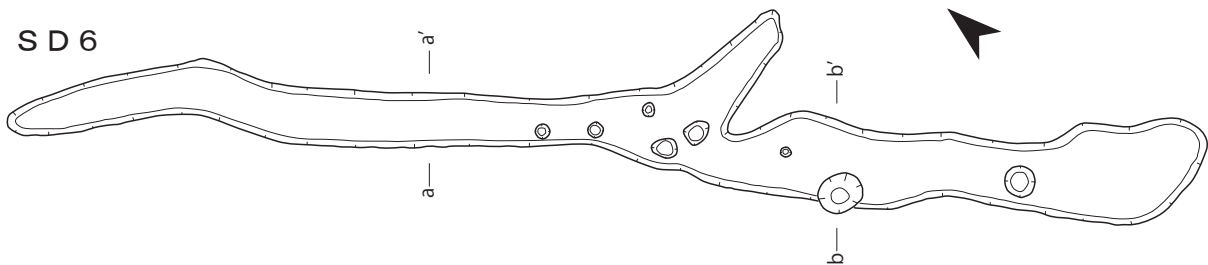
SD 2



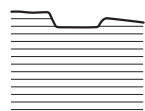
20.90m



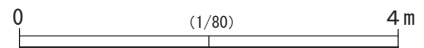
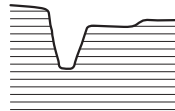
SD 6



a — 20.60m a'



b — 20.60m b'



第16图 SK 6 SD 2・6実測图

位から弥生土器の甕（第32図 183）・高杯（第33図 191）が出土した。

S P 114（第17図） 西部に位置し、S B 2を構成する柱穴の一つである。規模は径37～46cm、深さ48cmを測る。二段掘りされており、埋土中位で弥生土器の壺が角礫とともに出土した。

S P 150（第17図 図版10） 西部に位置し、S B 3を構成する柱穴の一つである。規模は径27～28cm、深さ30cmを測る。検出面に近い位置で磨製石斧（第39図 304）が出土した。

S P 901（第17図 図版10） 中央部のS I 16内に位置し、規模は径23～29cm、深さ30cmを測る。上面に近い位置で土師器の椀（第33図 199）が出土した。

S P 220（第17図 図版10） 西部やや中央よりに位置し、規模は径28～30cm、深さ45cmを測る。埋土下位で弥生土器の甕が出土した。

S P 353（第18図 図版10） 西部やや中央よりに位置し、規模は径40～44cm、深さ39cmを測る。埋土中位で拳大の複数の角礫とともに弥生土器の甕（第32図 182）、磨製石斧から転用された敲石（第39図 303）が出土した。

S P 281（第18図 図版10） 西部に位置し、規模は径44～55cm、深さ38cmを測る。検出面に近い位置で弥生土器の長頸壺（第32図 173）、底面よりやや上位で弥生土器の甕（第32図 187）が出土した。

S P 219（第18図 図版10） 中央部やや西よりに位置し、規模は径58～62cm、深さは8cmを測る。検出面に近い位置で弥生土器の壺（第32図 179）が出土した。

S P 401（第18図 図版11） 東部の上層遺構面で確認され、規模は45～53cm、深さ9cmを測る。検出面に近い位置で、高さ34cmの弥生土器の甕（第33図 188）が口縁部を横に向け、ほぼ水平に置かれた状態で出土した。リン酸・カルシウム分析では遺体の埋納を積極的に支持することは難しいという所見を得ている。詳しい分析結果は付編を参照されたい。

S P 399（第19図 図版11） 西部のS I 1内に位置し、平面形は楕円形を呈し、規模は長軸22cm、短軸14cm、深さ20cmを測る。底面よりやや上位で、弥生土器の壺の底部が伏せられた状態で出土した。

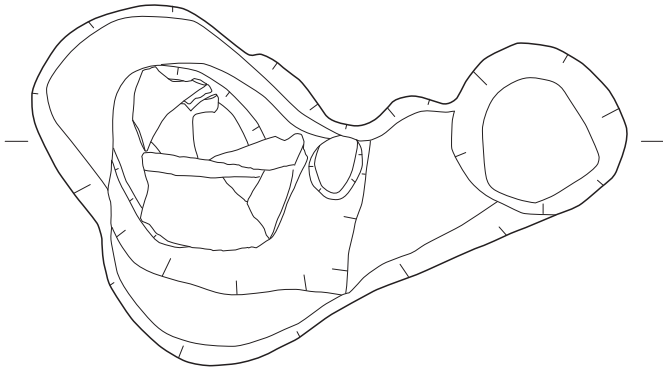
S P 909（第19図 図版11） 中央部に位置し、規模は径23～26cm、深さ42cmを測る。埋土下位で土師器の小型丸底壺（第33図 195）が出土した。

S P 467（第19図 図版11） 東部に位置し、S D 6を切っている。規模は径21～24cm、深さ37cmを測る。底面から土師器の鉢（第33図 189）が出土した。

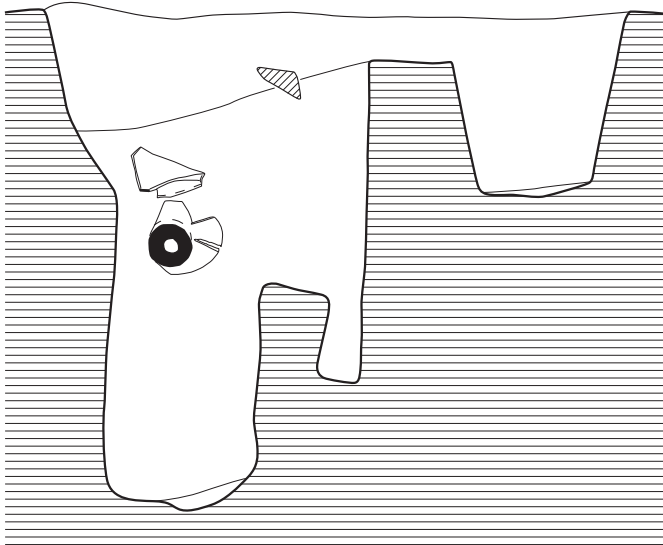
（7）遺物包含層出土ミニチュア土器群（第19図 図版11）

西部に位置するS I 2を覆う遺物包含層の中からミニチュア土器19個体がまとまって出土した。掘方は見られず、置かれたような状態で出土した。何らかの祭祀的な行為がそこで行われたか、ほかの場所で祭祀が行われた後に一括して投棄されたものと考えられる。まとまって出土したミニチュア土器は鉢が9個体（第37図 261～269）、壺が10個体（第37図 270～279）である。そのうちの9個体はほぼ完形の状態で出土した。出土遺物は弥生時代後期のものとみられる。

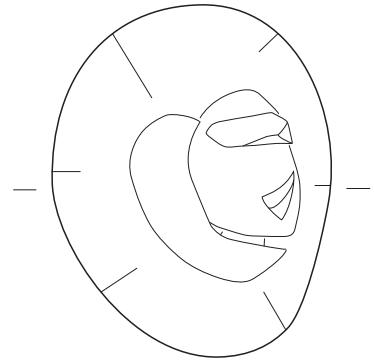
S P 275



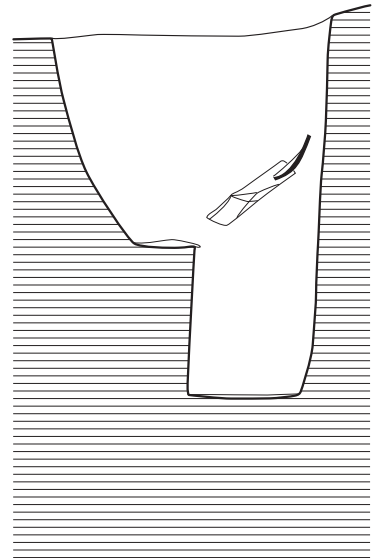
20.70m



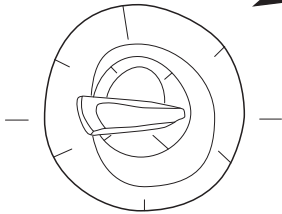
S P 114



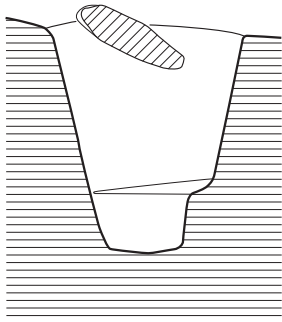
21.20m



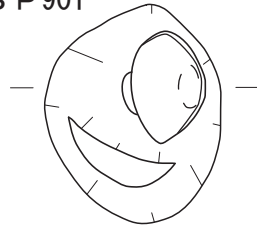
S P 150



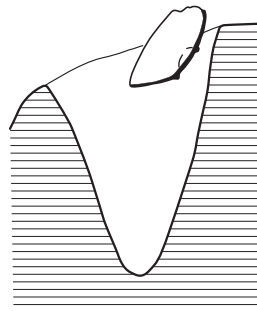
20.90m



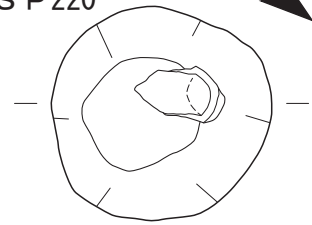
S P 901



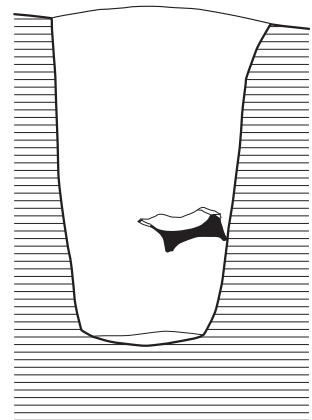
20.30m



S P 220



20.90m



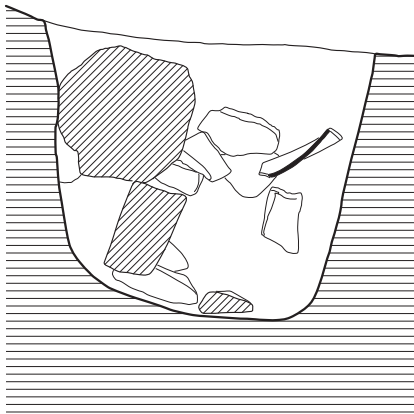
0 (1/10) 50cm

第17图 S P 275 · 114 · 150 · 901 · 220实测图

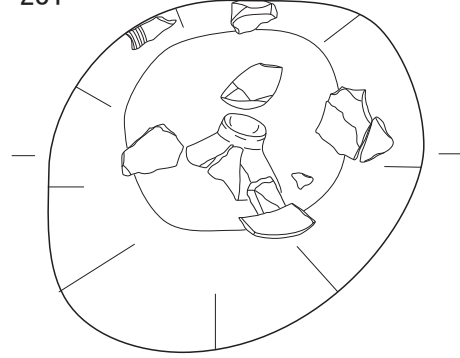
S P 353



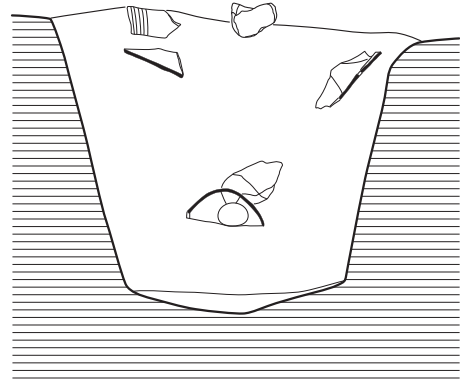
21.00m



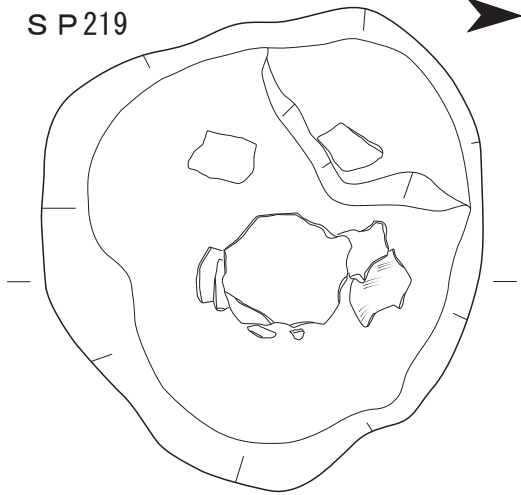
S P 281



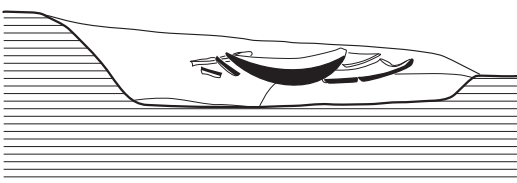
19.50m



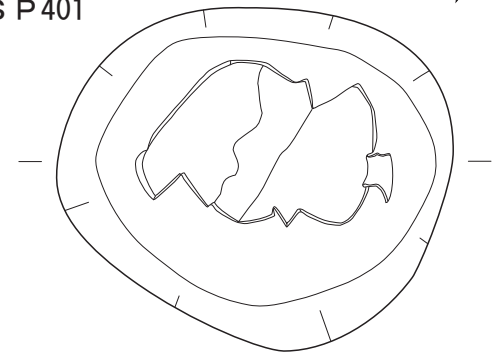
S P 219



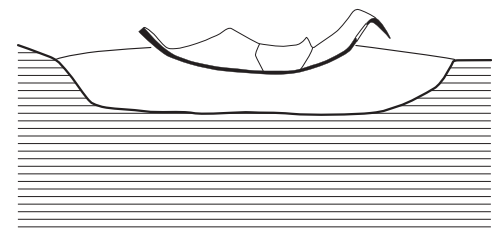
20.60m



S P 401



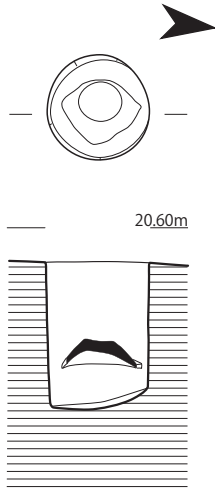
19.50m



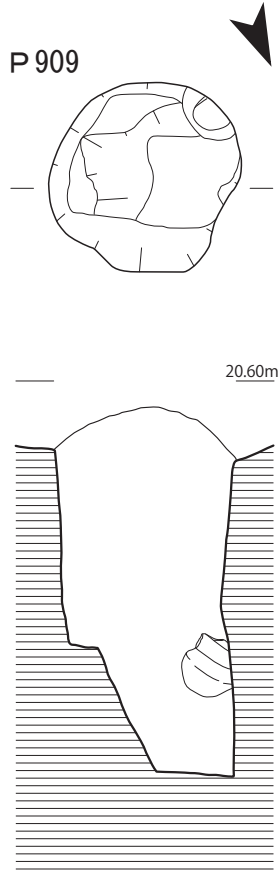
0 (1/10) 50cm

第18図 S P 353 · 281 · 219 · 401実測図

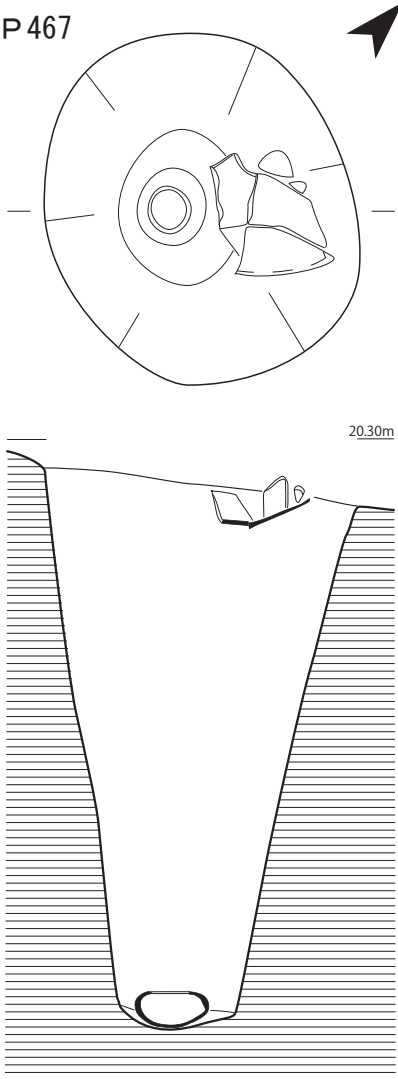
S P 399



S P 909

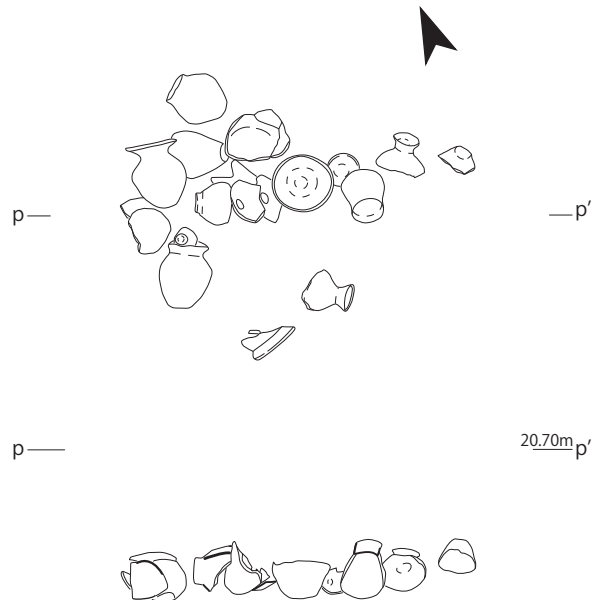


S P 467



遺物包含層出土ミニチュア土器群

※位置は第3図参照



第19図 S P 399・909・467 遺物包含層出土ミニチュア土器群実測図

第1表 掘立柱建物跡一覧表

規模・面積の()は残存規模

遺構 番号	規模(間)	棟方向	柱 間		面積 (㎡)	出土遺物	備 考 (※:調査区外へ続く可能性あり)
			桁行	梁行			
			建物の南東隅から (m)	建物の南東隅から (m)			
S B 1	(1)×2	N35°E	2.5	3.2 (1.7・1.5)	(8.00)	弥生土器甕・高杯	弥生中期末 ※
S B 2	1×1	N69°W	2.8	2.2	6.16	弥生土器甕	弥生後期
S B 3	2×1	N63°E	4.2 (2.5・1.7)	2.1	8.82	磨製石斧・弥生土器	弥生
S B 4	2×(1)	N62°W	4.2 (2.3・1.9)	-	-		※
S B 5	2×(1)	N79°W	3.7 (1.8・1.9)	-	-		※
S B 6	3×(1)	N62°W	5.8 (1.9・2.0・1.9)	-	-	弥生土器	弥生中期か ※
S B 7	2×1	N76°E	3.9 (1.8・2.1)	2.7	10.53	弥生土器	弥生中期
S B 8	(1)×2	N10°W	2.2	3.7 (2.0・1.7)	(8.14)	弥生土器壺	※
S B 9	3×(1)	N70°W	4.4 (1.5・1.4・1.5)	1.8	(7.92)	弥生土器壺・高杯・ 剥片石器	弥生後期 ※
S B 10	2×1	N40°E	4.0 (1.9・2.1)	2.5	10.00	弥生土器壺・甕・高 杯	弥生終末期～古墳初頭
S B 11	(2)×1	N25°E	4.3 (2.5・1.8)	2.4	(10.32)		※
S B 12	2×(1)	N65°W	4.4 (2.3・2.1)	-	-	弥生土器	弥生中期か ※
S B 13	3×(1)	N44°W	4.8 (1.4・1.8・1.6)	-	-	弥生土器	弥生
S B 14	1×1	N59°W	3.6	1.4	5.04	弥生土器・土師器	
S B 15	2×1	N36°E	4.7 (2.7・2.0)	2.8	13.16	弥生土器	弥生
S B 16	2×1	N38°E	4.2 (2.2・2.0)	2.6	10.92	弥生土器	弥生
S B 17	2×(1)	N43°W	4.4 (2.2・2.2)	-	-	弥生土器壺	弥生中期
S B 18	2×1	N57°E	3.8 (1.6・2.2)	2.4	9.12	弥生土器	弥生
S B 19	1×1	N41°W	2.9	2.0	5.80	弥生土器	弥生
S B 20	2×1	N18°W	4.4 (2.2・2.2)	2.3	10.12		

第2表 土坑一覧表

規模の()は残存長

遺構 番号	平面形	規 模 (cm)			出土遺物	備 考
		長 軸	短 軸	深 さ		
S K 1	不整形	41	38	33		
S K 2	方形	110	104	30	弥生土器	弥生
S K 3	不整形	106	90	24	弥生土器	弥生
S K 4	方形	178	134	21	弥生土器	弥生
S K 5	不整形	112	68	10	弥生土器	弥生
S K 6	楕円形	214	160	8	弥生土器壺・甕・高杯 など	弥生後期
S K 7	楕円形	136	88	15	弥生土器壺・甕	弥生
S K 8	楕円形	64	(38)	33	土師器甕	4世紀代。S I 8を切りS I 7 に切られる。
S K 9	不整形	272	164	7	弥生土器高杯	弥生
S K 10	円形	42	37	44	弥生土器	弥生中期か
S K 11	楕円形	90	68	64	弥生土器壺	弥生中期
S K 12	楕円形	44	18	12		
S K 13	不整形	280	(76)	5	弥生土器高杯・土師器	
S K 14	楕円形	135	101	19	弥生土器	弥生
S K 15	楕円形	80	70	23	弥生土器	弥生
S K 16	不整形	272	188	6	弥生土器壺・石鏃	弥生中期
S K 17	不整形	282	170	9	弥生土器	弥生 ※
S K 18	楕円形	114	(75)	35		※
S K 19	方形	127	97	12	土師器皿	12世紀代
S K 20	円形	100	100	5	弥生土器	弥生
S K 21	楕円形	140	115	16	弥生土器	弥生
S K 22	円形	112	107	16	弥生土器	弥生
S K 23	楕円形	114	85	9		
S K 24	楕円形	66	57	22	弥生土器	弥生
S K 25	不整形	193	96	33		
S K 26	不整形	84	68	22	弥生土器	弥生
S K 27	方形	149	140	23		
S K 28	円形	62	59	28	弥生土器	弥生
S K 29	不整形	200	161	25		

2 遺物

調査の結果、開明遺跡からは多数の弥生土器をはじめとして、須恵器、土師器、陶器、白磁、土製品、石器・石製品、鉄製品等が出土した。遺構から出土した遺物は多く、良好な共伴資料を得ることができた。また遺物包含層から出土した遺物も多い。以下遺物についての主な特徴を述べる。なお詳細については遺物観察表を参照されたい。

(1) S I 1・3・5 出土遺物 (第20図 図版12)

1～6はS I 1から出土した遺物で、1は跳ね上げ口縁の甕である。2・3は垂下口縁の壺で、2は垂下部に櫛歯状工具による山形文を施し、口縁内面に波状文を施す。3は山形文を施す。4・6は内外面にヘラミガキを施す甕の底部である。5は甑の底部で中央に焼成前の穿孔がある。7～9はS I 3から出土した遺物で、7は口縁端部が肥厚している甕である。8は厚さ1.1cmで口縁端部がやや尖る鉢である。9は内外面にハケ目調整を施す短頸壺の口縁である。10はS I 5から出土した甕で、口縁が逆L字に折れ曲がり、頸部には連鎖状突帯をもつ。

(2) S I 2 出土遺物 (第21図 図版12・13)

11はS I 2の支柱穴から出土した布留式の甕で、胴部外面に縦方向と横方向のハケ目調整を施している。胴部内面は上方向に向けてヘラケズリを施している。12～30はS I 2の周溝から出土した遺物で、12・13は直口する口縁をもつ壺である。14～21は甕で、17は胴部外面にタタキ調整を施す土師器の甕である。21は長い口縁が外反し端部が尖る。胴部は長く、尖り気味の底部をもつ。外面には間隔の広いハケ目調整と狭いハケ目調整を施し、底部はヘラミガキを施している。22～25は鉢である。26は高杯の口縁、27・28は器台で、28は畿内系である。29は壺、30は鉢のミニチュア土器である。

(3) S I 7 出土遺物 (第22図 図版13・14)

31～54はS I 7の出土遺物で、31～34は口縁端部を拡張する壺である。拡張部には無文のもの、刺突文、擬凹線文、斜格子文などを施すものがある。35は器台の受部と思われる。36・37は複合口縁の壺で、36は外反する口縁と内傾した立ち上がり部からなっている。37は櫛描文を施している。38は長頸壺でヘラミガキを施す。39～42は甕で、40・41は口縁部がくの字形に外反し、内面は頸部から下部にヘラケズリを施す。42はS I 7のカマド内から出土した甕で、外面にハケ目調整の後ヘラミガキを施し、内面は上方向にヘラケズリを施す。43は甕蓋である。44～46は鉢で、44はミニチュア土器である。47は高杯と思われ、口縁下部に稜をもち赤色顔料を塗布している。48は稜のない半球形の高杯である。49・50は下位で裾部が屈折して広がる高杯の脚である。51は上げ底の甕である。52は焼成前に穿孔が施された甑の底部。53は鉢の把手で、54は鉢のミニチュア土器である。

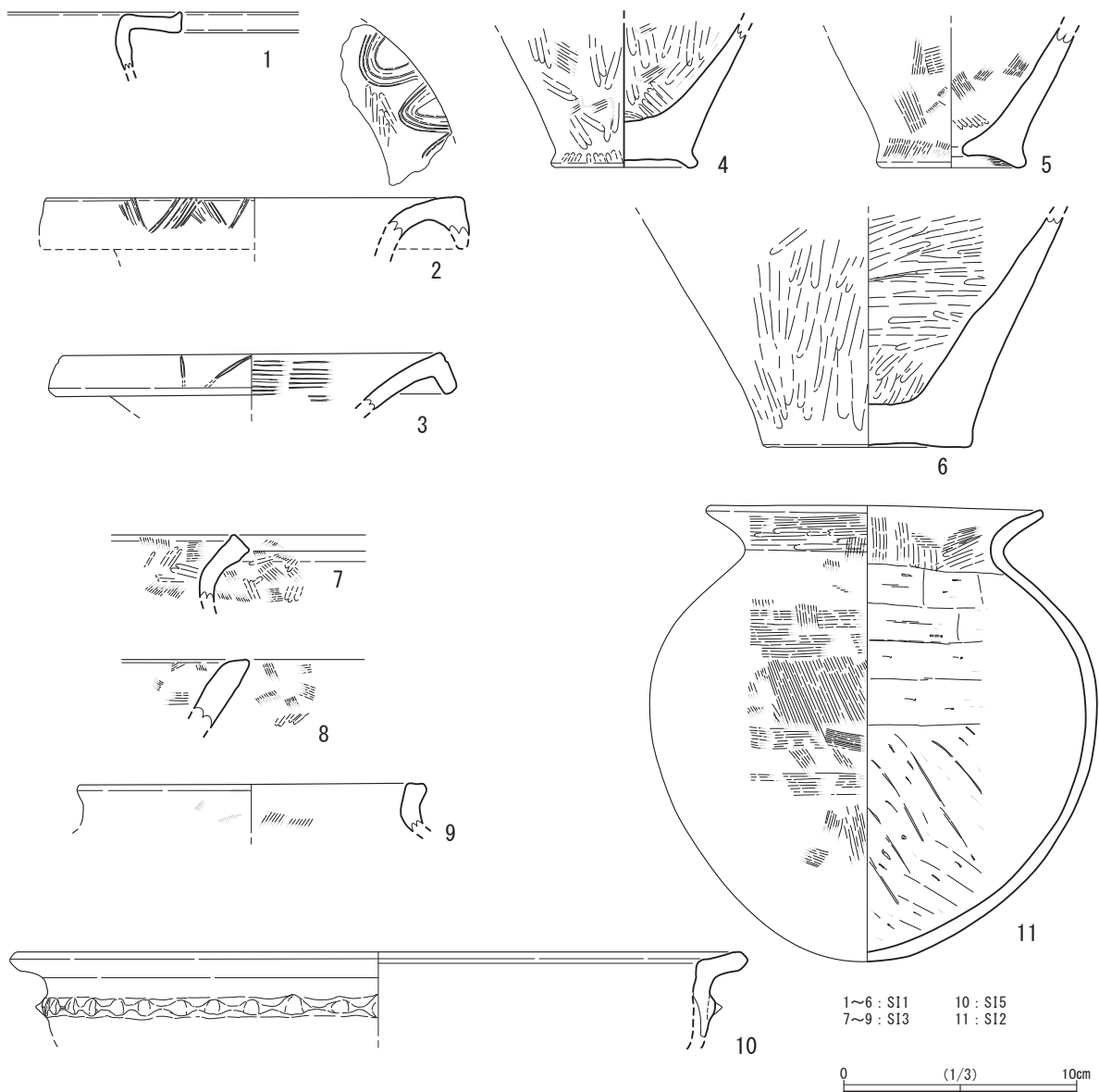
(4) S I 8・9 出土遺物 (第23図 図版14)

55～66はS I 8の出土遺物で、55は直口壺の口縁である。56は鉢のミニチュア土器。57は壺で器壁が3mmと薄い。58は鉢でハケ目調整とヘラミガキを施す。59は口縁端部が細く尖り小さく外反する鉢である。60は鉢で、胴部の上位から口縁部にかけて内傾して立ち上がり、口縁端部は細く尖る。61は甕で、肩部に5段の列点文が並列する。赤色顔料がわずかに残る。62は甕で、逆L字に口縁を折り曲げ、端部には刻み目を施し、頸部に指頭押圧痕を並列させている。63は甕で長い口縁部をもち、端部は反り返る。体部内面の上位には上方向にヘラケズリを施す。64は器台あるいは壺と思われる。口

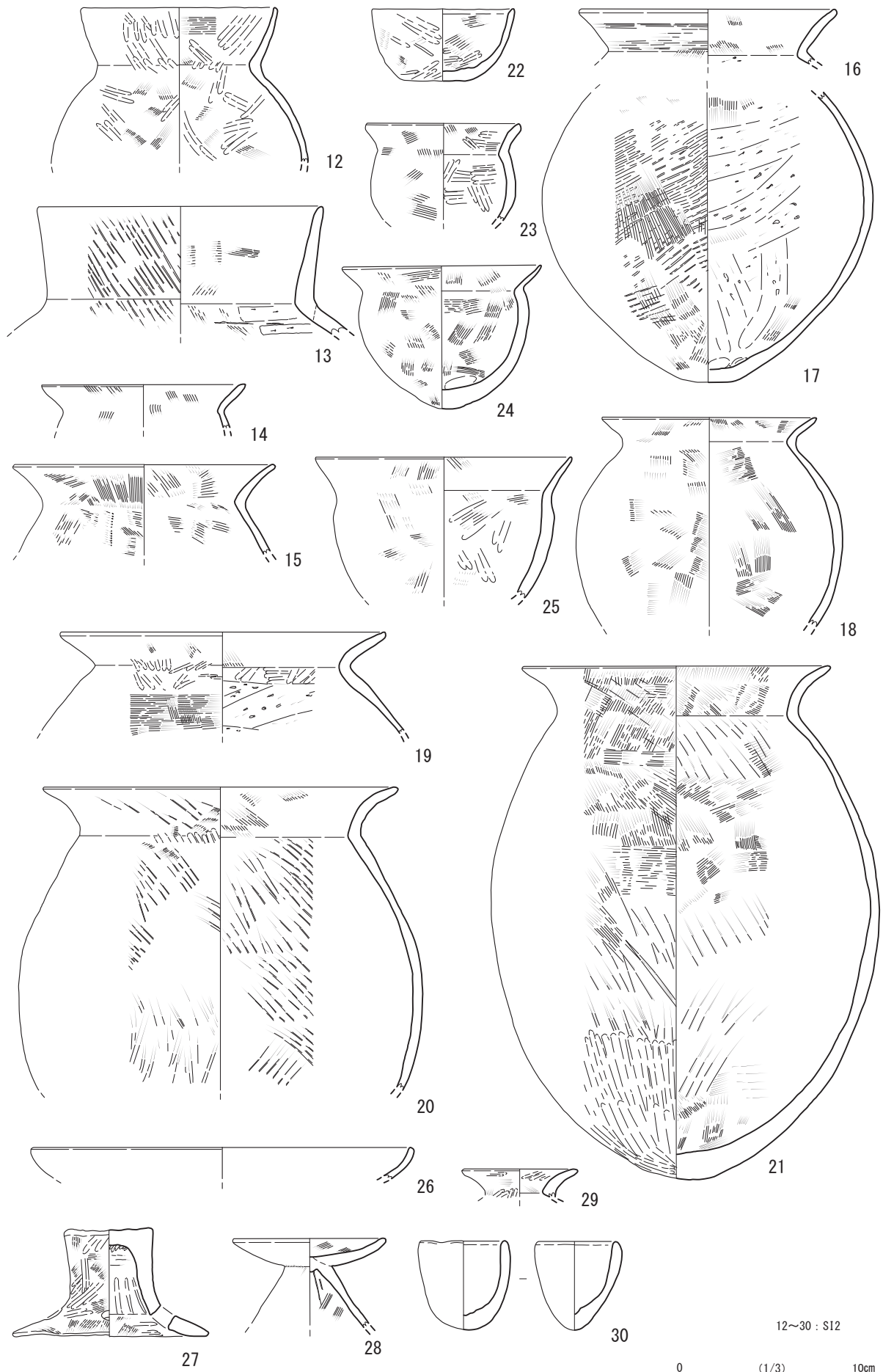
縁立ち上がり部は直線的に立ち上がり、上端部は緩やかに外反する。内外面に間隔の広いハケ目調整と狭いハケ目調整を施す。外面には舟と思われる絵画が、鋭利な先端の工具で描かれている。65は高杯の脚部でハの字形に裾部が開き、上位に直径0.8cmの円形透穴を穿孔している。67はS I 9出土の甕で、外面にハケ目調整を施す。

(5) S I 10出土遺物 (第24・25図 図版14～16)

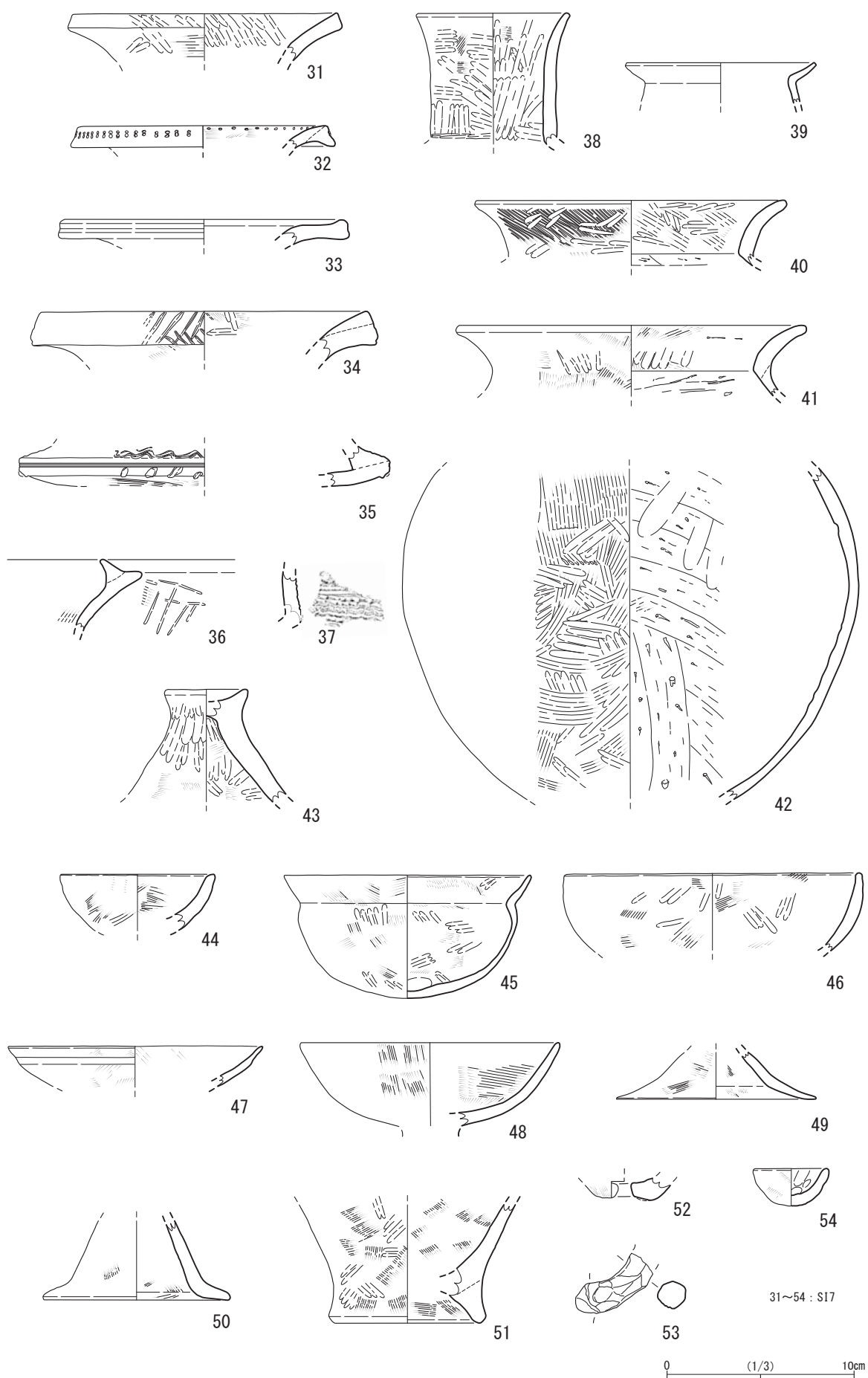
68～102はS I 10の出土遺物で、68～78は壺口縁である。68は口縁垂下部に斜格子文を施し、69は山形文、70は山形文と口縁内部に双頂突帯が巡る。71は頸部から口縁が緩やかに外反し、端部を外方向に拡張し上面に山形文を施文する。頸部には尖頂突帯が巡る。72は口縁端部に凹線が3条巡り、上面に斜格子文を施文する。78は口縁端部に凹線が3条巡り、頸部に連鎖状突帯が2条巡る。79は双頂突帯が3条残る壺である。雲母を多量に含み、黒色で内外面に丁寧なヘラミガキを施す。搬入品と考えられる。80は壺の胴部である。外面はヘラナデとハケ目調整、内面はハケ目調整と指ナデを施す。82～92は甕である。83・84は逆L字口縁で、83は端部に刻み目を施し、上面に円弧に沿う楯描文に



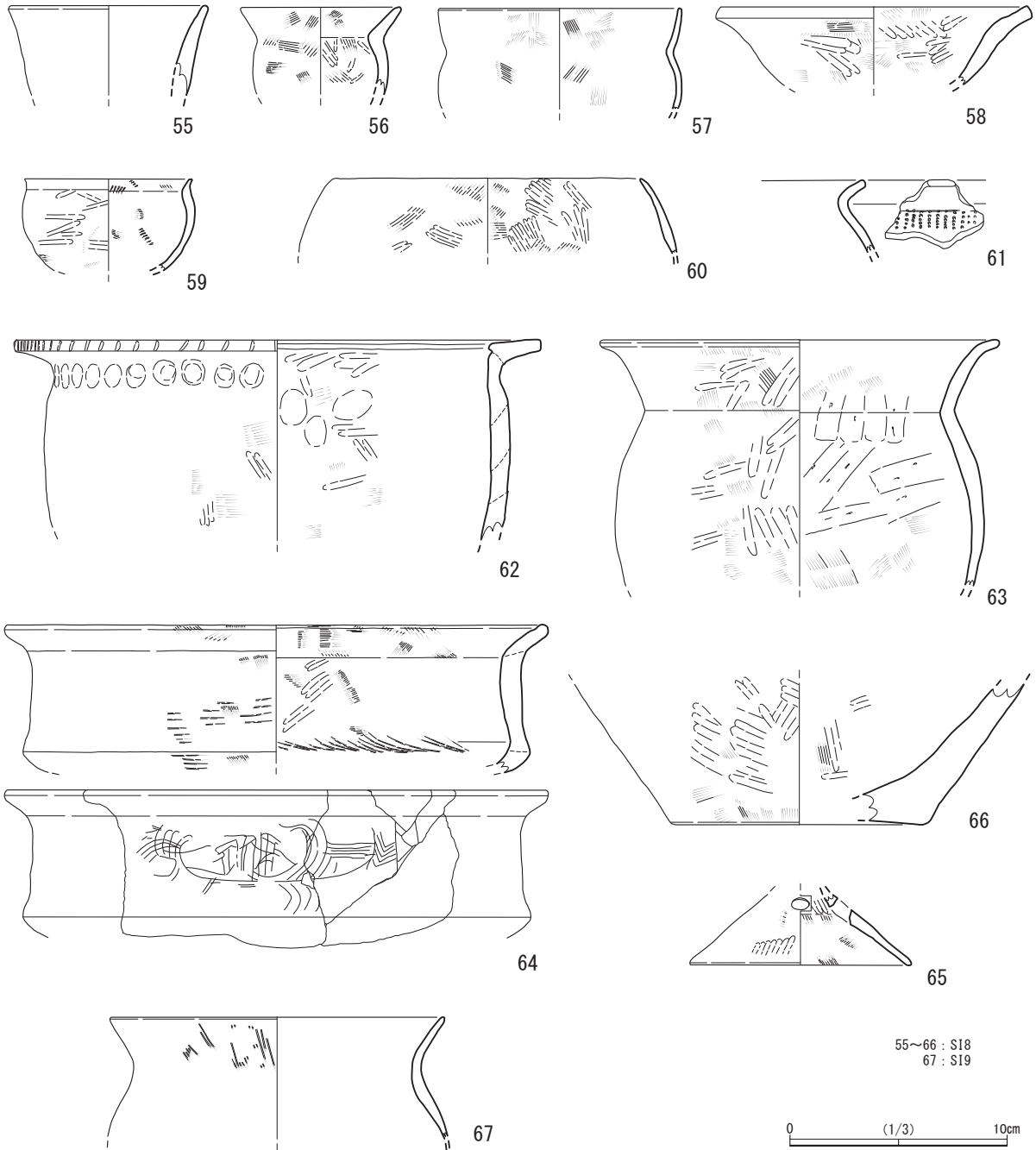
第20図 出土遺物実測図(1)



第21图 出土遺物実測図(2)



第22图 出土遺物実測图 (3)

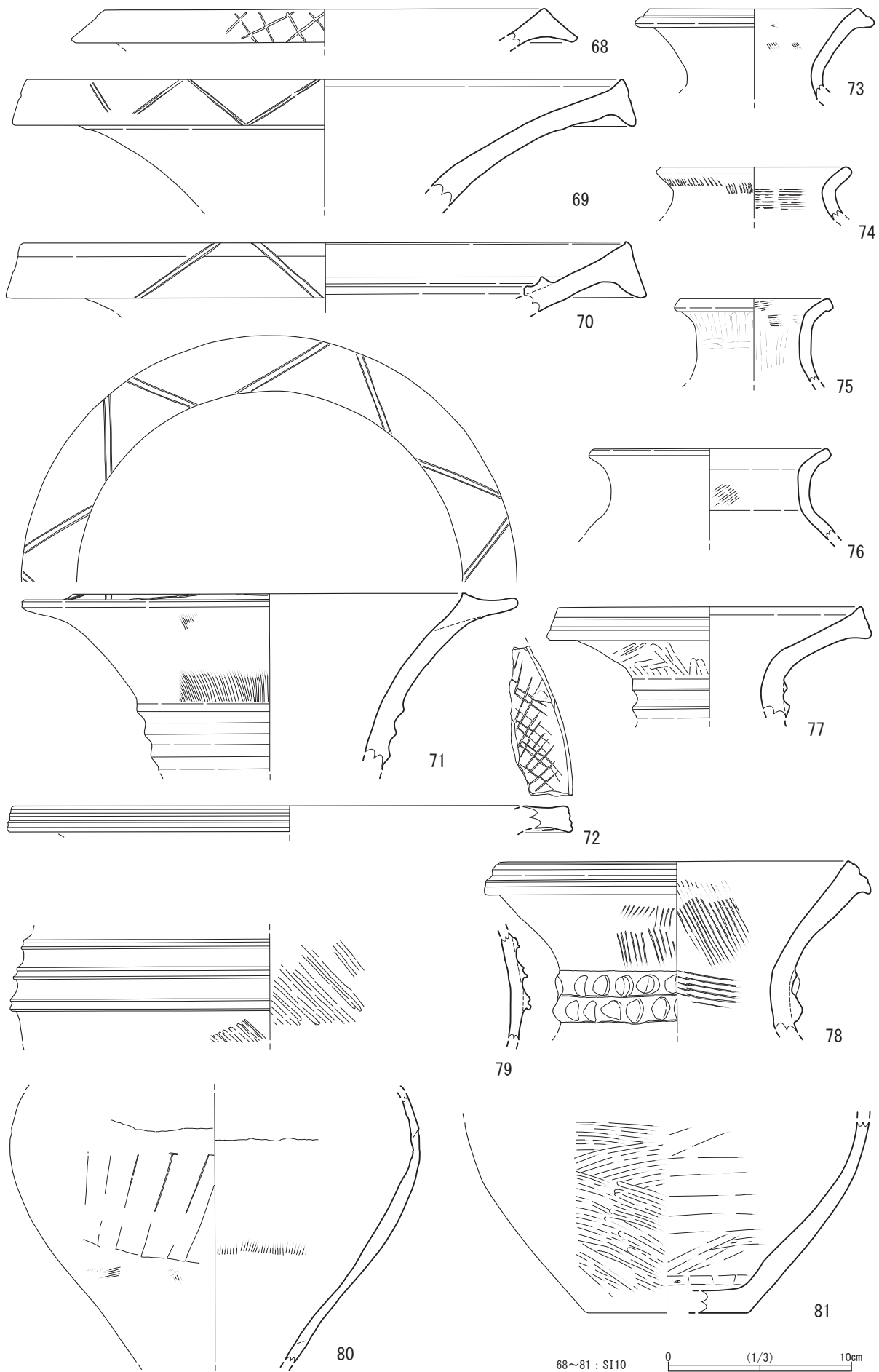


第23図 出土遺物実測図（4）

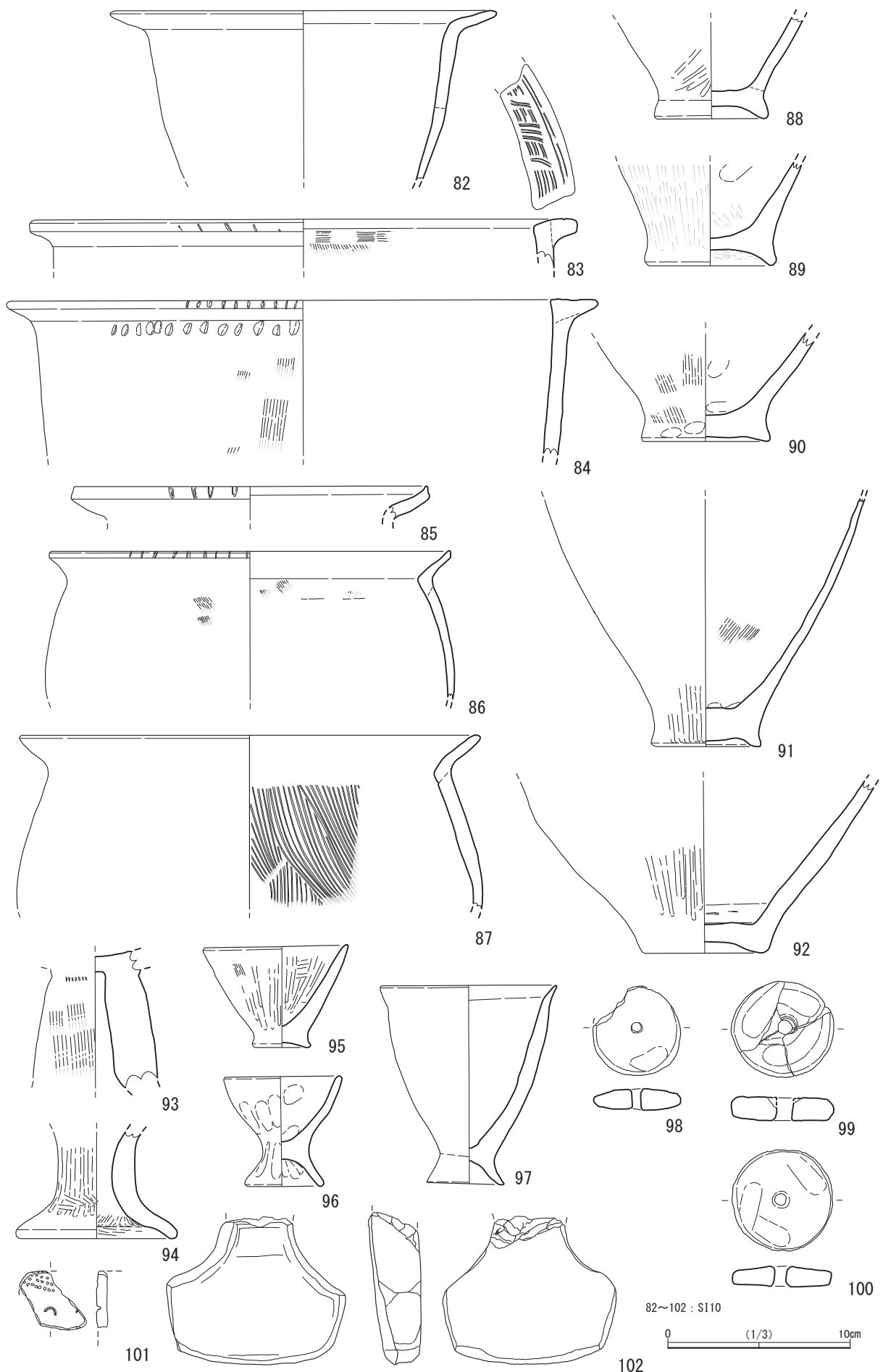
直交する櫛描文を組み合わせて施文している。84は口縁端部に刻み目、頸部に刺突文を施す。85は跳ね上げ口縁で、口縁端部に刻み目を施す。87は内面に間隔の広いハケ目調整を施し、外面は横ナデ調整を施す。93は高杯の脚、94は器台の脚と思われる。95・96は鉢のミニチュア土器。97は甕である。98～100は土製紡錘車である。焼成前に穿孔している。101・102は分銅形土製品で、101は顔部分にあたり、目は半截竹管文で、頭髮は直径約1.5mmの刺突文で表現している。102は胴部分にあたり、くびれ部から打ち欠いている。全面に丁寧なナデ調整を施し、輪郭から約4mm内側に沈線が巡る。裏面は無文である。

(6) S I 11・13・14出土遺物（第26図 図版15・16）

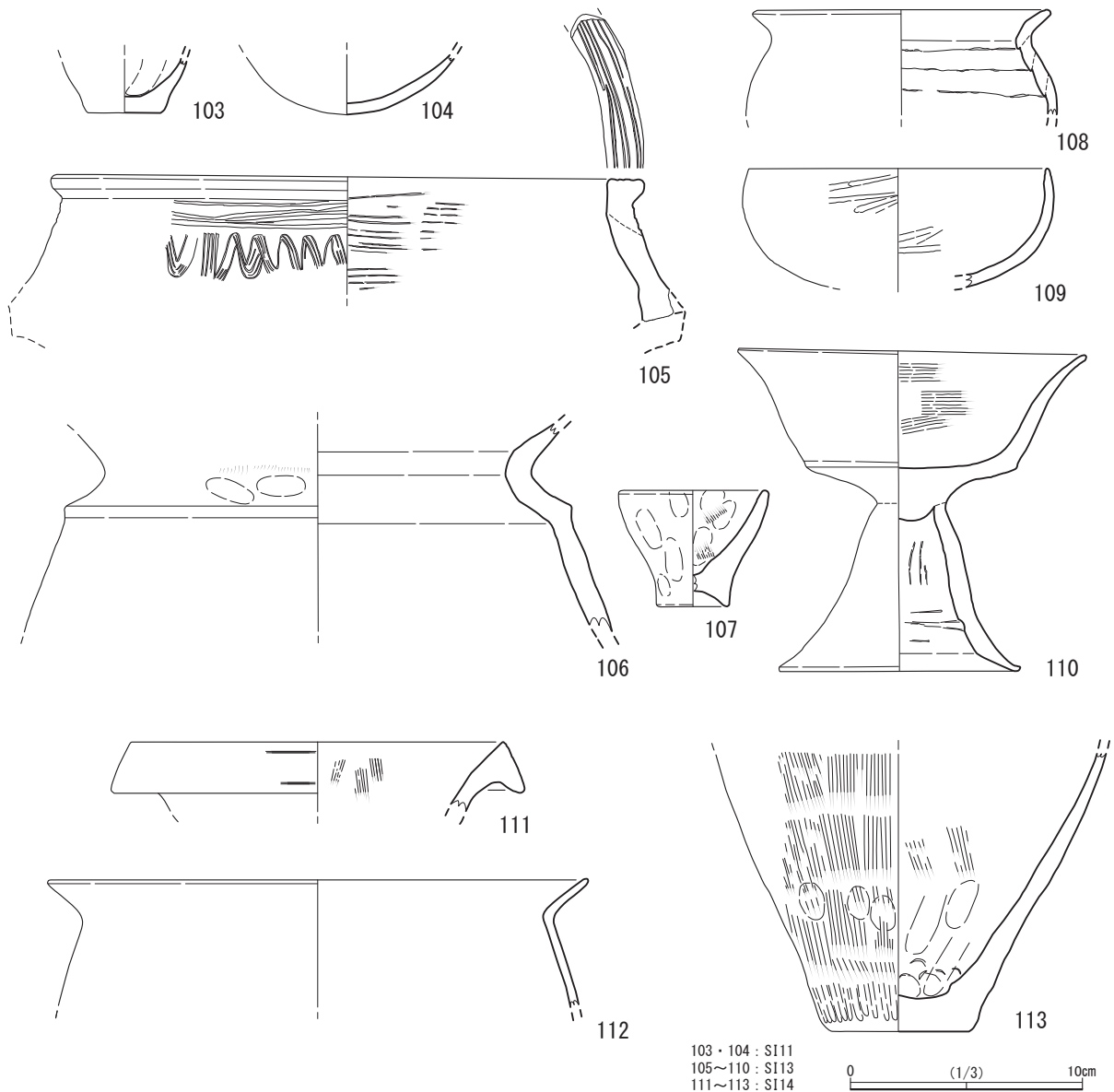
103・104はS I 11の出土遺物で、103は甕の底部と思われる。内面に指ナデを施している。105～110はS I 13の出土遺物で、105は複合口縁壺である。内傾する長い口縁立ち上がり部に4条の沈線と



第24図 出土遺物実測図(5)



第25图 出土遺物実測图(6)

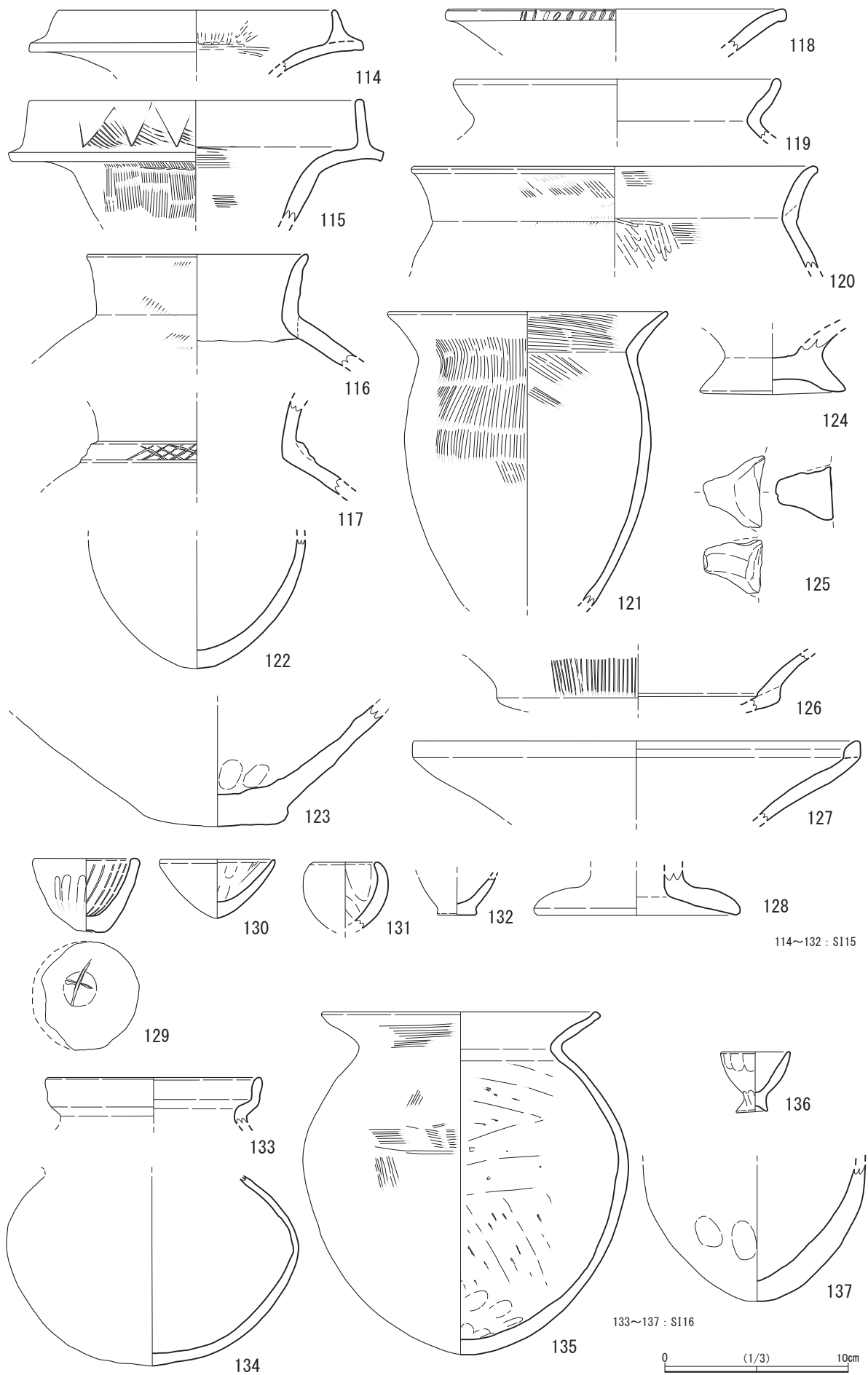


第26図 出土遺物実測図（7）

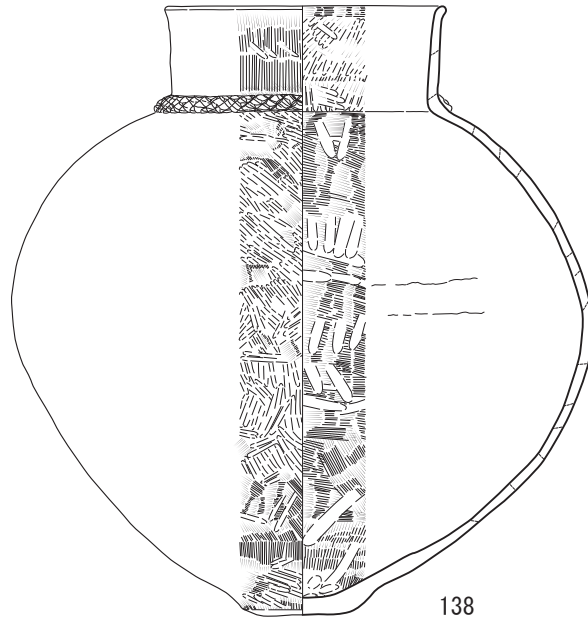
櫛描波状文を施し、口縁上面に3条の沈線文を施す。106は大型の山陰系鼓形器台である。筒部と裾部の屈曲部に稜をつくり、緩やかに外下方に開く。107は鉢のミニチュア土器である。108は甕で粘土帯接合部分に調整を施さず、輪積みのまま焼成されている。109は内外面にヘラミガキを施す土師器の椀である。110は高杯である。体部の下位で屈曲し、稜をつくる。脚部は、内面の下位で屈曲し、稜をつくる。受部と脚部の接合部は円板充填を施す。111～113はS I 14の出土遺物で、112は器壁が3mmの薄い甕である。113は平底の甕でハケ目調整とヘラミガキを施している。

(7) S I 15・16出土遺物（第27図 図版16・17）

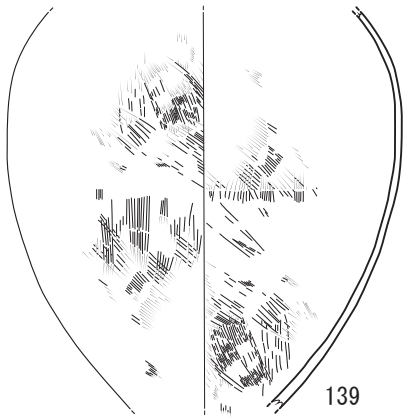
114～132はS I 15の出土遺物で、114の複合口縁立ち上がり部は無文、115は斜線文を埋めた鋸歯文を施す。116はやや外反する直口壺である。117は壺で斜格子文突帯が頸部に巡る。118は壺で口縁端部に刻み目を施す。119は甕で口縁がくの字に外反し、先端がわずかに内湾する。120は甕で口縁は緩やかに外反し、端部は小さく外湾する。121は甕で内外面にハケ目調整を施す。123はレンズ状の底部をもつ壺である。125は土師器甌の把手である。127は高杯で開いた杯部から口縁部が短く上方に立ち上がる。128は器台の裾部と思われる。裾全体に厚みがあり、中位で肥厚する。筒部は垂直に立ち



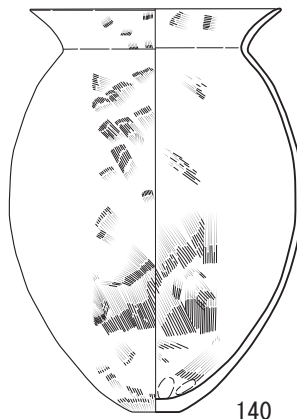
第27図 出土遺物実測図(8)



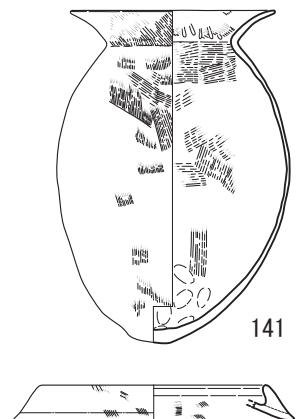
138



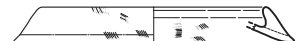
139



140

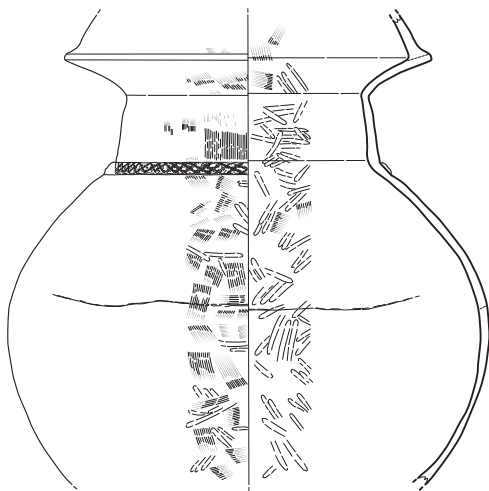


141

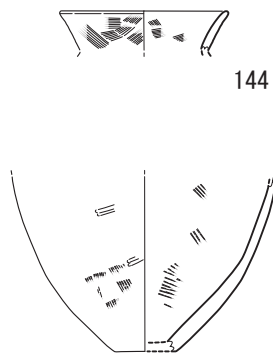


142

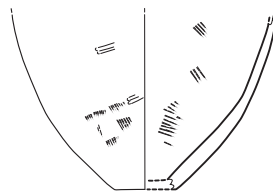
138~142 : ST1



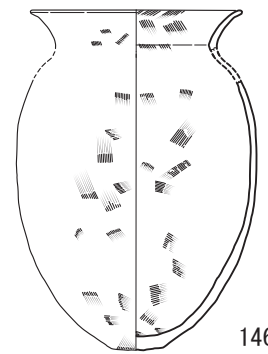
143



144



145

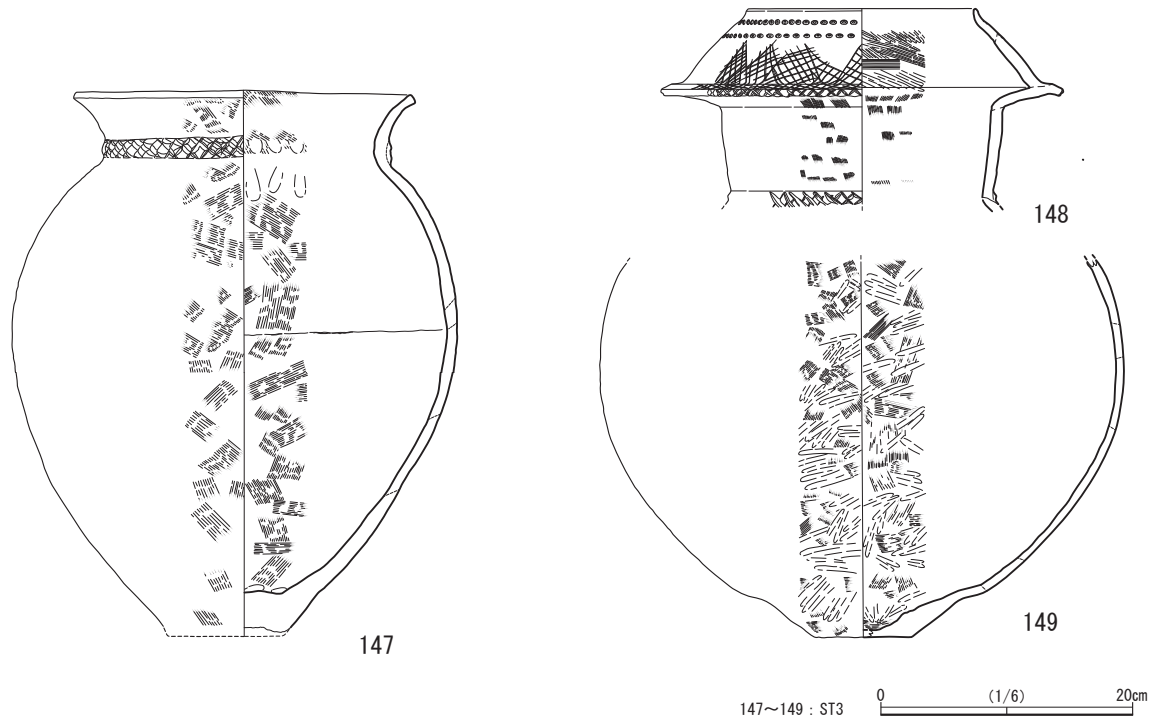


146

143~146 : ST2

0 (1/6) 20cm

第28図 出土遺物実測図(9)

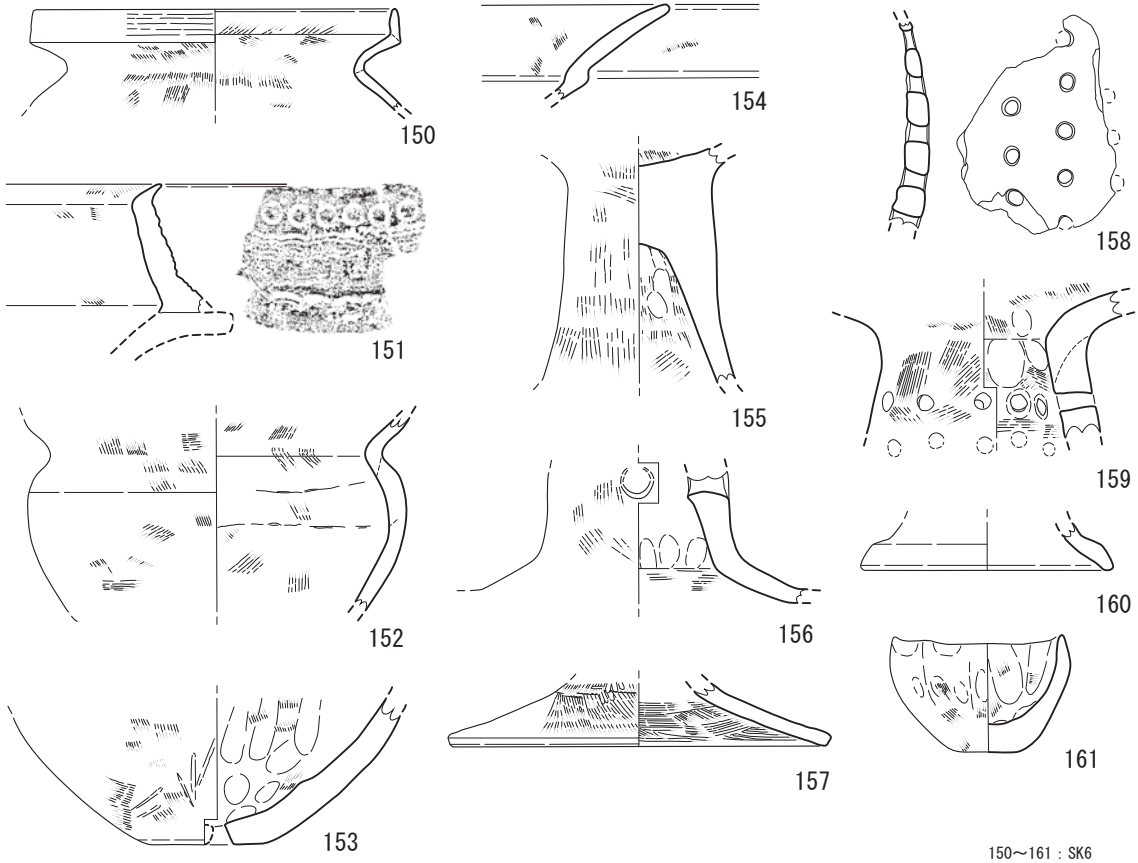


第29図 出土遺物実測図 (10)

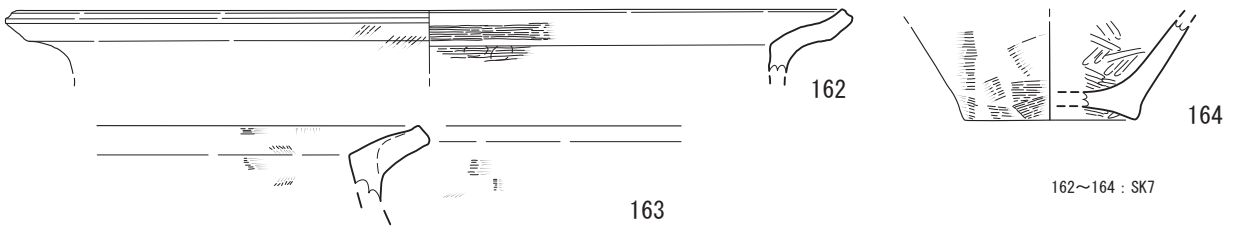
上がる。129～132は鉢のミニチュア土器である。129の底部には「+」のヘラ描きを施す。133～137はS I 16の出土遺物で、133は頸部から口縁部が弧状に外反し、立ち上がり部が上方に立ち上がる土師器の甕である。135は土師器の甕で口縁部がくの字形に外反し、球形の体部で底はやや尖る。体部内面にヘラケズリを施す。136は上げ底の底部をもつ鉢のミニチュア土器である。

(8) S T 出土遺物 (第28・29図 図版17・18)

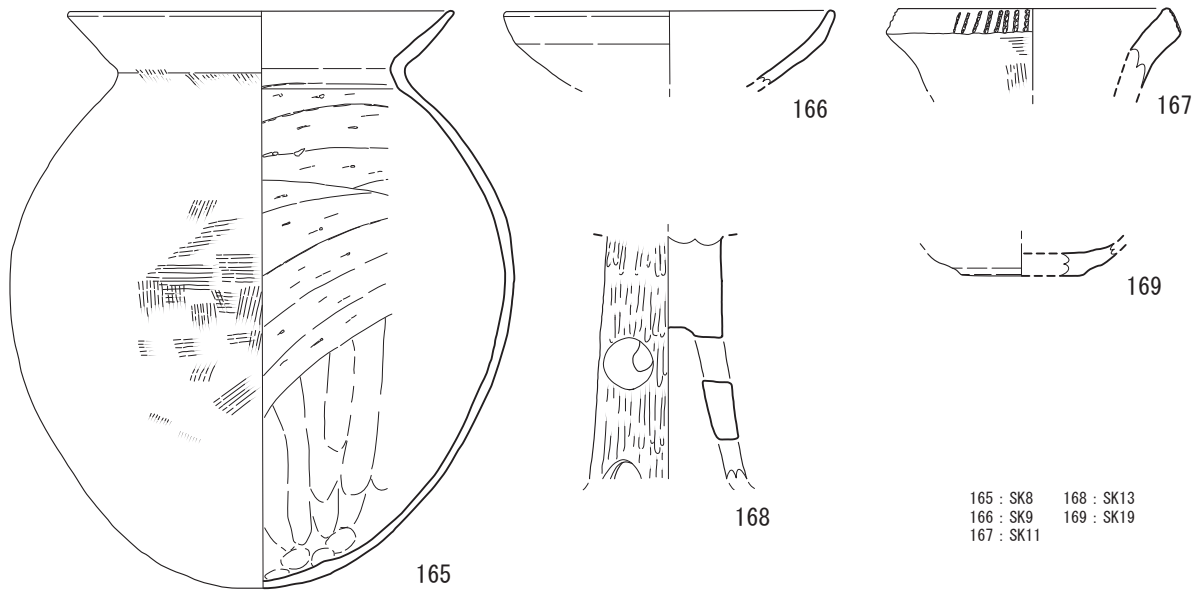
138～142はS T 1出土の遺物である。138は土器棺の棺身で、頸部から口縁部が垂直に立ち上がり、先端はわずかに外反する。頸部に斜格子文突帯が巡る。体部は中位で大きく張り、底部はレンズ状である。139は棺蓋で、壺の体部内外面にハケ目調整を施す。棺身の口縁部を覆った状態で出土した。140・141は甕で、やや長い口縁部がくの字形に外反し、細長い体部をもつ。底部は140が平底で、141がレンズ状である。棺身と棺蓋の接合部を覆うように出土した。また一部は棺の支えに利用されていた。142は器台と思われる。受部は口縁部が斜め下方向に大きく外反し、内傾する立ち上がり部を貼り付け、外面は無文である。棺身内から出土した。143～146はS T 2出土の遺物である。143は土器棺の棺身で、複合口縁の壺である。頸部から大きく外反する口縁上端にやや内傾する立ち上がり部を貼付する。立ち上がり部外面は無文である。頸部に斜格子文突帯が巡る。体部は中位で大きく張る。146は棺蓋の甕で、やや長い口縁部が大きく外反し、体部は細長い。145の甕は146を覆った状態で出土した。147～149はS T 3出土の遺物である。147は土器棺の棺身で、口縁が緩やかに外反し、端部に面をもつ。頸部に斜格子文突帯が巡る。倒卵形の体部と平底の底部をもつ。149の壺は棺蓋で、胴部が中位で大きく張り、平底の底部をもつ。148は、149の複合口縁部である。口縁立ち上がり部がやや長く内傾し、先端は細くなり、端部はわずかに外反する。外面は口縁下部に直径0.5cmの竹管文が2段巡り、斜格子で埋めた鋸歯文を配する。鐙の端部に斜格子文を施す。頸部に斜格子文突帯が巡る。148を打ち欠いて隙間に差し込んだ状態で出土した。



150~161 : SK6



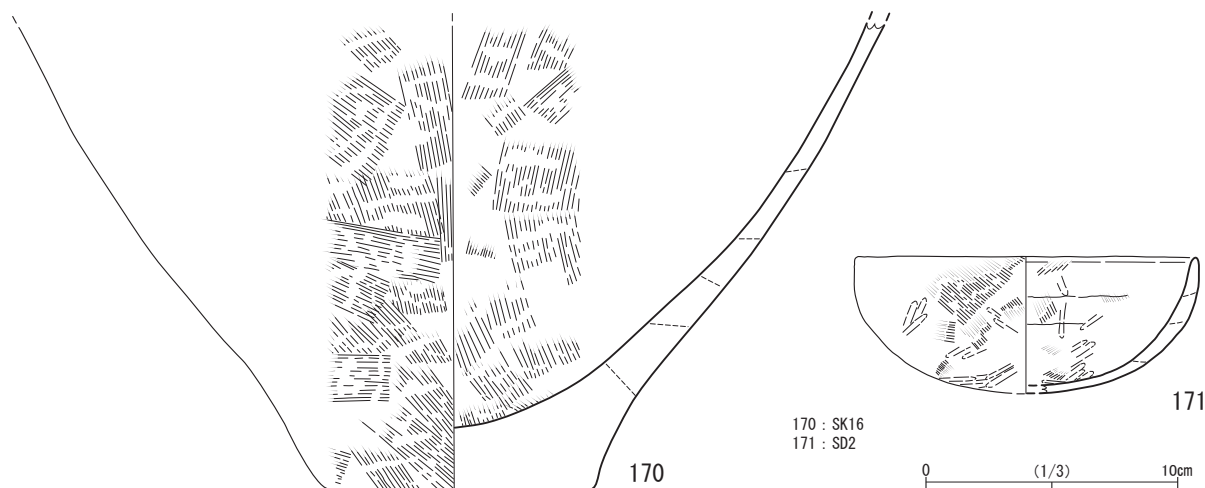
162~164 : SK7



165 : SK8 168 : SK13
 166 : SK9 169 : SK19
 167 : SK11

0 (1/3) 10cm

第30図 出土遺物実測図 (11)



第31図 出土遺物実測図 (12)

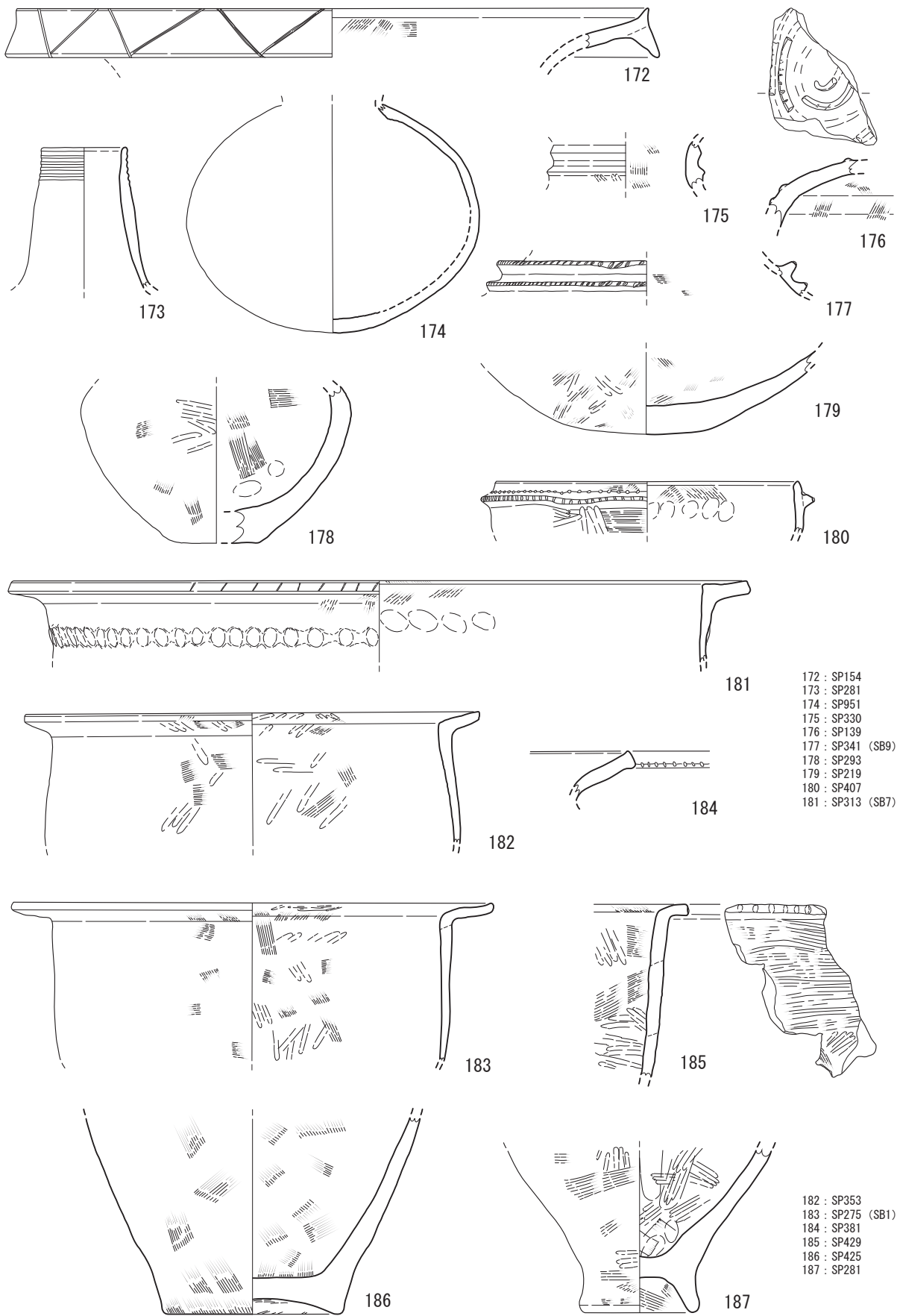
(9) S K・S D出土遺物 (第30・31図 図版18・19)

150～161はS K 6から出土した遺物で、150は口縁がくの字形に屈曲し、立ち上がり部が上方に立ち上がり、外面に4条の沈線が巡る吉備系の甕である。151は複合口縁壺の立ち上がり部である。内傾して立ち上がり、先端は外反し細く尖る。直径0.9cmの竹管文を1段巡らせ、その下に櫛歯状工具でやや崩れた波状文を巡らす。153は焼成後に穿孔された壺転用の甑である。158・159は器台の筒部で円形の透穴を配する。162～164はS K 7出土の遺物で、162の甕口縁は中央で屈曲し稜をつくる。165はS K 8出土の土師器甕である。口縁がくの字形に外反し、端部は薄くなる。外面は縦方向と横方向にハケ目調整を施し、内面は胴部から頸部にかけてヘラケズリを施している。166はS K 9出土の高杯である。体部から口縁にかけて屈曲し、端部に至る。167は壺口縁で、1.1cmの厚さで端部までのびる。端部に4段1単位の刺突文が巡る。168は高杯の脚部である。直径2.0cmの円形透穴3穴を2段配する。169はS K 19出土の土師器皿である。底部に回転糸切り痕を残す。170はS K 16出土の壺である。内外面にハケ目調整を施し、底部は平底である。

171はS D 2出土の土師器の椀である。内外面にハケ目調整とヘラミガキを施している。

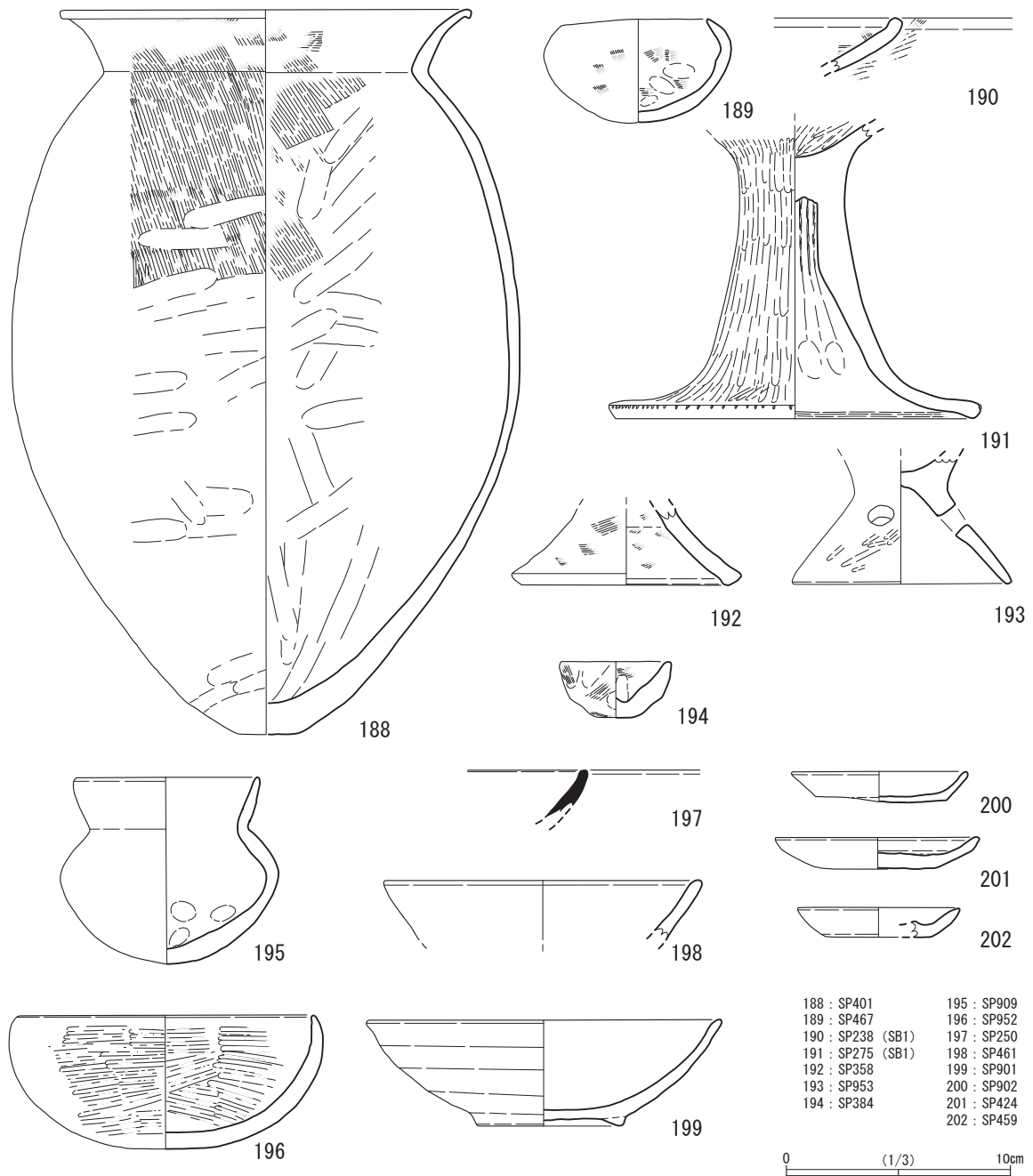
(10) S P出土遺物 (第32・33図 図版19・20)

172はS P 154出土の垂下口縁の壺で、山形文を施す。173はS P 281出土の長頸壺である。口縁下部に5条の沈線が巡る。174はS P 951出土の長頸壺で、体部は円球状を呈し、底部は丸底である。175はS P 330出土の長頸壺で、残存2条の尖頂突帯が巡り、丹塗り研磨を施す九州系の壺である。176はS P 139出土の垂下口縁の壺で、内面に刻み目を施した尖頂突帯を貼付している。177はS P 341出土の壺で2条の突帯に刻み目を施す。178はS P 293出土の壺で、肩部が張り、底部は平底である。体部器壁は1.0cmと厚い。179はS P 219出土の丸底の底部をもつ壺である。180はS P 407出土の甕で、口縁下部に直径2.5mmの円形刺突文を巡らし、その下に刻み目突帯を貼付している。181はS P 313出土の甕で、逆L字形口縁の端部に刻み目を施文し、頸部には連続する指頭押圧痕を巡らす。182はS P 353出土の甕で逆L字形の口縁をもつ。183はS P 275出土の甕で、口縁部は屈折して大きく外反し、端部をわずかに摘み上げている。184はS P 381出土の壺で、口縁下端部に刻み目を施す。185はS P 429出土の甕で、口縁端部に刺突文を施す。186はS P 425出土の甕で、内外面にハケ目調整を施し、上げ底の底部をもつ。187はS P 281出土の甕で、上げ底の底部をもつ。188はS P 401出土の甕で、や



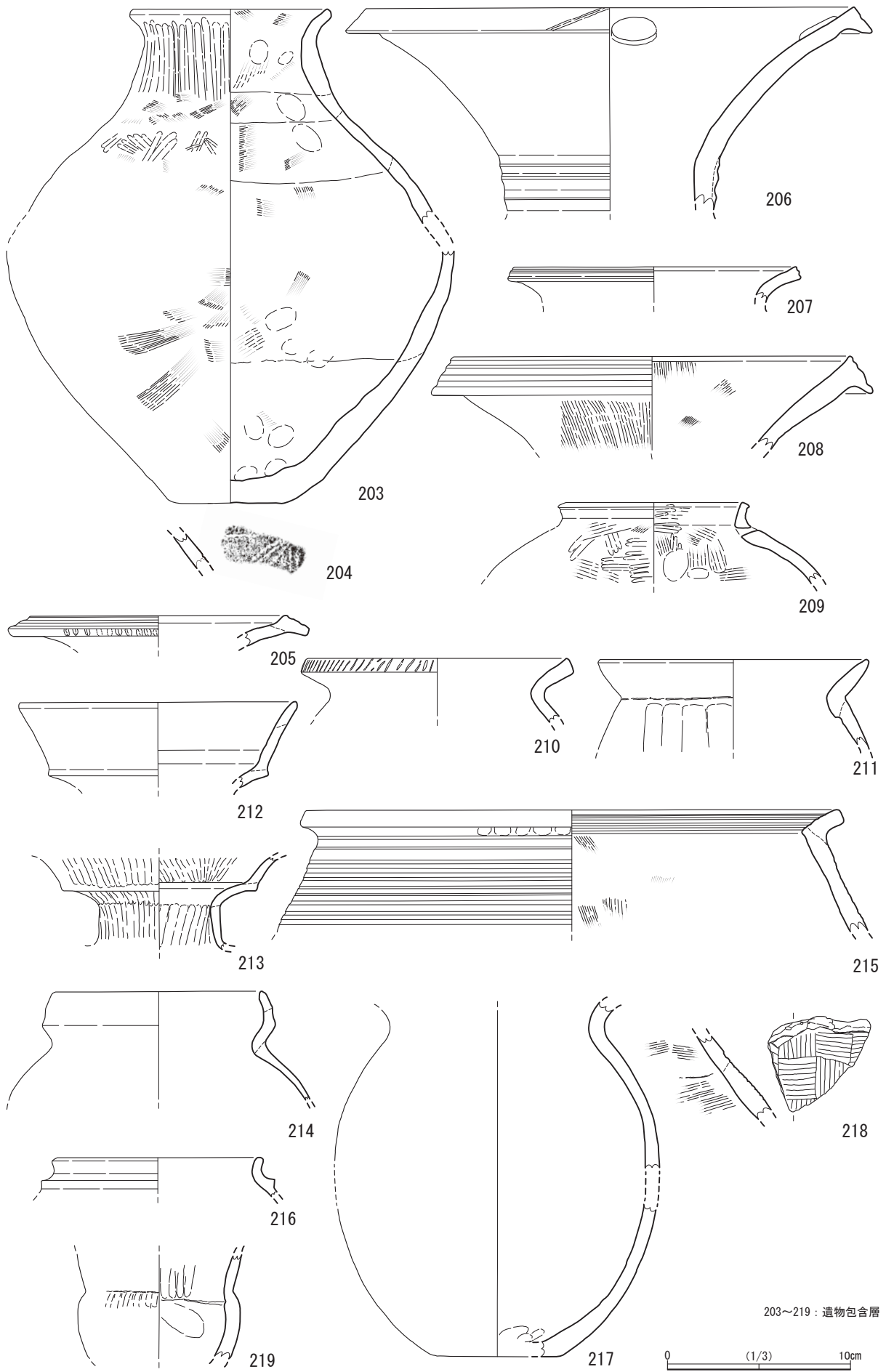
0 (1/3) 10cm

第32図 出土遺物実測図 (13)

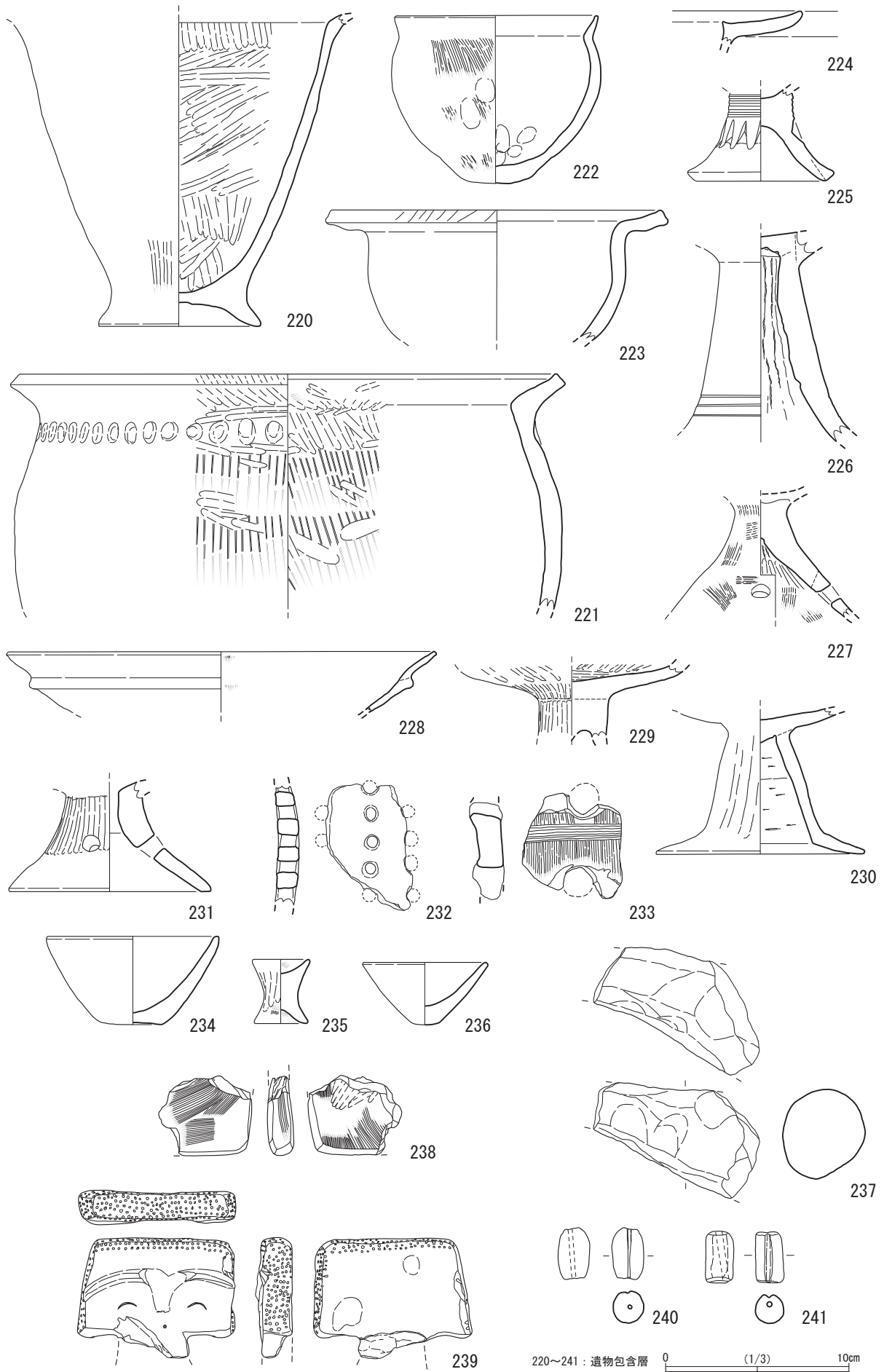


第33図 出土遺物実測図 (14)

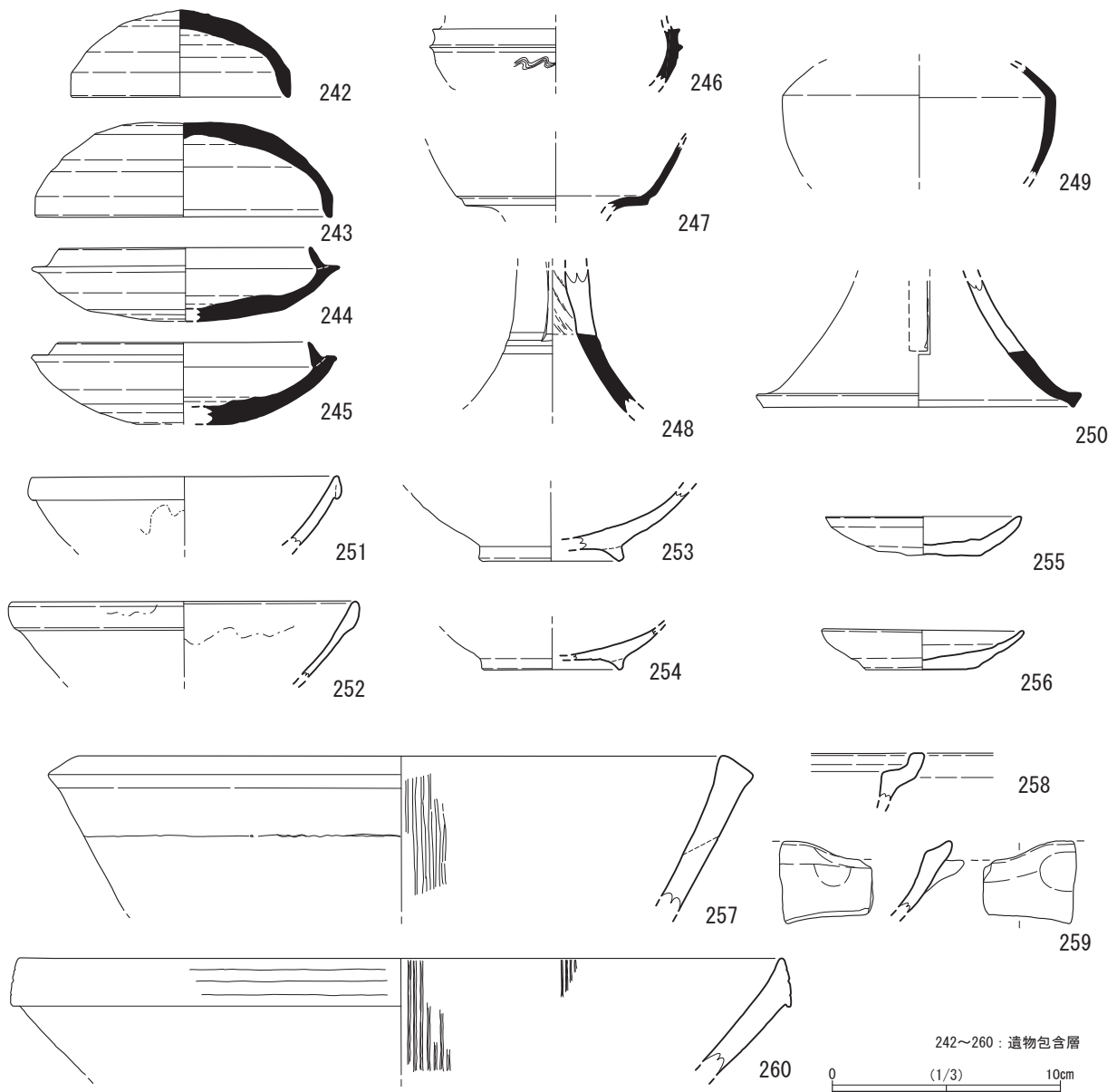
や長めの口縁は緩やかに外反し、端部は小さく丸く外湾する。胴部は細長く、底部は小さな平底である。189は土師器の鉢である。口縁は内傾し端部は尖る。肩部が張り、底部は丸底である。190はS P 238出土の高杯と思われる口縁である。口縁端部は丸く、内湾する。191はS P 275出土の高杯である。下位で裾が広がり、上端部に刻み目を巡らす。下端はわずかに摘み出している。192はS P 358出土の高杯である。0.7cmの厚さで裾の端部までのびる。193はS P 953出土の高杯である。裾部の上位に直径2.0cmの円形透穴を3穴穿っている。194はS P 384出土の鉢のミニチュア土器である。195はS P 909出土の小型丸底壺で肩部が張り、底部はやや尖る。196はS P 952出土の土師器碗で、内外面全体にヘラミガキを施す。197はS P 250出土の須恵器杯身で口縁端部は丸くおさめている。199はS P 901出土の土師器碗で体部は広く大きく開き、断面三角形の低い高台をもつ。200はS P 902出土の土師器皿で、底部から直線的に口縁が開く。底部には回転糸切り痕が残る。201はS P 424出土の土師器皿で、



第34図 出土遺物実測図 (15)



第35圖 出土遺物實測圖 (16)



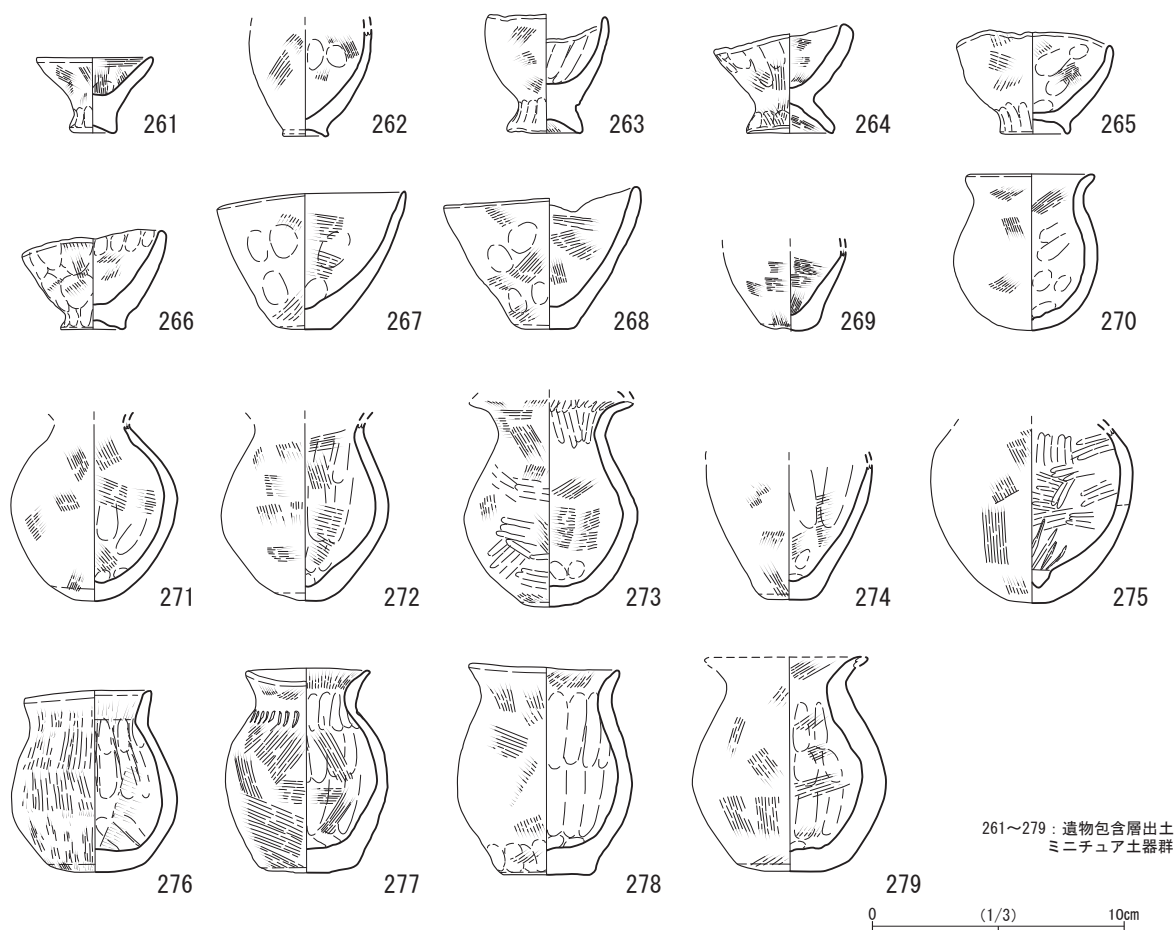
第36図 出土遺物実測図 (17)

底部に回転糸切り痕を残す。202はS P 459出土の土師器皿で、太く短い口縁をもつ。

このうちS Bの構成柱穴は、177がS B 9、181がS B 7、183・190・191がS B 1である。

(11) 遺物包含層出土遺物 (第34～37図 図版20～23)

203は壺で、外反する口縁から頸部は緩やかに内傾し、胴部は張る。肩部にわずかな段が見られる。底部は平底である。口頸部にヘラミガキが施され、肩部にはハケ目調整とヘラミガキ、胴部から底部にかけてハケ目調整を施す。204は二枚貝の貝殻腹縁で木葉文が施文された壺破片である。木葉文上部に沈線が見られる。205・207・208は壺の口縁端部を拡張して、施文帯をつくり凹線を巡らす。205は口縁上面に2条の凹線文、下端部に刻み目を施す。206は垂下部に山形文を施し、内面に円形浮文を貼り付け、頸部に低い尖頂突帯が巡る。212・213は山陰系の壺で口縁部と頸部の境に稜をつくり、内傾する頸部につながる。214は壺で、くの字形に屈曲した口縁部から内に向かって端部がのびる。215は複合口縁壺の立ち上がり部である。口縁内面と外面に凹線が巡る。220は甕で、口縁が緩やかに

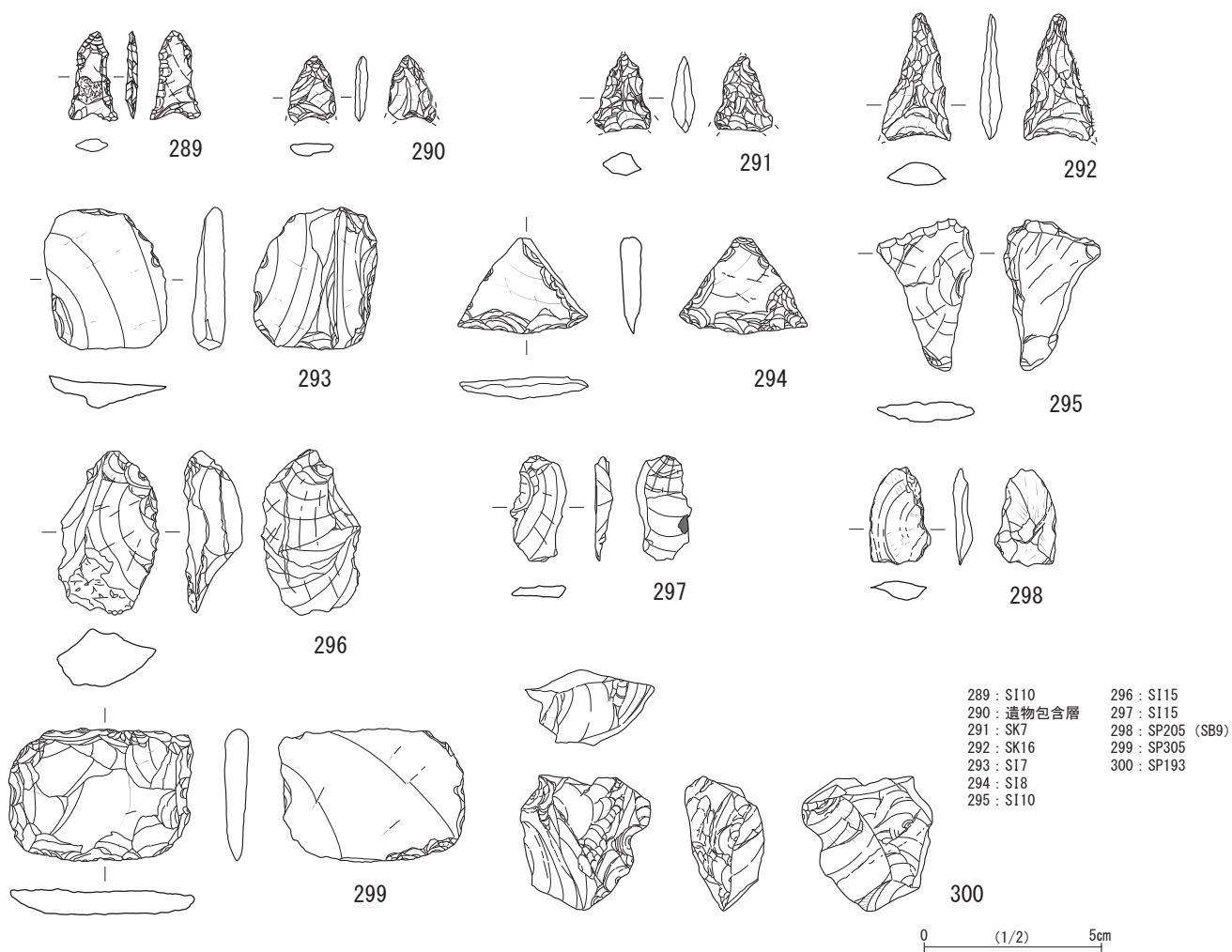
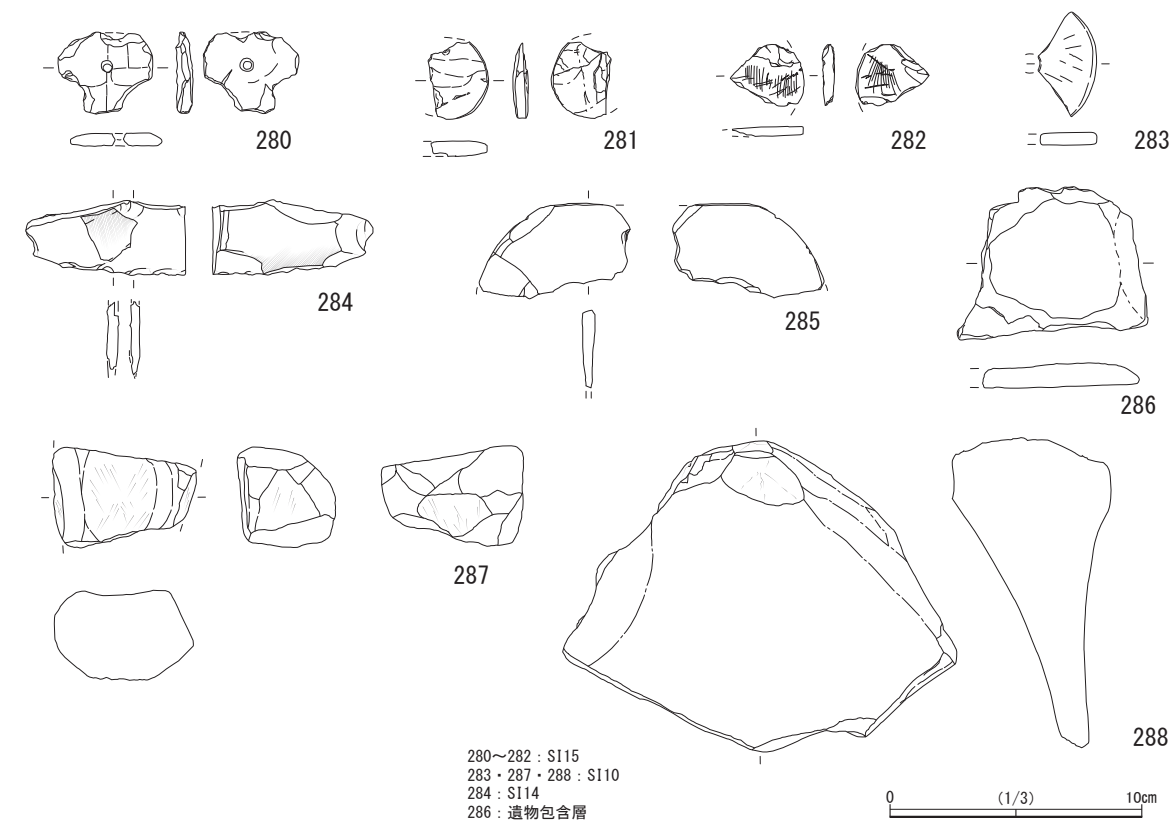


第37図 出土遺物実測図 (18)

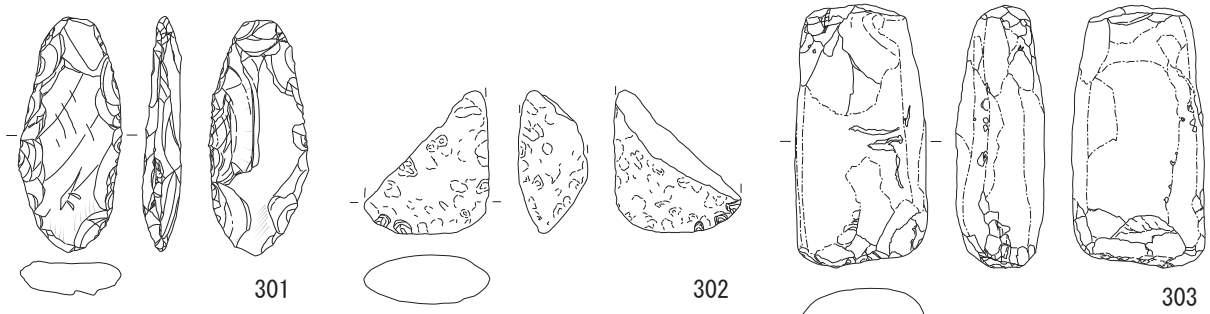
外反し、体部はほぼ直線的に開く。底部は深い上げ底である。222は鉢で短い口縁部が小さく開き、胴部の張りも小さく、底部はレンズ状を呈する。223は鉢で口縁が逆L字形に開き、端部に細く浅い刻み目を施す。体部は半球状を呈する。224は鉢と思われる口縁で、やや内湾しながら大きく開き、端部は尖る。225は高杯で、筒部に沈線を施し、裾部の矢羽根形透穴は未貫通である。237は土製支脚の翼状支手と思われる。238と239は分銅形土製品で、238は器面にハケ目調整とヘラミガキを施す。239は眉と鼻を粘土帯で表現し、目は爪状施文具で、口と頭髮を直径1.5mmの刺突文で表現している。240・241はともに有溝管状土錘である。242～250は須恵器で、242は短頸壺の蓋、243は杯蓋、244・245は杯身である。246・248・250は高杯で、247は壺である。248・250は高杯の脚部で、長方形の透穴をもつ。249は壺胴部である。251・252は白磁椀である。253・254は土師器椀で、253は断面台形の高台をもち、254は断面三角形の高台をもち、255・256は土師器皿で、255は回転糸切り痕を残すが、256は丁寧なナデを施している。257・259は須恵質の播鉢。258は瓦質土器の鍋である。260は備前焼の播鉢である。261～279は一括で出土したミニチュア土器である。261～266は上げ底の鉢、267～269は平底の鉢、270～275は丸底の壺である。273は口縁上段部が欠損しているが、複合口縁の壺と思われる。276～279は平底の壺である。277は頸部に刺突文を施している。全て内外面にハケ目調整を施しているが、ヘラミガキや丁寧な指ナデを施すものもあり、調整に差異が見られる。

(12) 石器・石製品 (第38・39図 図版23・24)

280はS I 15から出土した剣形と思われる滑石製模造品で、茎から刀身に至る部分と思われる。孔



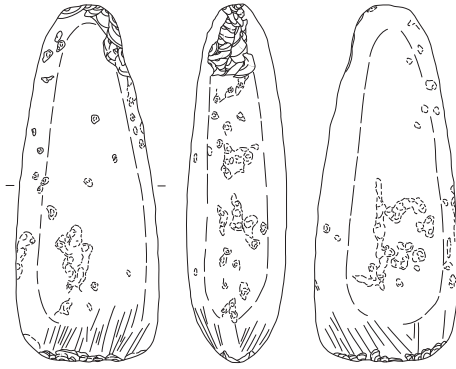
第38図 出土遺物実測図 (19)



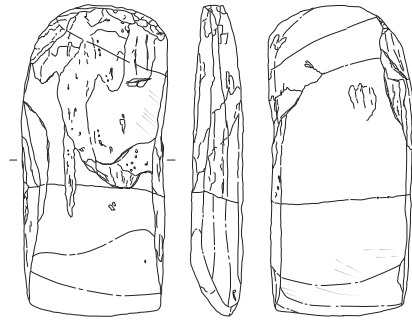
301

302

303



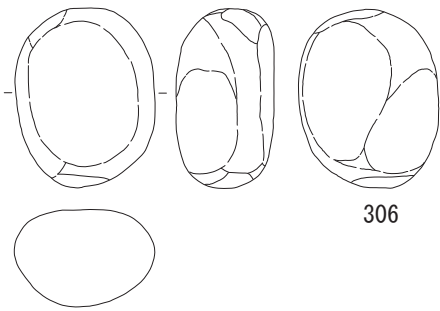
304



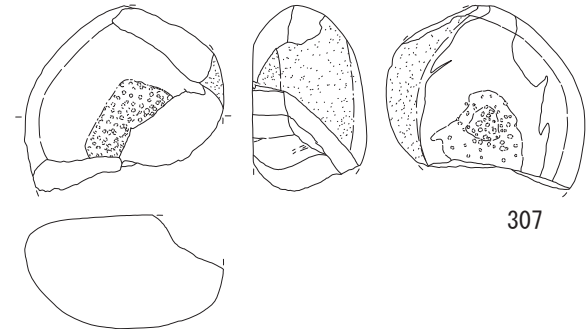
305

301 : S110
 302 : S115
 303 : SP353
 304 : SP150 (SB3)
 305 : 遺物包含層

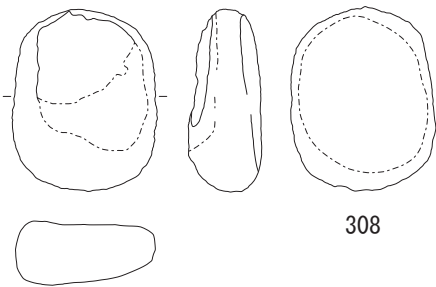
0 (1/3) 10cm



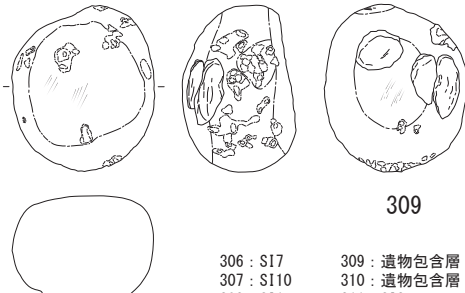
306



307

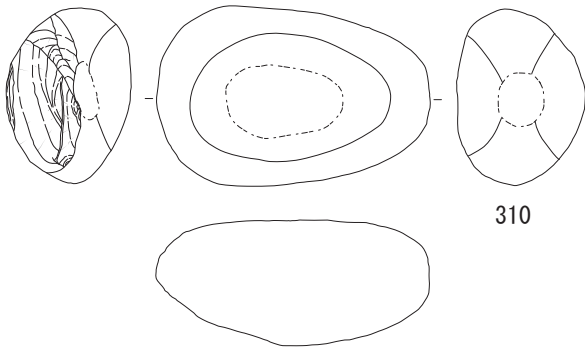


308

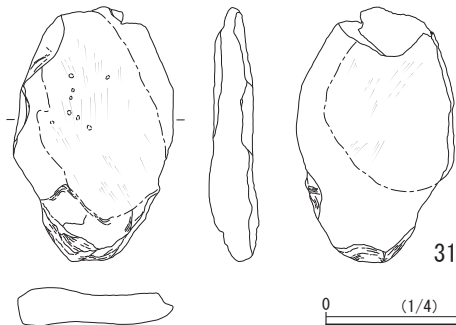


309

306 : S17
 307 : S110
 308 : S11
 309 : 遺物包含層
 310 : 遺物包含層
 311 : S12



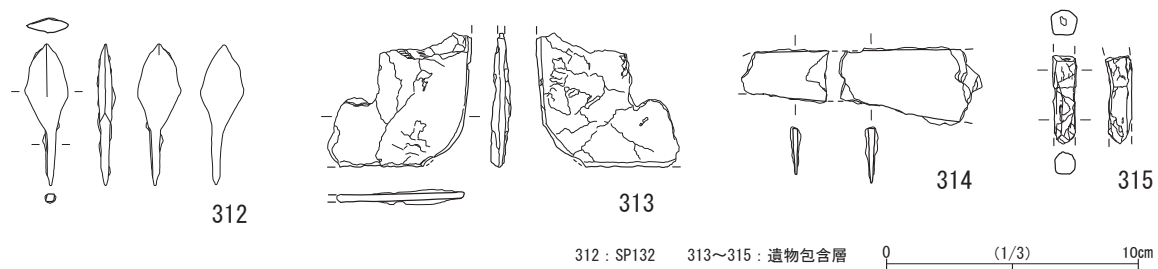
310



311

0 (1/4) 10cm

第39図 出土遺物実測図 (20)



第40図 出土遺物実測図 (21)

は両面から穿っている。281・282はS I 15から出土した滑石製の円盤である。283はS I 10から出土した角閃石安山岩製の紡錘車である。284～286は石包丁と思われる。284はS I 14出土、285はS P 906出土、286は遺物包含層出土である。287・288は砥石である。ともにS I 10出土である。289～292は凹基無茎式の石鎌である。289はS I 10出土。290は遺物包含層出土で安山岩製。291はS K 7出土で姫島産黒曜石。292はS K 16出土でサヌカイト製である。293～299はS I やS P から出土した剥片石器である。300はS P 193出土の姫島産黒曜石の石核である。301はS I 10出土で、縄文時代と思われる打製石斧を局部研磨している。安山岩製である。302はS I 15出土の蛤刃石斧である。303はS P 353出土の磨製石斧で、刃部を平坦にし、敲石に転用している。安山岩製である。304はS P 150出土の大型蛤刃石斧である。基部を敲打整形し、刃部は敲打整形の後、研磨している。305は遺物包含層出土の扁平片刃石斧で、刃部および全面を研磨加工している。緑泥片岩製である。306はS I 7出土の磨石で3面を使用している。花崗岩製である。307はS I 10出土の兼用敲石で上下面の磨面中央に敲打痕が残る。308はS I 1出土の磨石で2面に磨面がある。309は遺物包含層出土の磨石兼用敲石である。310は遺物包含層出土の磨石である。3面に磨面をもつ。311はS I 2出土で、2面に使用痕をもち、砥石と思われる。頁岩製である。

(13) 鉄器・鉄製品 (第40図 図版24)

312はS P 132出土の柳葉式の鉄鎌で、茎断面は正方形を呈する。313～315は遺物包含層出土の鉄製品で、313は鋏先と思われる。先端の厚さは2mm、上部は3mmである。314は鎌である。背部は水平にのび、刃部は緩やかに弧を描く。315は角釘と思われるが、断面は多角形をなす。

第3表 出土土器・土製品観察一覧表

挿 図 版	No.	出土 場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備 考	
					口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)						
20	12	1	SI1	弥生土器	甕		(2.4)		やや粗	良	にぶい黄橙色 明黄褐色	横ナデ 横ナデ	跳ね上げ口縁
20	12	2	SI1	弥生土器	壺	(17.8)	1.8		粗	やや良	灰白色 にぶい橙色	ヘラミガキ 指オサエ、ハケ目後ナデ	内面に波状文 外面に山形文
20	12	3	SI1	弥生土器	壺	(16.2)	(2.4)		密	良	にぶい黄褐色 褐色	ハケ目後ナデ 横ナデ、指オサエ	外面に山形文
20	12	4	SI1	弥生土器	甕		(6.1)	6.3	密	やや良	黒褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
20	12	5	SI1	弥生土器	甗		(6.0)	(6.4)	やや粗	不良	黒色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	焼成前に穿孔、外面に二次 焼成痕
20	12	6	SI1	弥生土器	甕		(9.8)	8.9	やや密	良	黒色 褐色	ヘラミガキ ヘラミガキ、ハケ目後ナデ	
20	12	7	SI3	弥生土器	甕		(2.9)		やや密	やや良	にぶい黄褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
20	12	8	SI3	弥生土器	鉢		(3.0)		やや粗	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
20	12	9	SI3	弥生土器	壺	(15.0)	(2.1)		やや粗	不良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
20	12	10	SI5	弥生土器	甕	(31.0)			やや粗	やや良	褐色 褐色	ナデ ナデ	連鎖状突帯
20	12	11	SI2	土師器	甕	(14.4)	19.5		密	良	にぶい黄褐色 灰黄褐色	ハケ目後ヘラケズリ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	畿内系
21	12	12	SI2	弥生土器	壺	(10.6)			密	良	灰褐色 褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	外面に二次焼成痕
21	12	13	SI2	弥生土器	壺	(15.4)	(7.0)		粗	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ハケ目後ナデ	
21	12	14	SI2	弥生土器	甕	(11.0)	(2.3)		やや粗	不良	褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
21	12	15	SI2	弥生土器	甕	(14.2)			やや粗	やや良	褐色 赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
21	12	16	SI2	土師器	甕	(14.0)	(2.9)		密	良	にぶい褐色 灰褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	外面に二次焼成痕
21	12	17	SI2	土師器	甕		(15.7)	2.7	密	やや良	灰褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ハケ目後ナデ、タタキ後ハケ目	外面に二次焼成痕
21	12	18	SI2	土師器	甕	(11.6)	(11.3)		密	良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	内外面に煤付着
21	12	19	SI2	土師器	甕	(17.5)	(5.5)		密	良	にぶい褐色 黒色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	布留式か
21	12	20	SI2	弥生土器	甕	(19.2)	(16.3)		やや粗	良	明赤褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
21	12	21	SI2	弥生土器	甕	(16.7)	27.8		密	良	にぶい黄褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
21	12	22	SI2	弥生土器	鉢	7.6	3.9	3.3	粗	不良	にぶい褐色 浅黄褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目、ヘラミガキ	下位に黒斑
21	12	23	SI2	土師器	鉢	(8.2)	(5.2)		粗	不良	明赤褐色 明黄褐色	ハケ目、ヘラミガキ ハケ目	
21	13	24	SI2	弥生土器	鉢	10.8	7.8	1.3	密	不良	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	二次焼成痕
21	13	25	SI2	弥生土器	鉢	(13.8)	(7.6)		密	良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ	外面に煤付着
21	13	26	SI2	弥生土器	高杯	(20.8)	(1.7)		密	良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
21	13	27	SI2	弥生土器	器台	4.7	5.8	10.5	密	良	にぶい褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ヘラナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	透穴4ヶ所
21	13	28	SI2	土師器	器台	8.2	(4.8)		粗	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	畿内系
21	13	29	SI2	弥生土器	ミニチュア 土器	6.3	(1.5)		やや密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	壺
21	13	30	SI2	弥生土器	ミニチュア 土器	(4.1)	4.7	1.3 ~ 3.2	密	良	浅黄褐色 浅黄褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	鉢、扁平形
22	13	31	SI7	弥生土器	壺	(14.2)	(2.5)		密	良	黒色 赤灰色 暗赤灰色	ナデ後ヘラミガキ ハケ目後ヘラミガキ	
22	13	32	SI7	弥生土器	壺		(13.0)	(1.1)	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	内面に1段の刺突文、外面 に2段の刺突文、伊予系
22	13	33	SI7	弥生土器	壺	(15.0)	(1.3)		密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	口縁端部に擬凹線文か
22	13	34	SI7	弥生土器	壺	(17.4)	(2.6)		やや粗	良	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ	斜格子文
22	13	35	SI7	弥生土器	器台か	(19.8)	(2.1)		やや粗	良	にぶい褐色 褐色	ナデ ハケ目後ナデ	波状文、刺突文
22	13	36	SI7	弥生土器	壺		(3.8)		粗	不良	にぶい黄褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ヘラミガキ、ナデ	
22	13	37	SI7	弥生土器	壺		(1.8)		密	良	にぶい赤褐色 褐色	ナデ ナデか	櫛描文
22	13	38	SI7	弥生土器	長頸壺	(8.2)	(7.0)		密	良	明黄褐色 褐色	ハケ目後ヘラミガキ ハケ目後ヘラミガキ	
22	13	39	SI7	弥生土器	甕	10.2	(2.1)		密	良	褐色 褐色	ナデ ナデ	赤色顔料塗布

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) (外)	主な調整(内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
22	13	40	SI7	弥生土器	甕	16.8	(3.5)		密	良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ ハケ目後ヘラミガキ	
22	13	41	SI7	弥生土器	甕	(18.7)	(3.7)		密	良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
22	13	42	SI7	弥生土器	甕		(18.1)		密	やや良	赤褐色 赤褐色	ハケ目後ヘラケズリ、ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
22	13	43	SI7	弥生土器	甕蓋		(6.0)		やや粗	やや良	灰白色 にぶい	ハケ目後ヘラミガキ、ナデ ハケ目後ヘラミガキ	上位に黒斑
22	13	44	SI7	弥生土器	ミニチュア 土器	(8.2)	(3.0)		粗	やや良	赤褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	鉢
22	13	45	SI7	弥生土器	鉢	13.2	6.6		密	やや良	にぶい 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
22	13	46	SI7	弥生土器	鉢	(15.9)	(4.1)		密	良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
22	13	47	SI7	弥生土器	高杯か	(13.6)	(2.1)		密	やや良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	赤色顔料塗布
22	13	48	SI7	土師器	高杯	(13.8)	(4.4)		密	良	褐色 褐色	ハケ目、指オサエ後ナデ ハケ目後ナデ	
22	13	49	SI7	土師器	高杯		(2.5)	(10.7)	密	良	にぶい にぶい	ハケ目後横ナデか ハケ目後横ナデか	
22	13	50	SI7	土師器	高杯		(4.2)	(9.8)	密	良	浅黄褐色 にぶい	ハケ目後ナデ ハケ目	
22	13	51	SI7	弥生土器	甕		(6.3)	(8.4)	密	良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
22	13	52	SI7	弥生土器	甕		(1.2)	3.2	粗	やや良	にぶい 赤褐色	ナデ ハケ目	二次焼成痕
22	13	53	SI7	弥生土器	鉢		(3.2)		やや粗	良	にぶい にぶい	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	把手
22	13	54	SI7	弥生土器	ミニチュア 土器	(4.0)	2.0		粗	不良	浅黄褐色 浅黄褐色	指オサエ ハケ目後ナデ	鉢、外面に黒斑
23	14	55	SI8	弥生土器	壺	(9.2)	(4.1)		密	良	明赤褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
23	14	56	SI8	弥生土器	ミニチュア 土器	(7.4)	(4.0)		密	良	褐色 にぶい	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、指オサエ	鉢
23	14	57	SI8	弥生土器	壺	(11.2)	(4.6)		密	良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
23	14	58	SI8	弥生土器	鉢	(14.2)	(3.6)		密	良	明赤褐色 明赤褐色	ハケ目、ヘラミガキ ハケ目、ヘラミガキ	
23	14	59	SI8	弥生土器	鉢	(7.7)	(4.2)		やや粗	やや良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
23	14	60	SI8	弥生土器	鉢	(14.1)	(3.4)		密	良	淡赤褐色 淡赤褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
23	14	61	SI8	弥生土器	甕		(3.3)		密	良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	列点文、赤色顔料塗布
23	14	62	SI8	弥生土器	甕	(19.5)	(9.2)		やや密	やや良	褐色 明赤褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	刻み目、連続指頭押圧痕
23	14	63	SI8	弥生土器	甕	(18.4)	(11.3)		やや密	やや良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
23	14	64	SI8	弥生土器	壺か 器台	(25.0)	(6.8)		密	やや良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ	絵画土器
23	14	65	SI8	土師器	高杯		(3.2)	(10.2)	密	良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	透穴
23	14	66	SI8	弥生土器	壺		(6.5)	(11.8)	やや粗	良	灰黄褐色 にぶい	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
23	14	67	SI9	弥生土器	甕	(15.4)	(5.6)		密	良	灰白色 にぶい	ナデ ハケ目後ナデ	
24	14	68	SI10	弥生土器	壺	(24.0)	(2.0)		密	やや良	褐色 明赤褐色	ナデ ナデ	斜格子文
24	14	69	SI10	弥生土器	壺	(32.4)	(6.9)		密	やや良	にぶい にぶい	ナデ ナデ	山形文
24	14	70	SI10	弥生土器	壺	(32.8)	(3.7)		密	良	にぶい にぶい	ナデ ナデ	双頂突帯、山形文
24	14	71	SI10	弥生土器	壺	21.0	(9.5)		密	良	にぶい にぶい	ナデ ハケ目後ナデ	山形文、尖頂突帯
24	14	72	SI10	弥生土器	壺	(25.4)	(1.4)		密	良	黒褐色 褐色	ナデ ハケ目後ナデ	斜格子文、凹線文
24	14	73	SI10	弥生土器	壺	(11.5)	(5.0)		粗	やや良	灰黄褐色 灰黄褐色	ハケ目 横ナデ	擬凹線文か
24	14	74	SI10	弥生土器	壺	(10.0)	(2.8)		密	良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
24	14	75	SI10	弥生土器	壺	(8.2)	(4.5)		密	やや良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ、ヘラナデ ヘラミガキ	
24	14	76	SI10	弥生土器	壺	(12.6)	(5.0)		密	やや良	にぶい 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラナデ ナデ	
24	15	77	SI10	弥生土器	壺	16.4	(6.0)		密	良	にぶい にぶい	ナデ、ヘラナデ ナデ、ヘラミガキ	2条の擬凹線 頸部に貼付突帯2条
24	15	78	SI10	弥生土器	壺	(18.6)	(9.7)		密	良	にぶい にぶい	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	2条の連鎖状突帯、凹部に布目 痕、口縁は3条の凹線、伊予系
24	15	79	SI10	弥生土器	壺		(5.8)		密	良	にぶい 黒色	ナデ、ヘラミガキ ヘラミガキ	3条の双頂突帯、九州系

挿 図 No.	図 版 No.	出土 場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備 考	
					口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)						
24	15	80	SI10	弥生土器	壺		(14.6)		密	良	褐灰色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラナデ	
24	15	81	SI10	弥生土器	壺		(10.4)	9.0	密	良	灰黄褐色 橙色	ヘラナデ ヘラミガキ、ナデ	
25	15	82	SI10	弥生土器	甕	(21.2)	(9.2)		密	良	灰白色 淡黄色	ナデ ナデ	
25	15	83	SI10	弥生土器	甕	(27.0)	(2.7)		やや粗	やや良	灰白色 浅黄褐色	ハケ目 ナデ	円弧に沿う溝描文に直交する溝描 文、刻み目
25	15	84	SI10	弥生土器	甕	(27.2)	(8.5)		やや密	やや良	浅黄褐色 褐色	摩滅により調整不明 ハケ目、ナデ	刻み目、刺突文
25	15	85	SI10	弥生土器	甕	(19.2)	(1.8)		密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	刻み目
25	15	86	SI10	弥生土器	甕	(21.8)	(8.1)		密	良	にぶい褐色 にぶい赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	粘土帯接合痕、刻み目
25	15	87	SI10	弥生土器	甕	(25.2)	(9.5)		やや粗	やや良	褐灰色 にぶい黄褐色	ハケ目、ナデ ナデ	
25	15	88	SI10	弥生土器	甕		(5.5)	(5.8)	やや密	やや良	にぶい黄褐色 褐色	ナデ、ヘラナデ ヘラミガキ、ナデ	内外面下位に煤付着
25	15	89	SI10	弥生土器	甕		(6.6)	6.8	密	良	褐灰色 にぶい褐色	ヘラミガキ、ナデ ヘラミガキ、ナデ	
25	15	90	SI10	弥生土器	甕		(5.9)	6.8	密	良	にぶい褐色 褐色	指オサエ、ナデ ナデ、ハケ目	
25	15	91	SI10	弥生土器	甕		(13.5)	6.0	密	やや良	黒褐色 にぶい赤褐色	ハケ目、ナデ ハケ目、ヘラミガキ	
25	15	92	SI10	弥生土器	甕		(9.5)	6.5	やや密	良	にぶい褐色 褐色	ナデ、指オサエ ヘラミガキ、ナデ	上げ底、外面下位に煤付着
25	15	93	SI10	弥生土器	高杯		(7.5)		やや粗	やや良	褐色 浅黄色	未調整 ハケ目後ナデ	
25	15	94	SI10	弥生土器	器台か		(5.7)	(8.2)	密	良	灰褐色 灰色	ナデ、ヘラミガキ ヘラミガキ	
25	15	95	SI10	弥生土器	ミニチュア 土器	7.9	5.6	3.2	密	良	灰褐色 灰褐色	ナデ、ヘラミガキ ナデ、ハケ目後ヘラミガキ	鉢
25	15	96	SI10	弥生土器	ミニチュア 土器	6.4	6.0	4.3	密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	鉢
25	15	97	SI10	弥生土器	甕	9.6	10.9	4.3	密	良	にぶい黄褐色 褐色	ナデか ナデか	
25	15	98	SI10	土製品	紡錘車	直径：4.9	厚さ：1.2	孔径：0.6	やや粗	やや良	褐色 灰褐色	ナデ ナデ	焼成前に穿孔
25	15	99	SI10	土製品	紡錘車	直径：5.7	厚さ：1.3	孔径：0.8	やや粗	良	灰褐色 にぶい赤褐色	ナデ ナデ	焼成前に穿孔
25	15	100	SI10	土製品	紡錘車	直径：5.5	厚さ：1.2	孔径：0.7	やや粗	やや良	褐色 褐色	ナデ ナデ	焼成前に穿孔
25	15	101	SI10	土製品	分銅形 土製品	長さ：(3.2)		厚さ：(0.6)	密	やや良	褐色 にぶい褐色	指ナデ 刺突	頭髮に刺突文、目に半截竹 管文
25	16	102	SI10	土製品	分銅形 土製品	長さ：(8.1)	幅：9.8	厚さ：2.7	やや粗	良	灰黄褐色 にぶい黄褐色	指ナデ 指ナデ	表面に沈線、胴部分
26	15	103	SI11	弥生土器	甕か		(2.3)	3.1	やや粗	良	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	ナデ、指オサエ ナデ	
26	15	104	SI11	弥生土器	壺か		(2.6)		やや粗	良	浅黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	
26	15	105	SI13	弥生土器	壺	(22.6)	(6.1)		密	良	にぶい黄褐色 黒色	ハケ目後ナデ ナデ	沈線文、櫛波状文
26	15	106	SI13	弥生土器	器台		(8.9)		やや粗	やや良	にぶい黄褐色 灰黄褐色	ナデ、ヘラナデ ナデ	山陰系(鼓形器台)
26	16	107	SI13	弥生土器	ミニチュア 土器	6.0	5.0	3.0	粗	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	指オサエ、ハケ目後ナデ 指オサエ、ナデ	鉢
26	15	108	SI13	弥生土器	甕	(12.6)	(4.5)		密	良	にぶい黄褐色 褐色	ナデ ナデ	粘土帯接合痕明瞭
26	16	109	SI13	土師器	椀	(12.8)	(5.1)		密	良	褐灰色 にぶい赤褐色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラミガキ	
26	16	110	SI13	土師器	高杯	14.8	13.9	10.4	密	良	灰黄褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ナデ後ハケ目か	円板充填
26	16	111	SI14	弥生土器	壺	(16.0)	(3.0)		やや粗	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ、ハケ目か ナデ、指オサエ	わずかに文様痕跡
26	16	112	SI14	弥生土器	甕	23.2	(5.5)		やや粗	良	浅黄色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ、ハケ目か	
26	16	113	SI14	弥生土器	甕		(11.9)	6.0	やや密	やや良	灰白色 にぶい褐色	ハケ目、指オサエ ハケ目、ヘラミガキ	外面に煤付着
27	16	114	SI15	弥生土器	壺	(15.0)	(18.2)	(9.3)	やや粗	良	黒褐色 にぶい褐色	ナデ、ヘラミガキ ナデか	
27	16	115	SI15	弥生土器	壺	(18.2)	(6.6)		密	良	褐色 明赤褐色	ハケ目後ナデ ナデ、ハケ目	斜線文を埋めた鋸歯文
27	16	116	SI15	弥生土器	壺	(12.0)	(6.1)		密	やや良	灰黄色 にぶい黄褐色	ナデ ハケ目後ナデ	
27	16	117	SI15	弥生土器	壺	(18.6)	(5.0)		密	やや良	褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	斜格子文突帯
27	16	118	SI15	弥生土器	壺		(2.3)		密	良	にぶい赤褐色 赤褐色	ナデ ナデ	刻み目
27	16	119	SI15	弥生土器	甕	(17.4)	(3.2)		やや粗	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	

挿 図	版	No.	出土 場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備 考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
27	16	120	SI15	弥生土器	甕	(21.9)	(5.5)		やや密	やや良	にぶい橙色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ	
27	16	121	SI15	弥生土器	甕	(15.3)	(16.0)		密	良	にぶい黄褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
27	16	122	SI15	弥生土器	壺		(6.9)		密	やや良	褐色 浅黄褐色	摩滅により調整不明 摩滅により調整不明	
27	16	123	SI15	弥生土器	壺		(6.6)	7.8	やや粗	やや良	にぶい褐色 褐色	摩滅により調整不明 摩滅により調整不明	レンズ状底部
27	16	124	SI15	弥生土器	甕か		(3.3)	7.9	密	やや良	にぶい黄褐色 褐色	指オサエ、ナデ ナデ	
27	16	125	SI15	土師器	甗	長さ:(32)	幅:(3.9)	厚さ:(2.9)	密	やや良	褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	把手
27	16	126	SI15	弥生土器	高杯		(3.1)		やや粗	良	にぶい褐色 にぶい赤褐色	ナデ ハケ目後ナデ	
27	16	127	SI15	弥生土器	高杯	(24.2)	(4.3)		密	不良	褐色 褐色	ナデか ナデか	九州系
27	16	128	SI15	弥生土器	器台か		(2.4)	(11.2)	密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	
27	16	129	SI15	弥生土器	ミニチュア 土器	(5.8)	4.0	1.6	密	良	明赤褐色 にぶい褐色	ヘラミガキ後ナデ ヘラミガキ後ナデ	鉢、底部に「+」ヘラ記号
27	16	130	SI15	弥生土器	ミニチュア 土器	(6.2)	3.2		密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ ナデ	鉢
27	16	131	SI15	弥生土器	ミニチュア 土器	(3.4)	(3.6)		密	やや良	にぶい褐色 褐色	ナデ ナデ	鉢
27	17	132	SI15	弥生土器	ミニチュア 土器		(2.0)	(2.2)	密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ、指オサエ ナデ	鉢
27	17	133	SI16	土師器	甕	(11.6)	(2.5)		密	やや良	褐色 褐色	ナデか 摩滅により調整不明	吉備系
27	17	134	SI16	土師器	壺		(10.3)		密	良	にぶい褐色 にぶい黄褐色	ナデか ナデか	
27	17	135	SI16	土師器	甕	15.2	18.6		密	良	褐色 褐色	ナデ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目	
27	17	136	SI16	弥生土器	ミニチュア 土器	(3.8)	3.3	1.7	密	良	褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	鉢
27	17	137	SI16	土師器	壺		(7.4)	1.6	密	良	にぶい黄褐色 灰黄色	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	
28	17	138	ST1	弥生土器	壺	22.3	48.4	8.9	やや粗	良	明赤褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	斜格子文突帯、レンズ状底 部、棺身
28	17	139	ST1	弥生土器	壺		(31.4)		密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ ハケ目	棺蓋
28	17	140	ST1	弥生土器	甕	(19.8)	(32.0)	3.6	密	やや良	にぶい褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	外面中位に煤附着
28	17	141	ST1	弥生土器	甕	(16.2)	26.4	2.8	密	良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	レンズ状底部
28	17	142	ST1	弥生土器	器台か	(17.8)	(2.8)		密	良	灰白色 灰白色	ナデ ハケ目後ナデ	口縁端部貼付、土器棺内出土
28	17	143	ST2	弥生土器	壺		(37.3)		密	やや良	明褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	斜格子文突帯、棺身
28	17	144	ST2	弥生土器	壺か	(13.4)	(3.1)		密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
28	18	145	ST2	弥生土器	甕		(13.9)		やや密	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ヘラミガキ	
28	17	146	ST2	弥生土器	甕	(16.8)	(27.0)	(4.2)	粗	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	棺蓋、二次焼成痕
29	18	147	ST3	弥生土器	壺	26.6	(42.8)	(9.0)	やや粗	やや良	褐色 褐色	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	斜格子文突帯、棺身、外面 中位に黒斑
29	18	148	ST3	弥生土器	壺	(18.2)	(15.5)		密	良	にぶい褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ	外面に竹管文、鋸歯文、斜 格子文突帯
29	18	149	ST3	弥生土器	壺		(29.8)	(7.6)	密	不良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	外面中位に黒斑、棺蓋
30	18	150	SK6	弥生土器	甕	(14.4)	(4.0)		やや密	良	にぶい褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	吉備系
30	18	151	SK6	弥生土器	壺		(5.1)		密	やや良	にぶい黄色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	竹管文、波状文
30	18	152	SK6	弥生土器	壺		(7.6)		粗	やや良	灰色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリか ハケ目後ナデ	
30	18	153	SK6	弥生土器	甗		(5.8)	(4.4)	やや粗	良	にぶい褐色 にぶい褐色	指オサエ、ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	焼成後の穿孔
30	18	154	SK6	弥生土器	高杯		(3.7)		密	やや良	浅黄褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
30	18	155	SK6	弥生土器	高杯		(8.6)		やや密	良	褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	赤色顔料塗布
30	18	156	SK6	弥生土器	高杯		(5.2)		密	良	褐色 褐色	ハケ目、ナデ ハケ目後ナデ	
30	18	157	SK6	弥生土器	高杯		(2.5)	(14.8)	密	良	明赤褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ ハケ目、ヘラミガキ	
30	18	158	SK6	弥生土器	器台		(8.7)		密	やや良	浅黄褐色 淡褐色	ナデ ナデ	
30	18	159	SK6	弥生土器	器台		(5.9)		やや密	やや良	淡赤褐色 淡赤褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	一周16穴(2段以上)

挿 図 No.	図 版 No.	出 土 場 所	種 別	器 種	法量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調 (内) (外)	主 な 調 整 (内) (外)	備 考	
					口 径 (復元値)	器 高 (残存値)	底 径 (復元値)						
30	18	160	SK6	弥生土器	高杯				粗	不良	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	調整不明 調整不明	
30	18	161	SK6	弥生土器	ミニチュア 土器	(6.7)	(4.6)	2.9	やや密	やや良	灰褐色 褐色	指オサエ、ハケ目後ナデ 指オサエ、ハケ目後ナデ	鉢
30	18	162	SK7	弥生土器	甕	(32.8)	(2.5)		やや粗	やや良	灰黄褐色 灰黄褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	内面に黒斑
30	18	163	SK7	弥生土器	甕		(3.0)		密	やや良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
30	18	164	SK7	弥生土器	甕		(3.9)	(6.8)	密	不良	にぶい黄色 明赤褐色	ハケ目後ヘラミガキ ハケ目後ナデ	
30	19	165	SK8	土師器	甕	15.2	22.9		やや密	やや良	にぶい褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ、ヘラケズリ ハケ目後ナデ	畿内系
30	18	166	SK9	弥生土器	高杯	(13.1)	(2.9)		密	良	浅黄褐色 浅黄褐色	ナデ ナデ	
30	18	167	SK11	弥生土器	壺	(10.8)	(3.2)		やや粗	良	褐色 にぶい褐色	ナデか ハケ目	4段1単位の刺突文
30	19	168	SK13	弥生土器	高杯		(9.5)		密	良	褐色 褐色	ヘラナデ、ナデ ヘラミガキ	3穴の透穴2段
30	18	169	SK19	土師器	皿		(1.3)	(4.8)	密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ ナデ	底部回転糸切り
31	19	170	SK16	弥生土器	壺		(18.4)	10.6	やや密	やや良	にぶい褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	外面中位に煤付着
31	19	171	SD2	土師器	椀	(13.6)	5.4		やや密	良	にぶい褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
32	19	172	SP154	弥生土器	壺	(33.6)	(2.6)		密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ ナデ	山形文
32	19	173	SP281	弥生土器	長頸壺	(4.4)	(7.5)		密	良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	口縁部に沈線5条
32	19	174	SP951	弥生土器	長頸壺		(12.1)		密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ後ミガキか ハケ目	底部に黒斑
32	19	175	SP330	弥生土器	長頸壺		(2.5)		密	良	浅黄褐色 明赤褐色	ハケ目後ナデ ナデ後ヘラミガキ	九州系、丹塗研磨
32	19	176	SP139	弥生土器	壺		(3.5)		密	やや良	浅黄褐色 にぶい褐色	ナデ ハケ目後ナデ	尖頂突帯貼付、一部に刻み目
32	19	177	SP341 (SB9)	弥生土器	壺		(1.9)		やや密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ ナデ	刻み目突帯
32	19	178	SP293	弥生土器	壺		(8.3)	(4.6)	やや密	やや良	褐灰色 明赤褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
32	19	179	SP219	弥生土器	壺		(4.4)		やや密	やや良	にぶい褐色 明赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
32	19	180	SP407	弥生土器	甕	(16.2)	(2.7)		やや密	不良	にぶい赤褐色 暗灰黄色	指オサエ、ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	円形刺突文、刻み目突帯
32	19	181	SP313 (SB7)	弥生土器	甕	(34.4)	(4.3)		やや密	不良	浅黄色 灰黄色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	連続指頭押圧痕、刻み目
32	19	182	SP353	弥生土器	甕	(24.2)	(7.0)		密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	
32	19	183	SP275 (SB1)	弥生土器	甕	(25.4)	(8.4)		やや粗	やや良	褐灰色 にぶい褐色	ハケ目後ヘラミガキ、ナデ ハケ目後ナデ	二次焼成痕
32	19	184	SP381	弥生土器	壺		(2.6)		密	良	褐色 褐色	ナデ ナデ	刻み目
32	19	185	SP429	弥生土器	甕		9.2		粗	良	にぶい黄褐色 灰褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目	外面にハケ目原体による施文か、刺突文
32	19	186	SP425	弥生土器	甕		(10.4)	(9.5)	やや密	やや良	褐色 明褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	二次焼成痕
32	19	187	SP281	弥生土器	甕		(8.6)	(5.8)	密	やや良	黒褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	二次焼成痕
33	20	188	SP401	弥生土器	甕	(18.2)	32.3	2.8	やや密	やや良	灰白色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	外面下位に煤付着
33	19	189	SP467	土師器	鉢	6.5	4.7		密	やや良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
33	19	190	SP238 (SB1)	弥生土器	高杯か		(2.4)		やや密	やや良	にぶい黄褐色 明赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
33	19	191	SP275 (SB1)	弥生土器	高杯		(13.1)	(16.0)	密	不良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ヘラミガキ、ナデ	裾上端部に刻み目
33	19	192	SP358	弥生土器	高杯		(3.4)	(10.2)	密	やや良	灰白色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
33	20	193	SP953	弥生土器	高杯		(5.5)	9.8	やや密	やや良	褐色 褐色	指オサエ ナデ、ヘラミガキ	透穴3穴
33	20	194	SP384	弥生土器	ミニチュア 土器	(4.9)	2.5	1.5	粗	不良	明赤褐色 明赤褐色	指オサエ、ハケ目後ナデ 指オサエ、ハケ目後ナデ	鉢
33	20	195	SP909	土師器	壺	8.1	8.3		密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	小型丸底壺
33	20	196	SP952	土師器	椀	13.1	5.9		密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラミガキ	
33	20	197	SP250	須恵器	杯身		(2.1)		密	良	灰白色 褐灰色	回転ナデ 回転ナデ	
33	20	198	SP461	土師器	杯	(14.0)	(2.6)		やや密	やや良	褐色 褐色	ナデ ナデ	
33	20	199	SP901	土師器	椀	15.4	4.7	6.5	密	やや良	灰黄色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調(内) 色調(外)	主な調整(内) 調整(外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
33	20	200	SP902	土師器	皿	(7.8)	1.4	5.8	密	良	にぶい にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
33	20	201	SP424	土師器	皿	(9.1)	1.4	(5.0)	やや密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り
33	20	202	SP459	土師器	皿	(7.2)	1.3	(4.6)	やや密	不良	橙色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	
34	20	203	遺物包含層	弥生土器	壺	(10.7)	(27.0)	6.4	密	やや良	灰色 灰白色	指オサエ、ハケ目 ハケ目、ナデ、ヘラミガキ	
34	20	204	遺物包含層	弥生土器	壺		(1.8)		密	やや良	褐色 にぶい褐色	不明 不明	木葉文(二枚貝による施文)
34	20	205	遺物包含層	弥生土器	壺	(13.6)	(1.6)		密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	口縁に2条の凹線文、刻み目
34	20	206	遺物包含層	弥生土器	壺	(26.4)	(11.0)		密	やや良	灰赤色 赤褐色	ナデ ナデか	円形浮文貼付、山形文、3条の尖頂突帯
34	20	207	遺物包含層	弥生土器	壺	(15.3)	(1.9)		密	やや良	褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	口縁に2条の凹線文
34	20	208	遺物包含層	弥生土器	壺	21.5	(5.1)		密	やや良	褐色 浅黄褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	口縁に3条の凹線文、安芸系
34	20	209	遺物包含層	弥生土器	壺	(9.6)	(4.2)		やや密	良	にぶい黄褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	口縁部直下に穿孔
34	20	210	遺物包含層	弥生土器	甕	(14.2)	(3.5)		やや密	やや良	オリーブ黒色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	内面多量の炭化物付着、赤色顔料塗布、刻み目
34	20	211	遺物包含層	弥生土器	甕	14.6	(4.9)		密	良	浅黄色 浅黄色	ナデ ナデ、ヘラミガキ	内面に粘土帯接合痕
34	20	212	遺物包含層	弥生土器	壺	(15.0)	(4.6)		密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	山陰系
34	20	213	遺物包含層	弥生土器	壺		(5.0)		密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ヘラミガキ後ナデ ヘラミガキ	山陰系
34	20	214	遺物包含層	弥生土器	壺	(11.2)	(5.9)		密	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	
34	20	215	遺物包含層	弥生土器	壺	(29.2)	(6.6)		密	良	灰黄色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ 指オサエ	口縁に4本の凹線文、外面に10本の凹線文
34	20	216	遺物包含層	弥生土器	壺	(12.6)	(2.1)		やや密	やや良	浅黄褐色 明黄褐色	ナデか ナデ	口縁下に突帯
34	21	217	遺物包含層	弥生土器	壺		(19.3)	(6.8)	やや密	不良	にぶい黄色 にぶい黄褐色	ナデか、指オサエ ナデ、ヘラミガキ	
34	21	218	遺物包含層	弥生土器	壺		(4.5)		密	良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	ハケ目 不明	
34	21	219	遺物包含層	土師器	壺		(5.7)		密	やや良	黒色 褐色	ナデ、ヘラナデ ナデ、ヘラナデ	小型丸底壺
35	21	220	遺物包含層	弥生土器	甕		(16.9)	8.8	密	良	黒色 褐色	ヘラミガキ ハケ目か	
35	21	221	遺物包含層	弥生土器	甕	(29.2)	(12.8)		密	良	浅黄褐色 浅黄褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	幅1.8cmに5条のハケ目、連続指頭押圧文
35	21	222	遺物包含層	弥生土器	鉢	(11.2)	9.1	2.2	密	良	灰黄色 黒褐色	ナデ、指オサエ後ナデ ナデ、ハケ目後ナデ	レンズ状底部
35	21	223	遺物包含層	弥生土器	鉢	(18.0)	(7.1)		密	良	浅黄褐色 黒褐色 浅黄褐色	ナデ後ヘラミガキ、指オサエ ナデ後ヘラミガキ	刻み目
35	21	224	遺物包含層	弥生土器	鉢か		(1.8)		密	やや良	褐色 褐色	摩滅により調整不明 ハケ目後ナデか	
35	21	225	遺物包含層	弥生土器	高杯		(5.0)	8.0	密	不良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ	矢羽根形透穴(未貫通)、沈線5条、赤色顔料塗布、伊予系
35	21	226	遺物包含層	弥生土器	高杯		(11.4)		密	やや良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	赤色顔料塗布
35	21	227	遺物包含層	弥生土器	高杯		(6.4)		やや密	不良	明褐色 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ	焼成前に穿孔
35	21	228	遺物包含層	弥生土器	高杯	23.2	(3.3)		密	良	にぶい褐色 浅黄褐色	ナデ、ハケ目 ナデ	
35	21	229	遺物包含層	弥生土器	高杯		(3.5)		やや密	良	黄褐色 浅黄褐色	ヘラミガキ ヘラミガキ	内面に多量の炭化物付着
35	21	230	遺物包含層	土師器	高杯		(7.9)	(11.4)	密	良	赤褐色 明赤褐色	ナデ、ヘラナデ ナデ、ヘラナデ	
35	21	231	遺物包含層	弥生土器	高杯		(6.0)	(11.0)	密	良	明赤褐色 赤褐色	ナデ ナデ、ヘラミガキ	透穴推定3穴
35	21	232	遺物包含層	弥生土器	器台		(6.8)		密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	
35	21	233	遺物包含層	弥生土器	器台		(5.8)		密	やや良	褐色 褐色	ナデ ハケ目	
35	21	234	遺物包含層	弥生土器	鉢	(9.3)	4.8	3.4	密	良	黄灰色 黄灰色 にぶい褐色	指オサエ、ナデか ナデ	
35	21	235	遺物包含層	弥生土器	ミニチュア土器	(3.1)	3.5	(2.9)	密	やや良	にぶい褐色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
35	21	236	遺物包含層	弥生土器	ミニチュア土器	(6.8)	3.4	1.5	密	良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	鉢、赤色顔料塗布
35	21	237	遺物包含層	土製品	支脚	残存長:90	残存幅:48		密	良	褐色 褐色	指オサエ	
35	21	238	遺物包含層	土製品	分銅形土製品	長さ:(4.3)	幅:(5.1)	厚さ:(1.4)	やや粗	良	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	ナデ後ハケ目 ナデ後ハケ目、ヘラミガキ	胴部分の一部のみ
35	21	239	遺物包含層	土製品	分銅形土製品	長さ:8.6	幅:(5.5)	厚さ:1.5	密	良	にぶい褐色 灰褐色	ナデ 指オサエ、ナデ	眉・鼻は粘土帯、目は爪状施文、口・頭髮は刺突文で表現、赤色顔料塗布

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
35	21	240	遺物包含層	土製品	有溝管状土鍾	長さ:2.8	直径:1.5	孔径:0.2	密	良	にぶい橙色	ナデ	
35	21	241	遺物包含層	土製品	有溝管状土鍾	長さ:2.8	直径:1.8	孔径:0.2	やや粗	やや良	浅黄橙色	指オサエ	
36	21	242	遺物包含層	須恵器	壺蓋		3.8	(9.6)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	天井部ヘラ切り後未調整
36	22	243	遺物包含層	須恵器	杯蓋		4.1	(12.8)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ	天井部ヘラケズリ
36	22	244	遺物包含層	須恵器	杯身	11.1	(3.2)		密	良	灰色 灰色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後ヘラケズリ	
36	22	245	遺物包含層	須恵器	杯身	11.0	(3.6)		密	良	灰色 灰色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後ヘラケズリ	
36	22	246	遺物包含層	須恵器	高杯		(2.4)		やや粗	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	3条の波状文
36	22	247	遺物包含層	須恵器	應		(3.0)		密	良	灰色 灰色	摩滅により調整不明 回転ナデ	
36	22	248	遺物包含層	須恵器	高杯		(6.2)	脚部径:(32)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	長方形透穴2か所、脚に2条の浅い沈線
36	22	249	遺物包含層	須恵器	壺		(4.9)		密	良	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
36	22	250	遺物包含層	須恵器	高杯		(5.5)		密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	長方形透穴
36	22	251	遺物包含層	白磁	椀	(13.4)	(3.0)		密	良	素地:灰白色 釉:灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
36	22	252	遺物包含層	白磁	椀	(15.2)	(3.3)		密	良	素地:灰白色 釉:灰黄色	回転ナデ 回転ナデ後回転ヘラケズリ	
36	22	253	遺物包含層	土師器	椀		(3.0)	(6.4)	密	やや良	にぶい黄橙色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
36	22	254	遺物包含層	土師器	椀		(1.8)	(6.2)	密	良	灰黄褐色 褐灰色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
36	22	255	遺物包含層	土師器	皿	(8.6)	1.7	4.1	密	良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り
36	22	256	遺物包含層	土師器	皿	8.8	1.7	4.5	密	良	にぶい橙色 橙色	回転ナデ、指オサエ 回転ナデ	
36	22	257	遺物包含層	須恵器	播鉢	(28.0)			密	やや良	灰黄色 暗灰黄色	横ナデ 横ナデ	6条の卸し目残、東播系か
36	22	258	遺物包含層	瓦質土器	鍋		(2.1)		密	良	褐灰色 褐灰色	回転ナデ 回転ナデ	
36	22	259	遺物包含層	須恵器	播鉢		(3.1)		密	良	灰色 灰色	ナデ、指オサエ ナデ	東播系か
36	22	260	遺物包含層	陶器	播鉢	(33.4)	(5.1)		密	良	灰赤色 暗赤褐色	回転ナデ 回転ナデ	7条の卸し目、備前焼
37	22	261	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	(4.6)	3.0	1.7	やや粗	不良	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ、指オサエ	鉢
37	22	262	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器		(4.2)	(1.8)	やや粗	やや良	黒褐色 にぶい赤褐色	指オサエ、ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	鉢
37	22	263	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	4.6	4.7	2.6	密	良	赤褐色 にぶい黄褐色	指オサエ後ナデ ハケ目後ナデ、指オサエ	鉢、赤色顔料塗布
37	22	264	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	5.2	3.9	3.4	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	鉢、脚外面に黒斑
37	22	265	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	6.1	4.0	2.8	やや密	不良	にぶい橙色 灰褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ、指オサエ	鉢
37	22	266	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	5.7	3.9	2.6	密	やや良	橙色 褐灰色	指オサエ、ハケ目後ナデ 指オサエ、ハケ目後ナデ	鉢
37	22	267	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	7.5	5.4	2.2	粗	やや良	明褐色 明褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ、指オサエ	鉢
37	22	268	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	7.8	5.6	1.9	やや密	不良	にぶい橙色 褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、指オサエ	鉢、外面に黒斑
37	22	269	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器		(3.1)	2.2	やや密	不良	明赤褐色 灰黄色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	鉢
37	22	270	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	5.0	6.2		密	不良	明褐色 明褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	壺
37	22	271	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器		(6.9)	1.6	粗	不良	明褐色 褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	壺、外面に黒斑
37	22	272	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器		(7.0)	1.0	やや粗	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	壺
37	23	273	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器		(8.1)	2.2	密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ、指オサエ ハケ目後ナデ、ヘラミガキ	壺、外面に黒斑
37	23	274	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器		(5.3)	1.6	やや密	不良	褐色 褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	壺、内面に黒斑
37	23	275	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器		(6.9)	(1.8)	粗	やや良	褐灰色 褐色	ヘラミガキ ハケ目後ナデ	壺、内面にヘラ状工具による押圧、外面に黒斑
37	23	276	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	5.0	7.2	3.8	密	不良	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	壺、外面に黒斑
37	23	277	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	4.9	8.1	3.9	やや粗	不良	褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	壺、頸部に刺突文
37	23	278	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	6.0	8.4	3.9	やや粗	不良	褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ナデ	壺、外面に黒斑
37	23	279	遺物包含層 (ニチア7土器群)	弥生土器	ミニチュア土器	(6.0)	(8.5)	4.4	やや粗	不良	明赤褐色 明赤褐色	指オサエ、ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	壺

第4表 出土石器・石製品観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)(残存値)			重量(g)	石 材	備 考
						長さ	幅	厚さ			
38	23	280	SI15	石製品	滑石製模造品	(3.2)	3.7	0.5	9.9	滑石	両面穿孔
38	23	281	SI15	石製品	石製円盤		直径:(3.3)	0.6	6.1	滑石	
38	23	282	SI15	石製品	石製円盤		直径:(4.0)	0.4	4.4	滑石	
38	23	283	SI10	石製品	紡錘車		直径:(5.4)	0.5	5.4	角閃石安山岩	
38	23	284	SI14	石製品	石包丁か	(6.4)	(2.9)	0.4	13.6		一部刃部が残存
38	23	285	SP906	石製品	石包丁か	(6.1)	(3.8)	0.5	16.7	頁岩	
38	23	286	遺物包含層	石製品	石包丁か	(7.6)	(6.0)	1.0	58.7		磨き加工面が残る
38	23	287	SI10	石製品	砥石	(4.0)	(5.7)	3.5	62.7		4面使用
38	23	288	SI10	石製品	砥石	12.4	15.5	6.2	800.0	砂岩か	3面使用
38	23	289	SI10	石器	石鏃	2.5	0.9	0.4	1.1		凹基無茎式、扱りは浅い 側片押圧剥離
38	23	290	遺物包含層	石器	石鏃	1.9	1.3	0.3	0.6	安山岩	凹基無茎式、扱りは浅い
38	23	291	SK7	石器	石鏃	(2.3)	(1.6)	0.6	1.5	姫島産黒曜石	凹基無茎式、扱りは浅い
38	23	292	SK16	石器	石鏃	3.6	(2.0)	0.6	2.5	サヌカイト	凹基無茎式、扱りは浅い
38	23	293	SI7	石器	剥片石器	4.0	3.3	0.7	10.6		刃部は両面から粗い剥離
38	23	294	SI8	石器	剥片石器	2.7	3.7	0.6	5.6		刃部は両面加工
38	23	295	SI10	石器	剥片石器	4.3	2.7	0.6	5.6	サヌカイト	
38	24	296	SI15	石器	剥片石器	4.6	2.7	1.6	15.5	姫島産黒曜石	打突剥離
38	23	297	SI15	石器	剥片石器	3.0	1.4	0.3	1.6		打突剥離
38	23	298	SP205 (SB9)	石器	剥片石器	2.7	1.7	0.5	1.9	安山岩	
38	24	299	SP305	石器	剥片石器	3.8	5.2	0.7	17.7		刃部は両面より粗い剥離
38	24	300	SP193	石器	石核	3.8	3.6	2.2	21.6	姫島産黒曜石	
39	24	301	SI10	石製品	磨製石斧か	9.3	4.0	1.1	64.0	安山岩	縄文時代の打製石斧の転用品か
39	24	302	SI15	石製品	磨製石斧	(5.7)	5.0	1.9	68.7		蛤刃石斧
39	24	303	SP353	石製品	敲石	(10.4)	(5.2)	3.4	335.0	安山岩	刃部平坦面に敲痕、磨製石斧の転用品か
39	24	304	SP150 (SB3)	石製品	磨製石斧	14.2	5.7	3.9	529.5	花崗閃緑岩	大型蛤刃石斧
39	24	305	遺物包含層	石製品	扁平片刃石斧	12.3	5.7	2.1	260.0	緑泥片岩	
39	24	306	SI7	石製品	磨石	9.5	7.4	5.1	580.0	花崗岩	カマド近くで出土
39	24	307	SI10	石製品	磨石・敲石	(8.7)	(10.4)	6.0	709.0		上下面に敲打痕
39	24	308	SI1	石製品	磨石・敲石	9.6	7.7	3.3	277.2		2面に磨面、一部に敲打痕
39	24	309	遺物包含層	石製品	磨石・敲石	8.8	7.6	5.7	579.2		2面に磨面、一部に敲打痕
39	24	310	遺物包含層	石製品	磨石	14.4	9.3	6.7	1240.0		3面に磨面
39	24	311	SI2	石製品	砥石か	13.5	8.4	2.5	269.8	頁岩	2面を使用

第5表 出土鉄器・鉄製品観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)(残存値)			重量(g)	備 考
						長さ	幅	厚さ		
40	24	312	SP132	鉄器	鉄鏃	5.6	1.7	0.6	7.1	
40	24	313	遺物包含層	鉄製品	鏃先か	(5.3)	(5.1)	(0.3)	22.2	
40	24	314	遺物包含層	鉄製品	鏃	(9.5)	2.8	0.3	28.6	
40	24	315	遺物包含層	鉄製品	角釘か	(3.5)	0.9	1.0	6.6	

IV 尾尻遺跡調査の成果

1 遺構

今回の調査では、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡3棟、柵列跡3条、溝13条、土坑13基、性格不明遺構2基、柱穴約180個を検出した。遺構の密度は南部（24年度調査区）が高く、北部（23年度調査区）は希薄である。

調査区は北西方向から南東方向に向けて緩やかに傾斜している。遺構面は、大部分が黄橙色粘土であり、遺構面が急激に落ち込む調査区南東端では砂礫層となる。この上面を暗褐色、黒褐色、あるいは灰褐色の粘質土（遺物包含層）が覆っている。遺物包含層からは多量の土師器、須恵器、緑釉陶器、土錘などが出土しており、特に北西側ほど出土遺物が増加する。北部中央から南に向けて、急激に地山が沈み込む一帯があり、掘り下げるにつれて水分含有量が増え、粘質性がいっそう強くなる土層が続いた。さらに下層の褐灰色砂質土からは、土坑、溝が検出された。以下に主な遺構を紹介する。

（1）竪穴建物跡

S I 1（第43図 図版26・27）南部に位置する、今回検出された唯一の竪穴建物跡である。建物の規模は東西方向に4.8m、南北方向に5.6mを測り、南東側に確認長約2.5mの排水溝をもつ。残存する壁高は北側の最深部で24cm。南側は傾斜のため北側より壁の残存状況は悪く、最大で10cm。壁がほぼ消失している部分もあった。また、壁下の周溝は確認できなかった。建物中心よりやや南の床上15cmの黒褐色粘質土層から銅印（第48図1）が出土した。また、建物西側からは緑釉陶器碗（第49図9～11）が重なった状態で出土した。建物内に支柱穴をもたず、床面からの壁の立ち上がりも緩やかなため、通常の居住施設とは考えにくい。なお、この建物からはほかに、灰釉陶器、須恵器、土師器、白磁等（第49図2～21）や鉄滓（図版36 175）も出土した。建物の時期は9世紀代と考えられる。

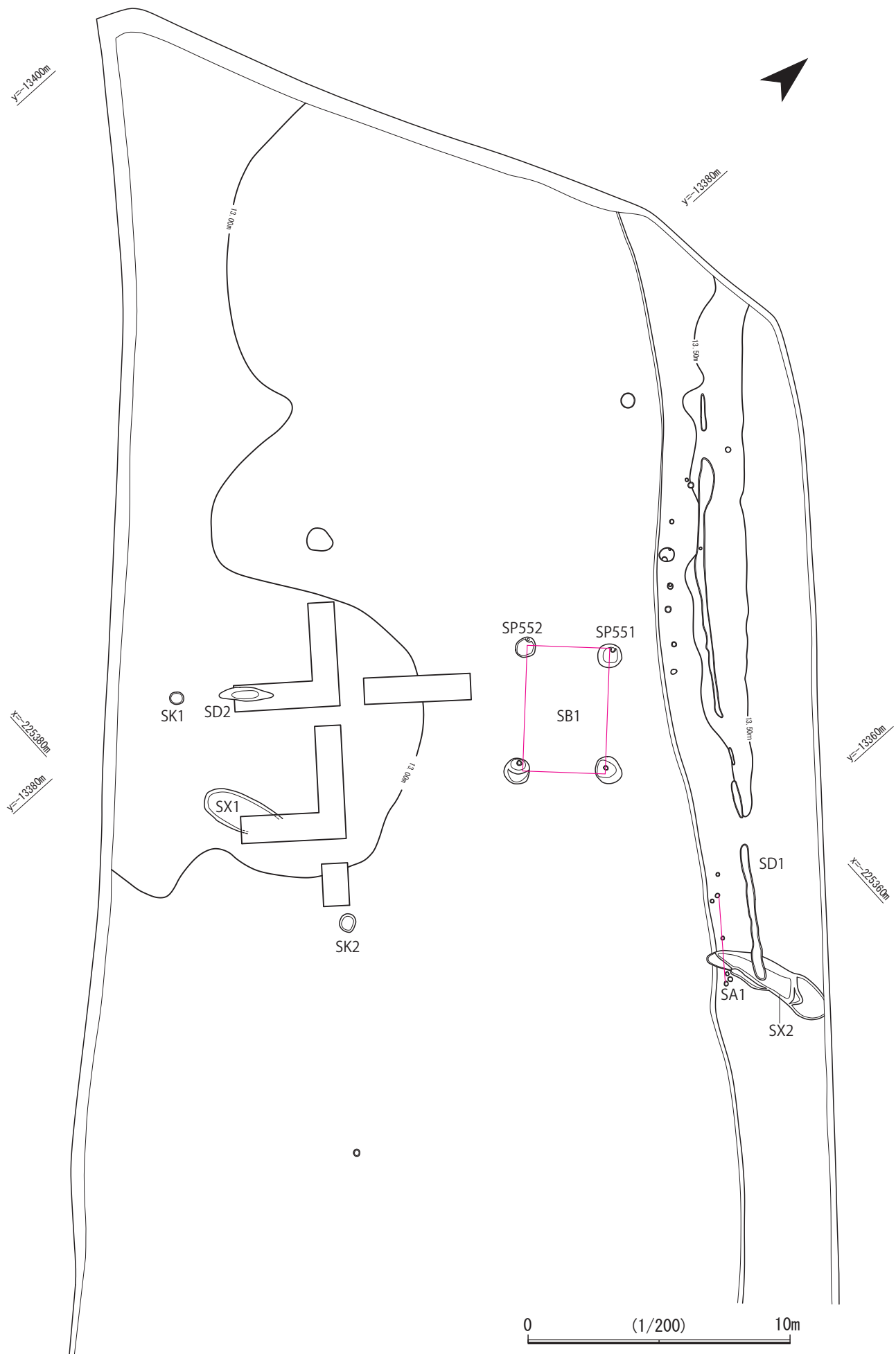
（2）掘立柱建物跡

検出された柱穴は180個で、3棟の掘立柱建物が復元できた。棟方向に明確な規則性は見られない。

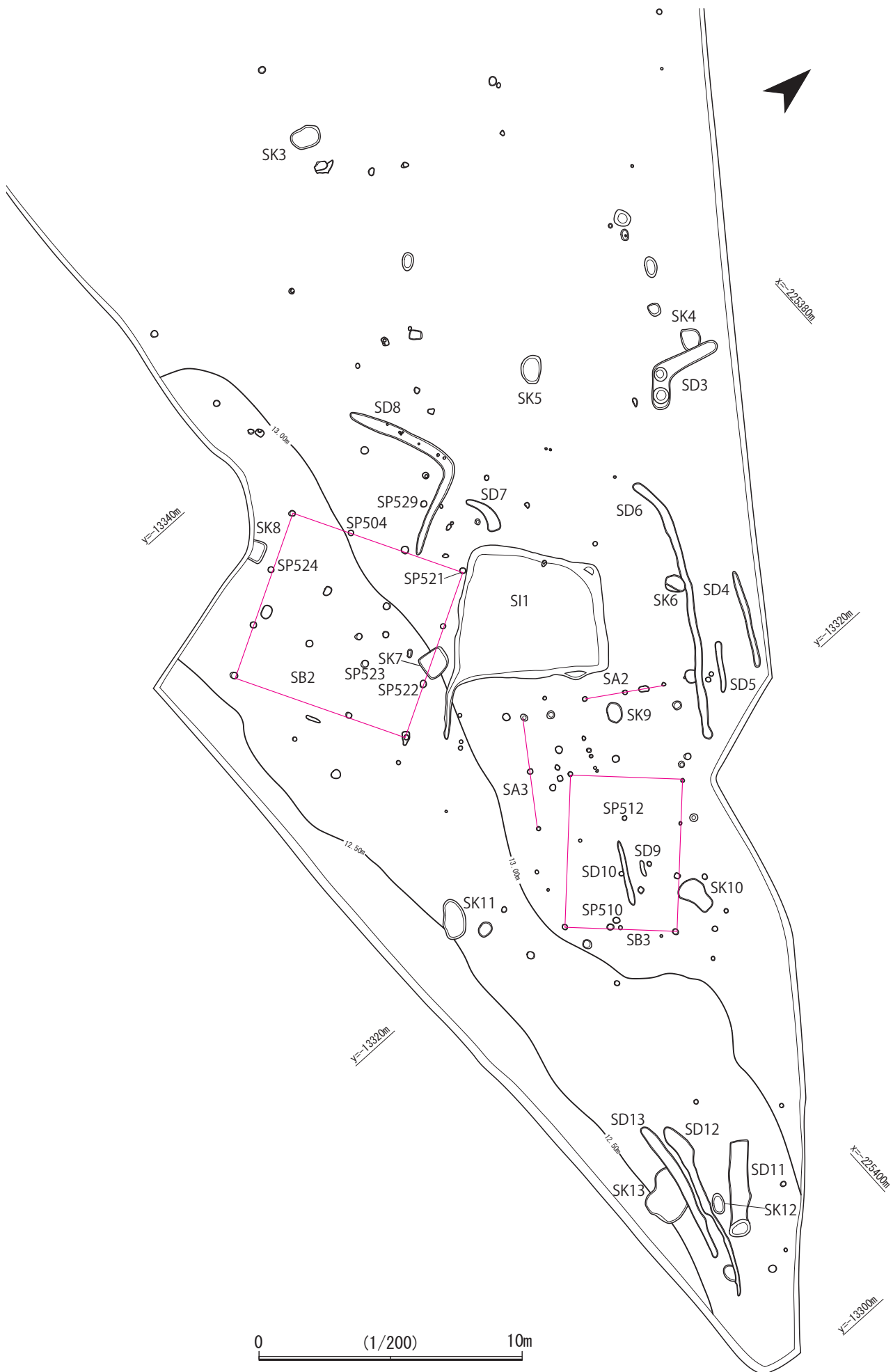
S B 1（第44図 図版28）北部に位置する大型の建物である。桁行1間（4.5m）×梁行1間（3.3m）、床面積14.85㎡を測る。棟方向はN39°Wである。建物を構成する4つの柱の直径が18～20cmであるのに対し、柱穴はいずれも直径75cm以上、深さも80cm以上と大きい。また、柱間寸法も3mを超える。付近には他に目立った掘立柱建物跡もないため、居住用ではなく特別な用途をもった建物跡とも考えられる。建物を構成する柱穴であるS P 552から土師器の杯（第49図22）、S P 551から有溝土錘（第49図23）が出土した。これらの出土遺物から10世紀後半代の建物と考えられる。

S B 3（第44図 図版28）南部に位置する建物で、桁行2間（4.2m）×梁行2間（4.2m）、床面積17.64㎡を測る。棟方向はN47°Wである。北西面に廂（1.6m）をもつ片廂の建物である。建物を構成する柱穴であるS P 512から土師器の皿（第49図31）が出土しており、10世紀後半代の建物と考えられる。

S B 2（第45図 図版29）南部に位置する建物で、S I 1に隣接する形で建てられている。桁行3間（6.8m）×梁行2間（4.5m）、床面積30.60㎡を測る。南面に廂（2.1m）をもつ片廂の建物である。棟方向はN31°Eである。建物を構成する柱穴のうち、S P 504・S P 521～S P 524（第47図 図版

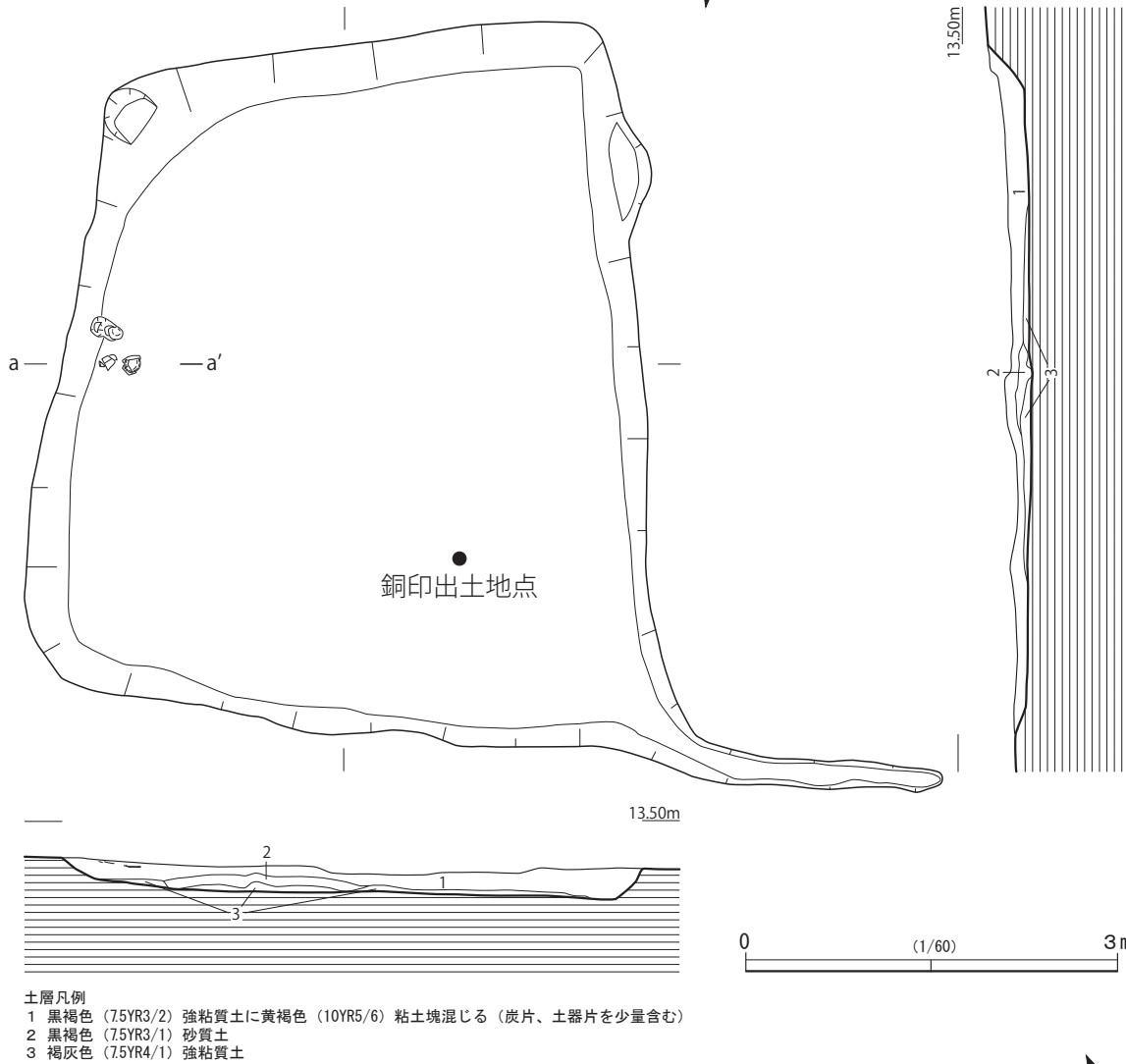


第41図 尾尻遺跡北部遺構配置図



第42図 尾尻遺跡南部遺構配置図

S I 1

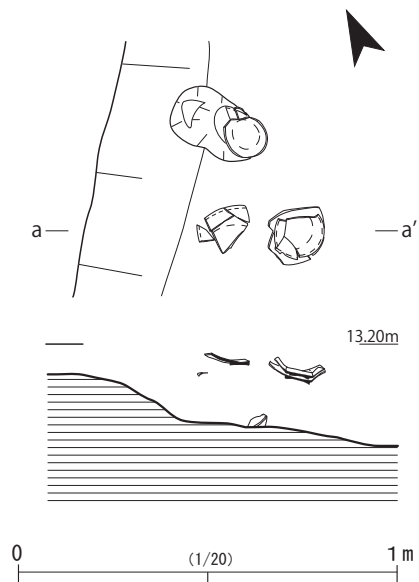


30) からは、土師器皿 (第49図 24 ~ 30) が出土した。これらの柱穴は何らかの祭祀行為の痕跡をとどめたものである可能性が高い。出土した遺物は10世紀後半代に比定でき、この建物の廃絶年代を示していると考えられる。

(3) 土坑

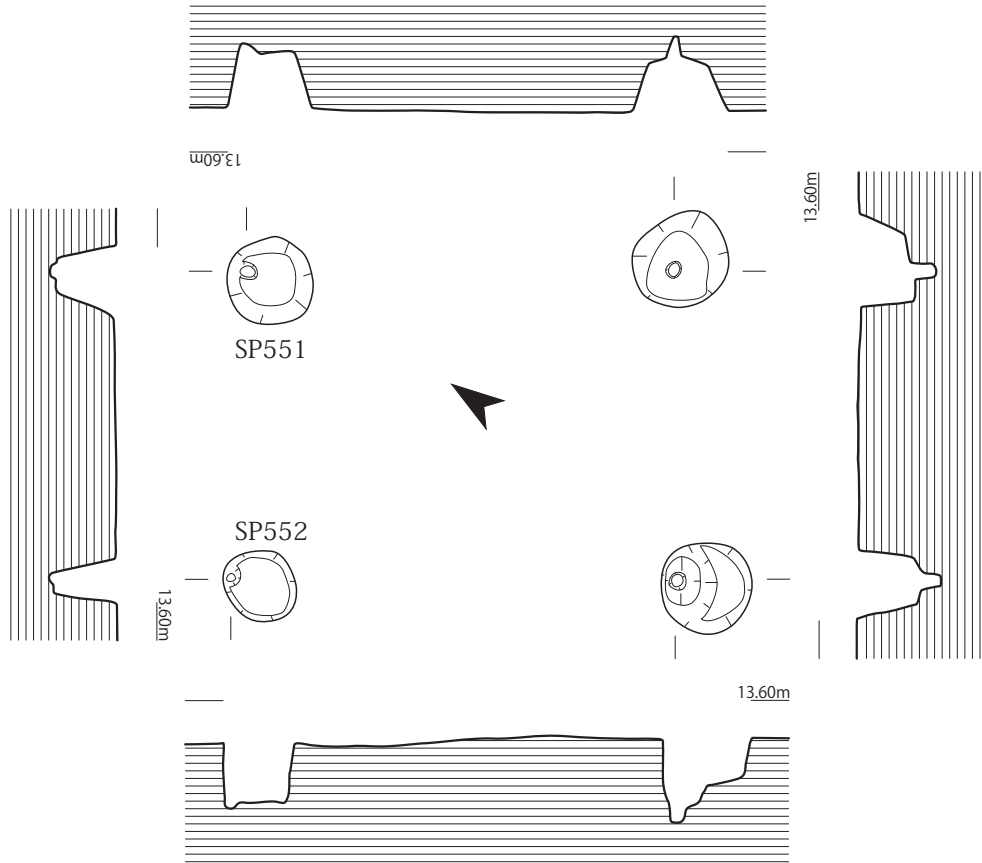
13基の土坑が検出された。北西側は少なく、南東側に多い。計画的に配置されたものや、建物に関連するものは確認できなかった。褐色または黒褐色の粘質土に灰色粘質土が混入したものが多く、埋土に遺物を伴わないものが大半である。深さは20 ~ 30cmのものが多い。

S K 12 (第46図 図版30) 南部に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸80cm、短軸45cm、深さ9cmを測る。長軸断面形は皿状で、深度は浅い。埋土中から土師器の鍋が出土した。

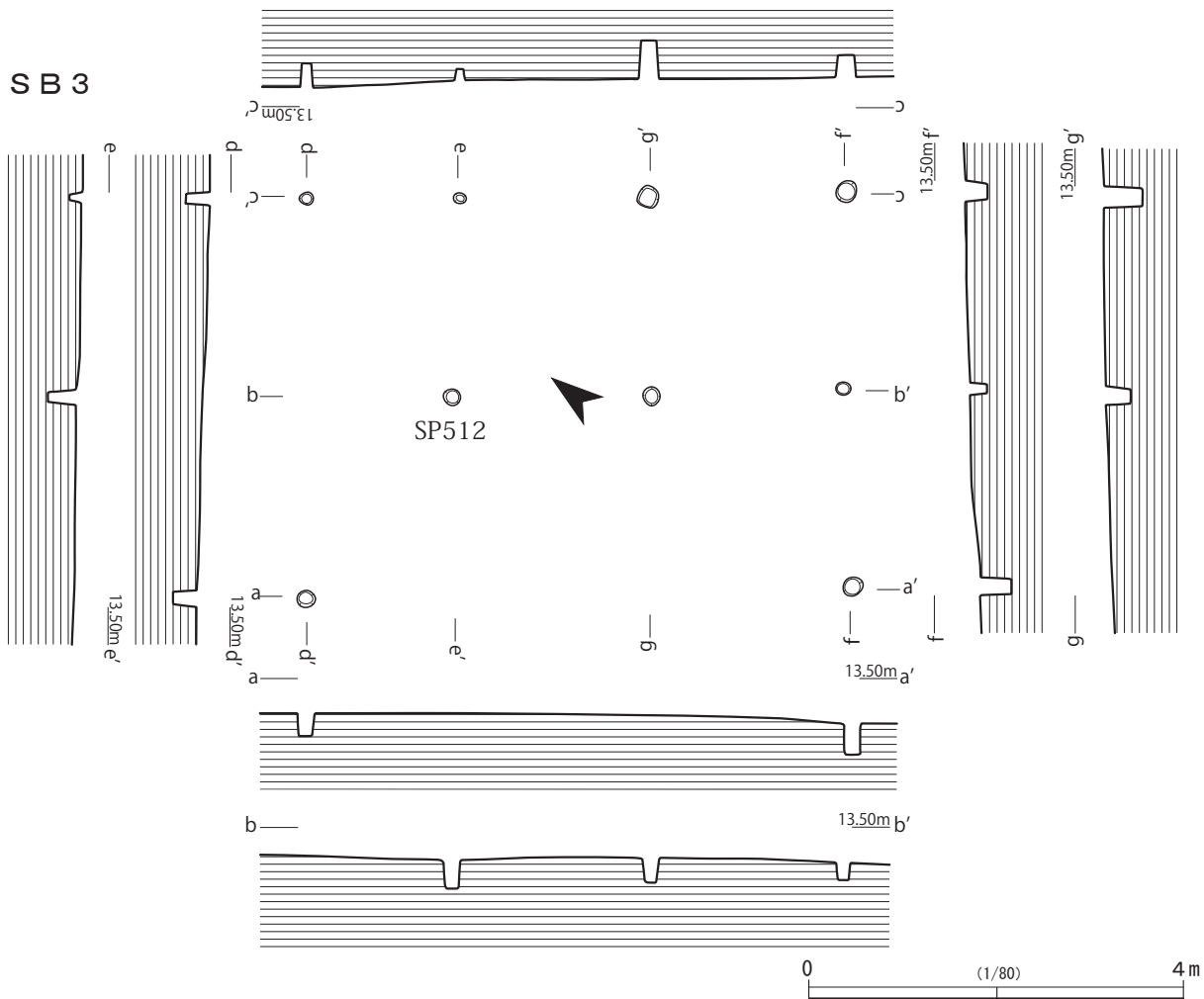


第43図 S I 1 実測図

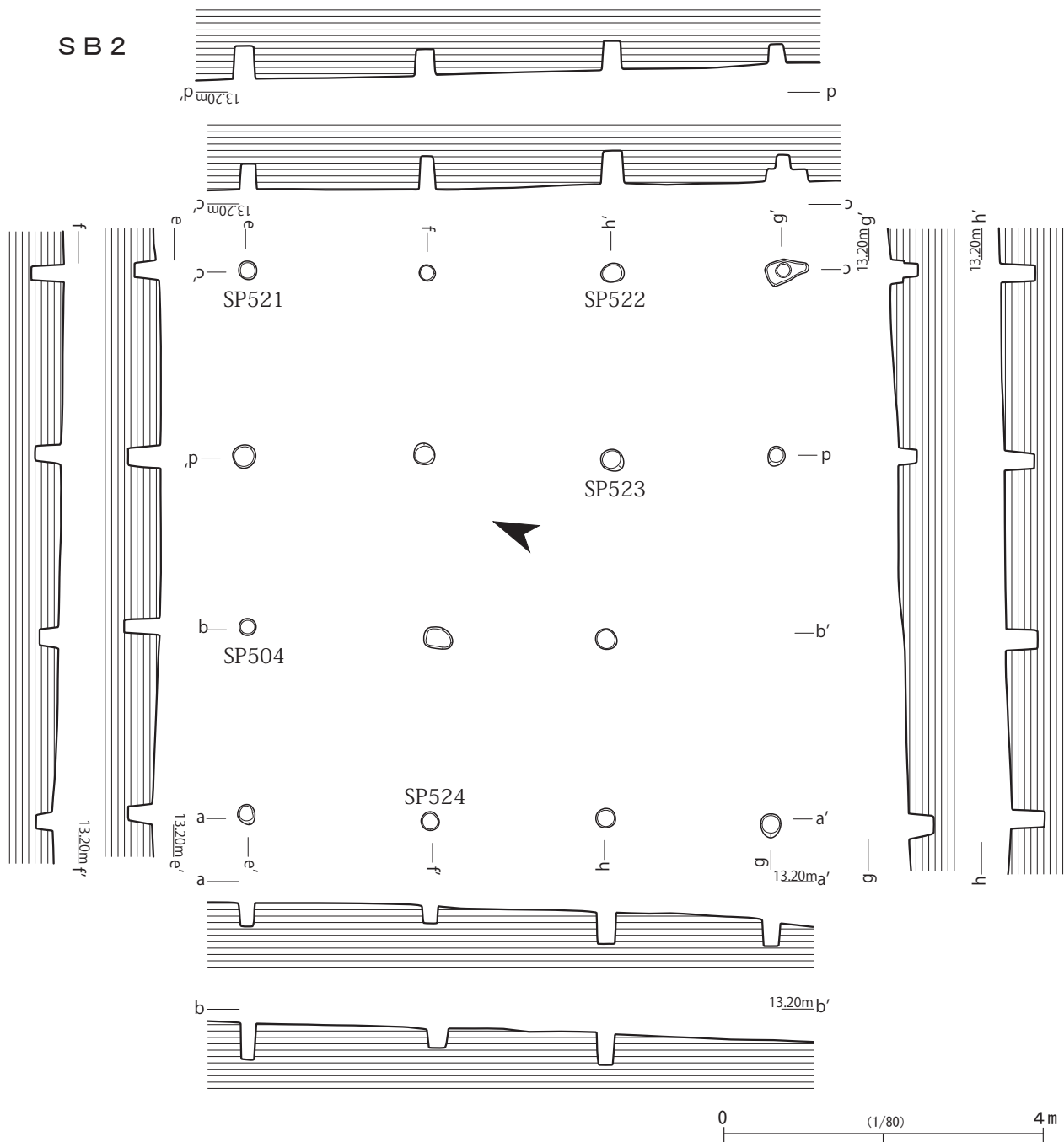
SB 1



SB 3



第44图 SB 1・3实测图



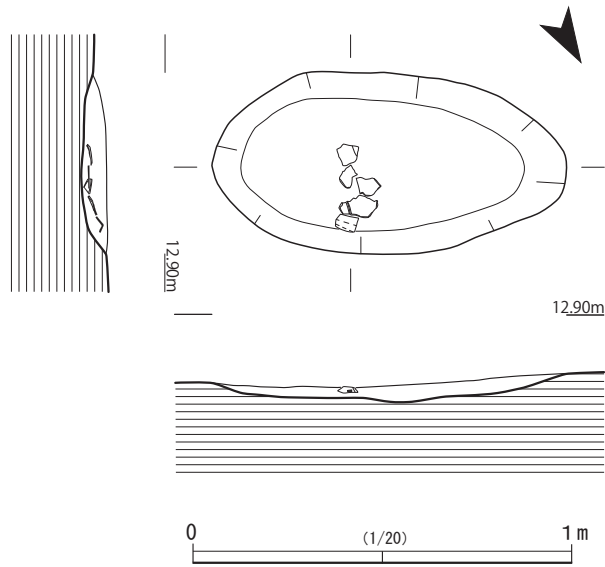
第45図 SB 2 実測図

(4) 溝

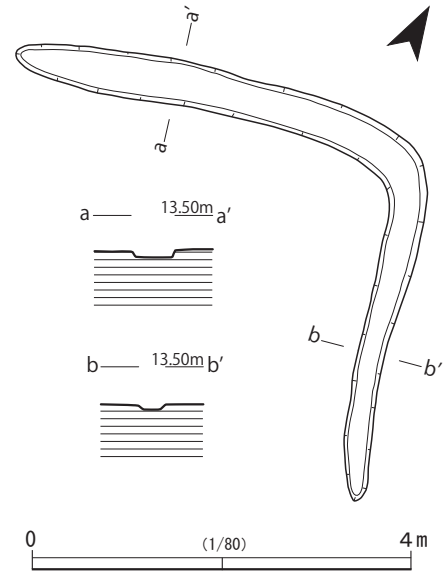
調査区の北東側を中心に溝が13条検出された。いずれも数cm～10cmと浅く、方向に明確な規則性は見られない。また出土遺物も土器の小片であり、詳細な年代を決定する資料とはならなかった。

SD 8 (第46図 図版29) 調査区南部に位置し、溝の中央部付近ではほぼ直角に屈曲し、南北方向に3.5m、東西方向に4.4mのびる。確認長は7.90m、幅28cm～48cm、深さ2～8cmである。建物として復元されてはいないが、同一方向に並ぶ柱穴の列と並行して走行することから、掘立柱建物の周囲を巡る囲郭溝の一部であった可能性がある。埋土中から須恵器片や土師器片が出土したが、小片のため図化していない。

SK12



SD8



第46図 SK12 SD8実測図

(5) 柱穴

検出された柱穴は約180個で、調査区の北西側は少なく、南東側に多い。遺物が出土している柱穴は約30個である。以下、主なものについて取り上げる。

SP521 (第47図 図版30) 南部に位置し、規模は径24～25cm、深さ30cmを測る。SB2を構成する柱穴の一つである。土師器の皿3枚(第49図 26～28)が出土し、うち2枚が埋土下位から重なった状態で出土した。

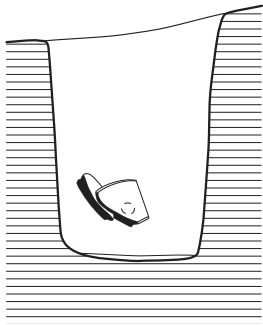
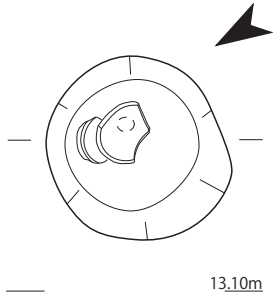
SP524 (第47図 図版30) 南部に位置し、規模は径23～25cm、深さ15cmを測る。SB2を構成する柱穴の一つである。検出面に近い位置で弥生土器の壺(第50図 40)が出土した。

SP523 (第47図 図版30) 南部に位置し、規模は径28～31cm、深さ33cmを測る。SB2を構成する柱穴の一つである。検出面に近い位置で土師器の皿(第49図 30)が出土した。

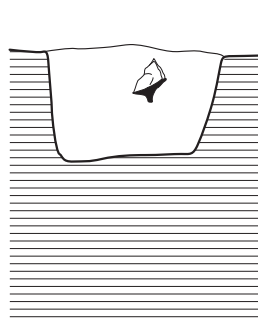
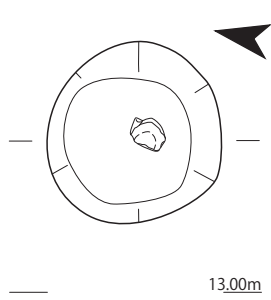
SP522 (第47図 図版30) 南部に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は径24～31cm、深さ41cmを測る。SB2を構成する柱穴の一つである。埋土上位で土師器の皿(第49図 29)が出土した。

SP529 (第47図 図版30) 南部に位置し、規模は径25～28cm、深さ32cmを測る。底面から柱根が粘土塊に覆われた状態で出土した。

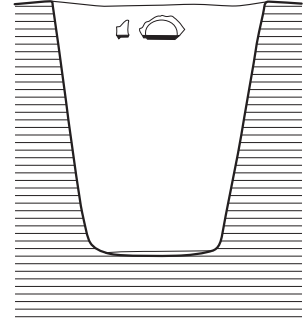
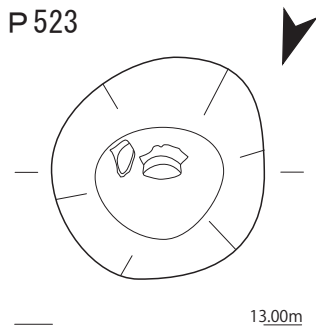
S P 521



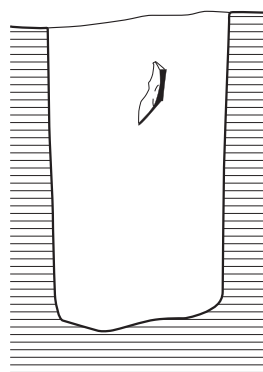
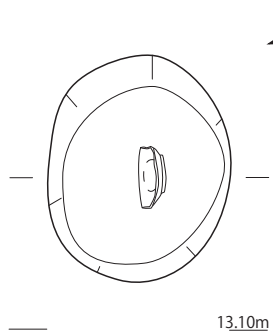
S P 524



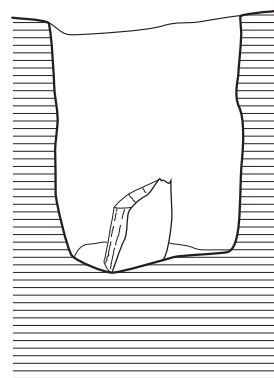
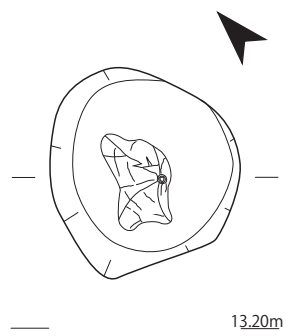
S P 523



S P 522



S P 529



0 (1/10) 50cm

第47图 S P 521 · 524 · 523 · 522 · 529实测图

第6表 掘立柱建物跡一覧表

遺構 番号	規模(間)	棟方向	柱 間		面積 (㎡)	出土遺物	備 考
			桁 行	梁 行			
			建物の南東隅から (m)	建物の南東隅から (m)			
S B 1	1 × 1	N39° W	4.5	3.3	14.85	土師器杯、須恵器、 有溝土錘	10世紀後半代
S B 2	3 × 2	N31° E	6.8 (2.3・2.2・2.3)	4.5 (2.3・2.2)	30.60	土師器皿・杯・椀、 弥生土器甕	南面に廂(2.1m) 10世紀後半代
S B 3	2 × 2	N47° W	4.2 (2.1・2.1)	4.2 (2.1・2.1)	17.64	土師器皿・黒色土器	北西面に廂(1.6m) 10世紀後半代

第7表 土坑一覧表

規模の()は残存長

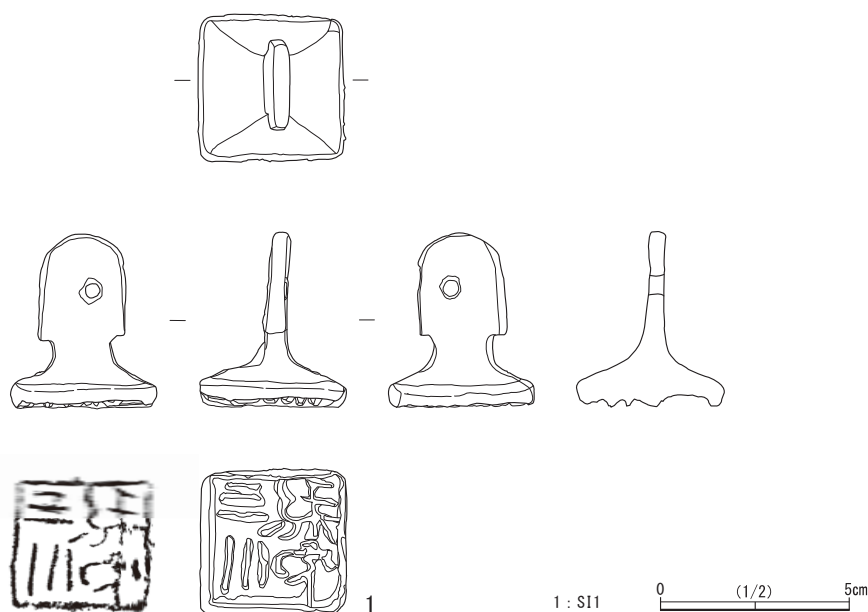
遺構 番号	平面形	規 模(cm)			出土遺物	備 考 (※：調査区外へ続く可能性あり)
		長 軸	短 軸	深 さ		
S K 1	(楕)円形	54	47	21		
S K 2	(楕)円形	68	60	25		
S K 3	楕円形	115	81	25		
S K 4	不整形	87	72	14		
S K 5	楕円形	107	76	33	土師器皿・白磁椀・ 陶器	平安
S K 6	楕円形	80	65	13	土師器杯	古代か
S K 7	方形	105	95	13		
S K 8	方形	86	(80)	2		※
S K 9	楕円形	80	57	19		
S K 10	不整形	141	63	18		
S K 11	楕円形	150	85	32		
S K 12	楕円形	80	45	9	土師器鍋	
S K 13	不整形	205	145	22		

2 遺物

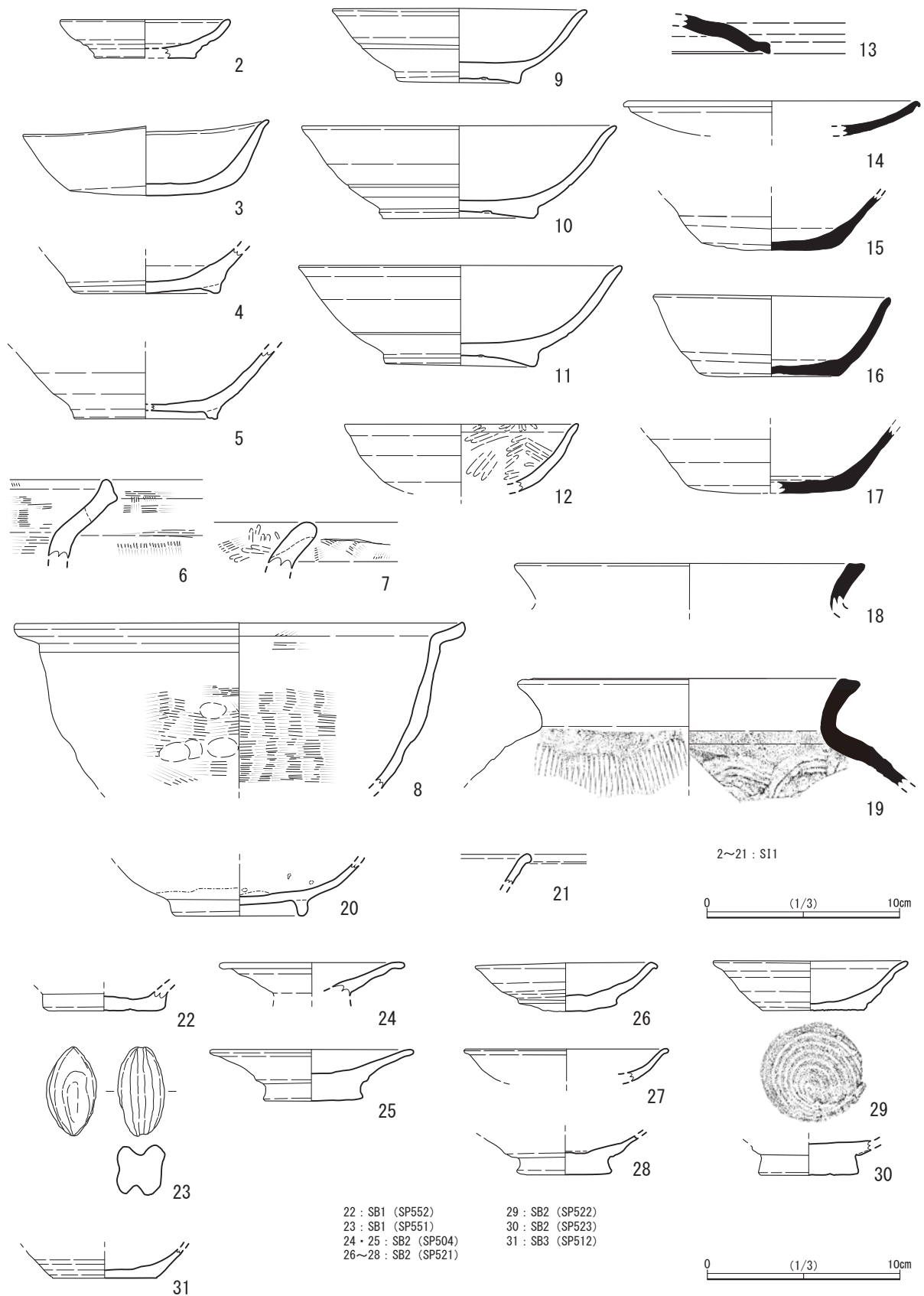
調査の結果、尾尻遺跡からは弥生土器、須恵器、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、青磁、白磁、土製品、石器・石製品、金属製品等が出土した。遺構から出土した遺物は多くなく、大半が遺物包含層から出土したものである。また、平安時代の遺物がほとんどを占めており、中世以降の遺物は少ない。以下遺物についての主な特徴を述べる。なお詳細については遺物観察表を参照されたい。

(1) S I 1 出土遺物 (第48・49図 図版31・32)

1～21はS I 1から出土した遺物である。16のみが床面から出土し、そのほかは埋土から出土したものである。1は「三川私印」の四文字を配する銅印である。文字の周囲は一重の外郭線で囲まれている。鈕の形態は、上部が丸く、孔のある弧鈕有孔である。孔は鑄造後に両方向から穿たれており、鈕中央からやや外れた位置にある。法量は縦3.7cm、横3.8cmで、平安時代に規定されていた私印の大きさ一寸五分(4.5cm)以内である。高さは4.6cm、重量は73.7gである。材質は青銅製である。鑄パリの痕跡は見られない。「三川」は氏名から二文字を抜き出した可能性が高い。2は土師器皿で、体部に回転ナデ痕を明瞭に残し、底部は回転糸切り痕を残す。3は土師器杯で、底部にヘラ切り痕を残す。底部から体部にかけての屈曲部が肥厚し、口縁先端は緩やかに外反する。4・5は断面三角形の低い高台をもつ土師器椀である。6は緩やかに内湾しながら外に開く土師器甕の口縁である。内外面にハケ目調整を施している。7は厚手の甕口縁で内面にハケ目調整とヘラミガキ、外面にハケ目調整を施している。外面に粘土帯接合痕が観察でき、口縁の内側に粘土を貼り付けたことがわかる。8は鍋である。胴部外面に強い指オサエ、口縁の屈曲部に強い指ナデをおこない、内外面にハケ目調整を施している。9～11は緑釉陶器椀である。土師質の素地に軟質の緑釉が薄くかかるが、剥落が著しく、部分的に残っているのみで残存状況は良くない。底部はヘラケズリで中央を浅くくぼませ、ヘラで円状の沈線を巡らせて蛇の目形態にしている。体部外面にも1条の沈線が巡る。見込みにはヘラミガキ

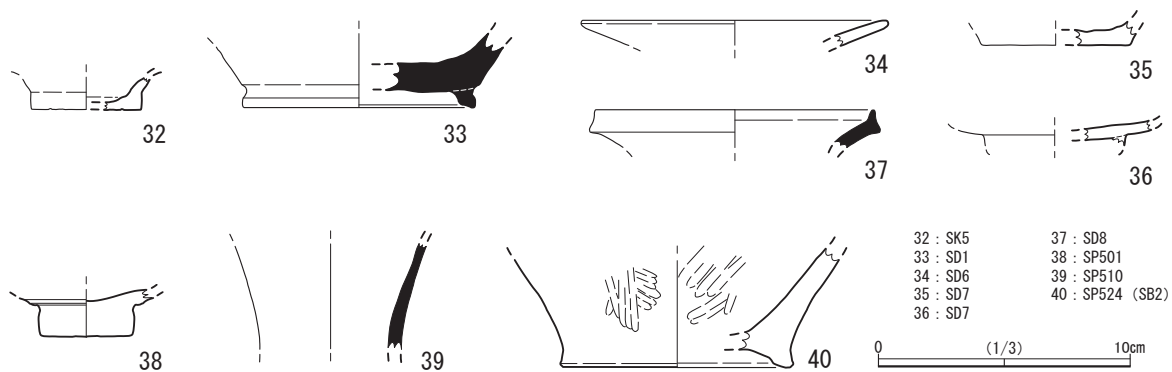


第48図 出土遺物実測図(1)



第49図 出土遺物実測図(2)

を施す。9～11の口径はそれぞれ異なるが、同じ京都産である。12は黒色土器で、内面のみに黒化処理がなされ、内面全面にヘラミガキを施す。13は須恵器杯蓋で器高は低く、口縁から天井部にかけてなだらかに屈曲している。口縁端部は下方へ摘み出している。14は搬入品と思われる須恵器の皿である。口縁外面に沈線が巡り、端部は小さく丸く外反する。胎土は精製されており、色調は灰色を呈



第50図 出土遺物実測図(3)

する。15～17は須恵器杯身で底部にヘラ切り痕を残す。いずれも灰白色を呈している。16は唯一、床面から出土した遺物である。底部から体部にかけてやや膨らんで開き、口縁はわずかに外反する。18・19は須恵器甕で、19の外面には平行文タタキ、内面には同心円文の当て具痕が残る。20は灰釉陶器碗である。高台は高く、わずかに内湾する。内面の施釉は極めて薄く、見込み部にわずかな釉溜まりが見られる。猿投窯と思われる。21は丸く小さな玉縁をもつ邢窯・定窯系の白磁碗である。

(2) S B 出土遺物 (第49図 図版32)

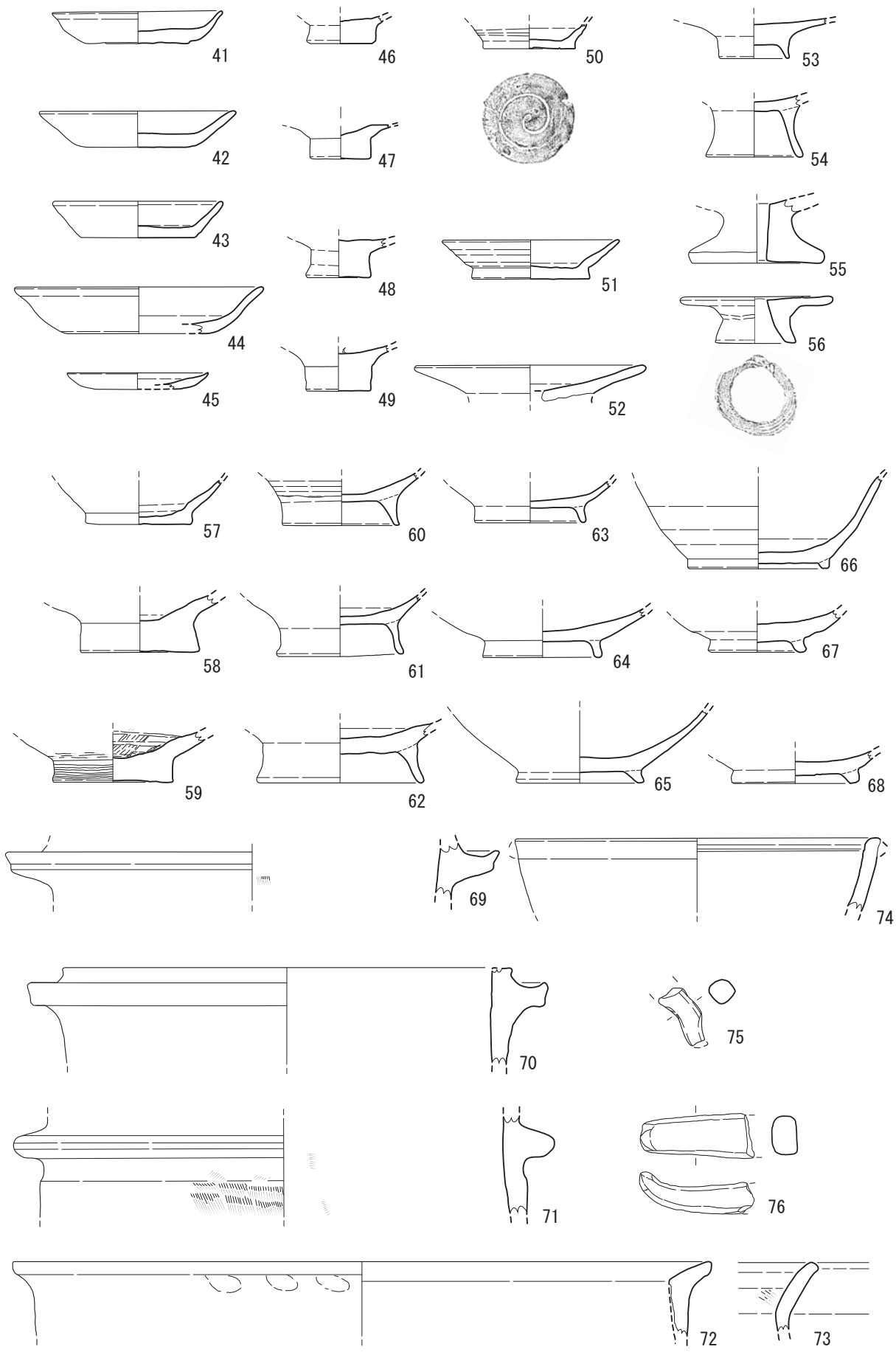
22・23はS B 1から出土した遺物で、22は円板状の高台をもつ土師器杯である。23は有溝土錘である。両面を指オサエとナデで成形し、側面に棒状工具で底幅3mmのU字状の溝を掘っている。重量は25.1gで、長さ4.6cm、幅2.6cm、厚さ2.5cmである。色調は浅黄色を呈し、赤色顔料がわずかに残る。溝には使用による摩滅は見られず、欠損もないことから、未使用の土錘が柱穴に埋納されたと考えられる。24～30はS B 2から出土した土師器皿で、25は回転糸切り痕を残す円板状の高台をもち、体部は直線的に大きく開く。26は底部にヘラ切り痕を残す。体部は緩やかに内湾して口縁端部は小さく外反する。29は底部を回転糸切りし、体部に回転ナデ痕を明瞭に残す。口縁内面に赤色顔料がわずかに残る。31はS B 3から出土した土師器皿で、底部に回転糸切り痕を残す。

(3) S K・S D・S P 出土遺物 (第50図 図版32)

32はS K 5から出土した土師器皿で、薄い平底の底部をもつ。33はS D 1から出土した須恵器杯身で外側に開く高台をもつ。34はS D 6から出土した土師器皿である。35・36はS D 7出土の遺物で、35は土師器皿、36は須恵質で輪高台をもつ緑釉陶器皿である。37はS D 8出土の遺物で、須恵器長頸壺である。口縁端部はわずかに外反し、上端部を上方へ拡張する。38～40はS Pから出土した遺物である。38はS P 501から出土した円板状の高台をもつ土師器皿である。39はS P 510から出土した須恵器長頸壺である。40はS P 524から出土した弥生土器の壺底部で、内外面にヘラミガキを施している。この土器は柱穴に混入した遺物と考えられる。

(4) 遺物包含層出土遺物 土師器・瓦質土器 (第51図 図版32・33)

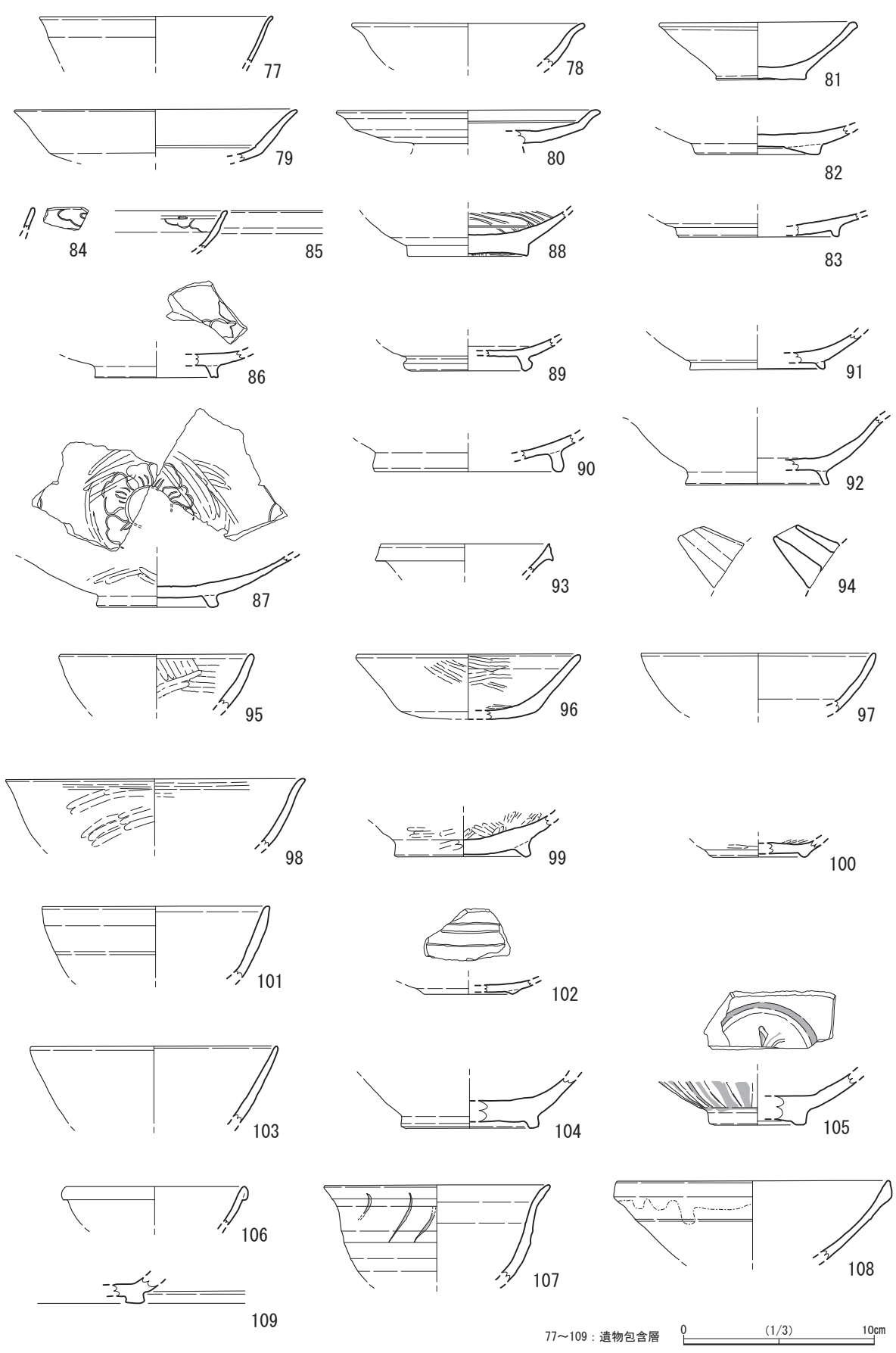
41～62は土師器皿である。41は底部にヘラ切り痕を残す。口縁端部は薄く、わずかに外反する。42は底部に回転糸切り痕を残す。胎土に砂粒を多量に含み他の土師器と異なるため、搬入品と思われる。43は底部に糸切り痕が残る。44は体部が緩やかに外反しながら立ち上がる。45は肥厚する体部から極端に薄くなる口縁をもつ。46～49は、底部直径に比して高台が高い。いずれも底部に回転糸切り痕を残す。49は見込みにヘラミガキを施している。50は底部に渦巻き状のヘラ切り痕を残す。51は



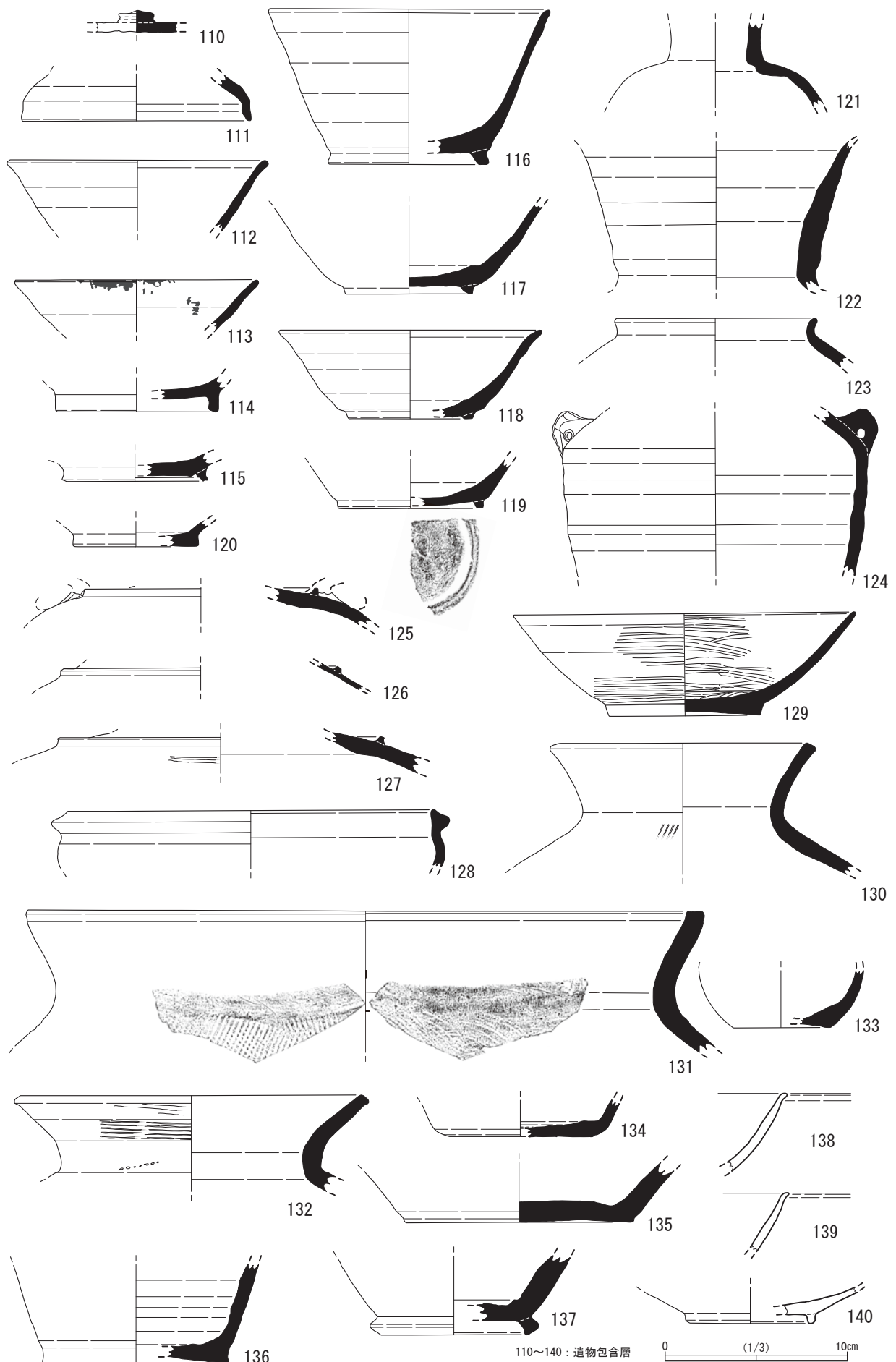
41~76 : 遺物包含層

0 (1/3) 10cm

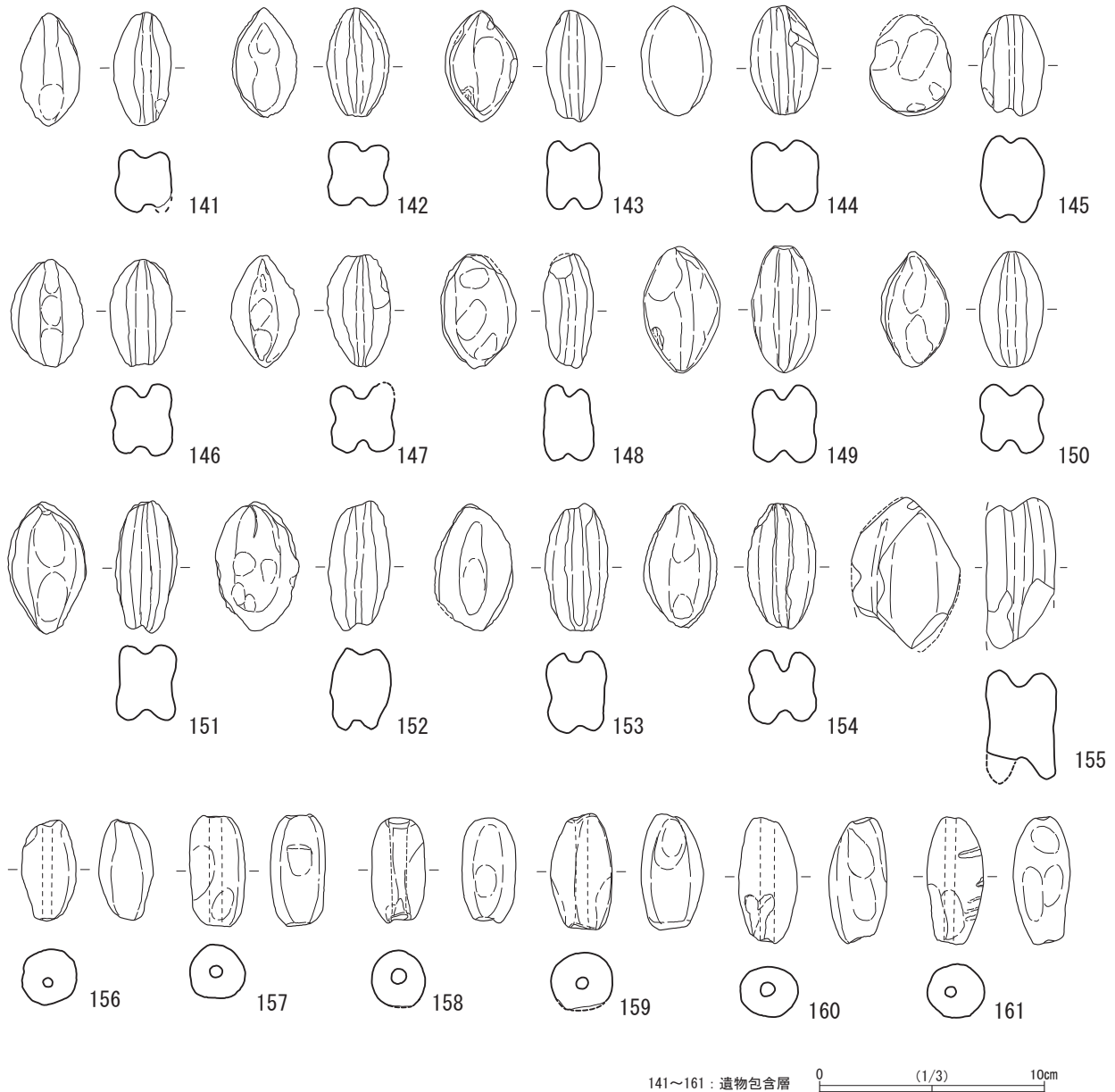
第51図 出土遺物実測図 (4)



第52図 出土遺物実測図(5)

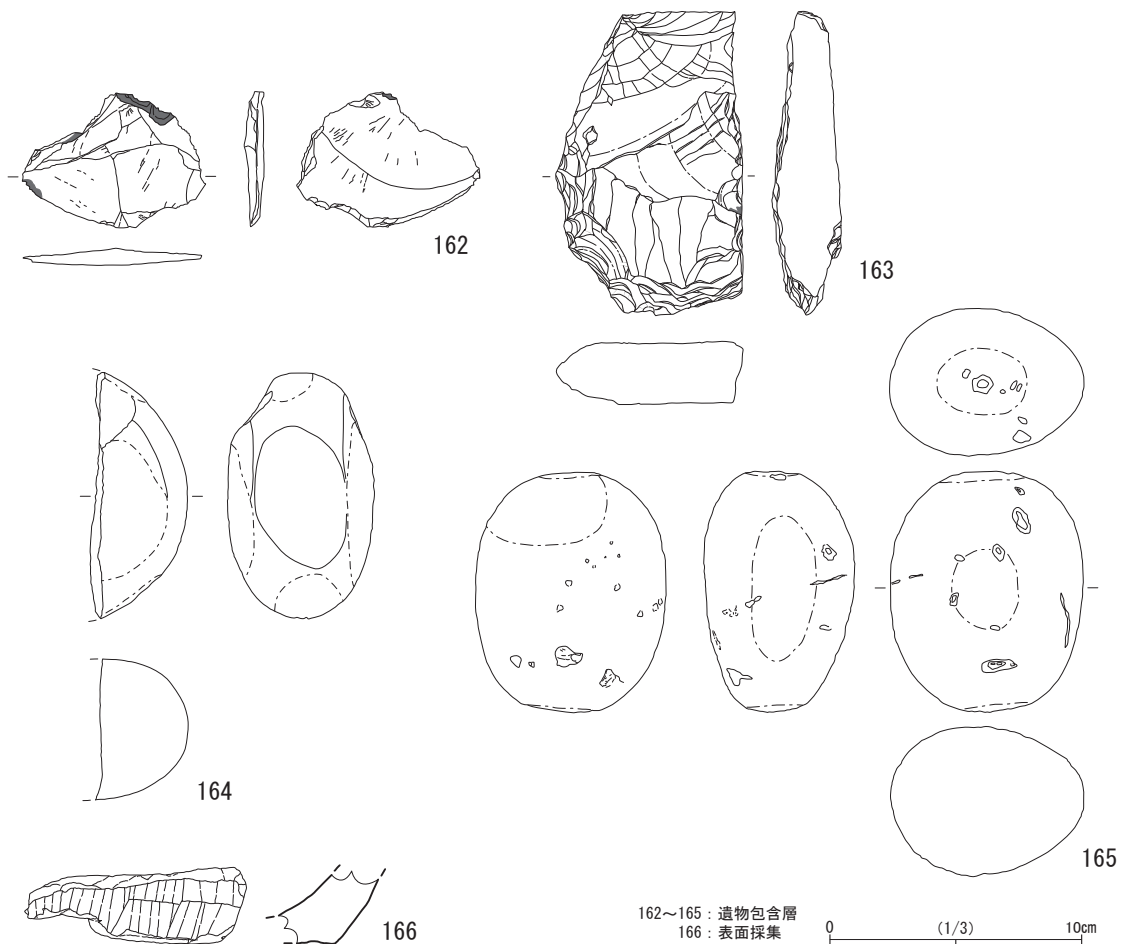


第53図 出土遺物実測図 (6)



第54図 出土遺物実測図（7）

円板状の底部をもち、体部はやや直線的に外側に開く。52は高台との接合部から剝離している。53は円板状底部の上側面に、ほぼ水平に開く体部をもち、全面に赤色顔料が薄く残る。54は高台が2.8cmと極めて高い。55・56は有孔台付皿である。ともに焼成前に穿孔が施されており、56の底部には糸切り痕が明瞭に残る。57は厚さ0.6cmの薄い円板状の高台をもつ。58は高さ1.6cmの円板状の高台をもつ。59は高さ1.6cmの円板状の高台をもち、内外面にハケ目調整を施し、内面にはさらにヘラミガキを施している。60～62はハの字形に開く足高の高台をもつ。63～68は土師器椀である。63・64は断面形がややハの字形に開く高台をもつ。64は内面にヘラミガキを施している。65は断面形がハの字形に開く高台をもつ。66～68は高台の断面が台形を呈する。68は回転糸切りの後、「×」のヘラ記号を施している。69～71は土師器羽釜である。69・70は口縁部のすぐ下に、上向きの鰐をつける摂津産の羽釜である。71は下向きの鰐をもち、内外面にハケ目調整を施している。72・73は土師器甕である。72は口縁外面の下部に強い指オサエを施している。内面は粘土帯接合部で剝離している。73は口縁内側にハケ目調整を施している。74は瓦質土器の捏鉢と思われる。口縁内面に1条の沈線が巡り、口縁外



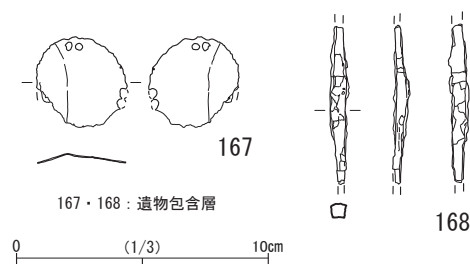
第55図 出土遺物実測図(8)

面は端部が剝離している。75は脚付盤の脚と思われる。5面にわたって面取りを施している。76は古墳時代の椀の把手である。全面に丁寧なナデ調整を施している。

(5) 遺物包含層出土遺物 緑釉陶器・黒色土器・瓦器・磁器(第52図 図版33～35)

77～94は緑釉陶器である。77は椀で、須恵質の素地にガラス質の緑釉が残り、体部の厚さは2mmと極めて薄い。78は皿で、土師質の素地に軟質の緑釉が残るが剝落が著しい。口縁部は緩やかに外反する。79は皿で、須恵質の素地にガラス質の緑釉が残る。体部から底部に至る部分で屈曲し、内面に1条の沈線が巡る。80は皿で、土師質の素地に薄くガラス質の緑釉が残る。体部から口縁部にかけてヘラケズリが施され、内面の屈曲部に1条の沈線が巡る。81は皿で、土師質の素地にガラス質の緑釉がわずかに残る。底部から口縁に向かって直線的に体部が開く。底部に回転糸切り痕を残し、一文字の墨書が見られるが判読は不明。82は椀と思われ、土師質の素地にわずかに緑釉が残る。蛇の目高台である。83は土師質の素地に軟質の緑釉が残るが、剝落が著しい。皿と思われる。84～86は須恵質の素地で、内面に陰刻花文を施し、ガラス質の緑釉が残る。猿投窯系である。87は須恵質の素地にガラス質の緑釉を施す皿で、内外面にヘラミガキを施し、見込みには円文を中心に置いた花文が陰刻され、口縁の下部にも花文が陰刻されている。猿投窯である。88～90は須恵質の素地にガラス質の緑釉が残る。88は椀で内面と底部にヘラミガキを施し、高台は中央部が浅くくぼむ平高台である。高台から体部にかけてヘラケズリを施している。京都産と思われる。89は椀で高台がハの字に開くが、高台貼付け部分をヘラでなでている。90は椀で高く厚い高台をもつ。91・92は素地が土師質の椀で、軟

質の緑釉が残るが剥落が著しい。防長産と思われる。93は長頸壺の口縁部で、素地は須恵質で緑釉はガラス質である。94は水注の注ぎ口で、土師質の素地に軟質の緑釉が残る。8面の面取りを施すが、幅は不揃いである。95～100は黒色土器で、100は内外面ともに黒化処理をおこない、小さく扁平な高台をもつ。97は不完全な黒化処理のせいか、灰色と灰白色の縞状を呈している。ほかは



第56図 出土遺物実測図(9)

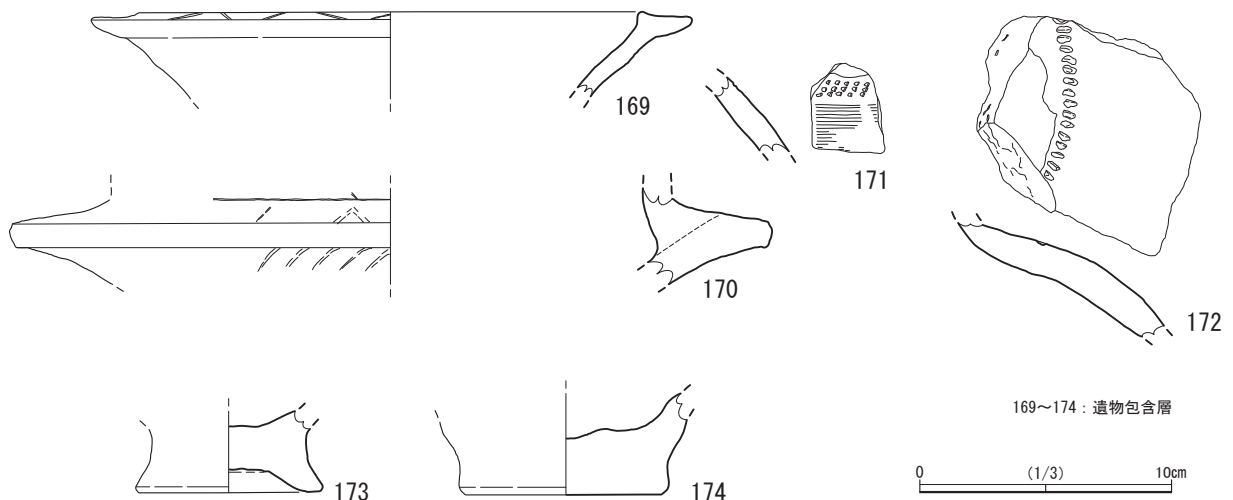
内面のみ黒化処理をおこなっている。96は平底の椀で、99は断面台形の高台をもち、100は断面三角形の低い高台をもつ。いずれもヘラミガキを施している。101・102は瓦器椀で、102は見込みに間隔の広い暗文が施されている。いずれも和泉型の瓦器と思われる。103・104は越州窯産の青磁椀である。105は龍泉窯系の青磁椀である。体部に鎬蓮弁を施し、見込みに手描きの文様を施している。106～109は白磁椀である。106は稜線の明瞭な玉縁をもつ小椀である。107は口縁下部から体部方向にノの字形のケズリを施している。108は玉縁の椀である。

(6) 遺物包含層出土遺物 須恵器・灰釉陶器 (第53図 図版34～36)

110・111は須恵器杯蓋である。110はやや扁平の宝珠鈕をもつ。111は口縁端部内面に傾斜面をもつ。112～120は杯身である。113は口縁部に黒色の付着物が見られる。114～119は輪高台である。114は断面長方形を呈している。115は高台内面の接合部をヘラでなでている。116はハの字形に広がる角高台をもつ。117は断面三角形を呈する高台をもつ。118・119は小さな角高台をもつ。119の高台内側には形状不明なヘラ描きがなされている。120は平高台の杯身である。121は長頸壺で、123は短頸壺である。124は双耳壺である。125～127は肩部に突帯を巡らせる壺である。125には環状の耳がついている。猿投窯産と思われる。128は鉢である。口縁部は垂直に立ち上がって外反し、折り曲げて玉縁を形成している。京都篠窯産である。129は緑釉陶器の素地で、中央が浅くくぼんだ平高台をもち、内外面にヘラミガキを施す京都産の椀である。130は壺の口縁である。131・132は甕の口縁である。130・131の外面には平行文タタキが施され、131の内面には同心円文の当て具痕が見られる。132の口縁外面にはハケ目調整が施されている。133～137は壺あるいは鉢の底部と思われる。133は小型壺の底部で糸切り痕を残す。134は底部をヘラ切りの後、ヘラで横方向になでている。135は底部をヘラ切りの後、ナデ調整を施している。136は底部中央が浅くくぼむ平高台である。糸切りした後、ヘラでなでている。137は下端部が内傾する高台をもつ壺底部である。138～140は灰釉陶器椀で、口縁先端が小さく外反する。140は幅がやや狭く低い高台をもつ。

(7) 遺物包含層出土遺物 土製品 (第54図 図版36)

141～155は有溝土錘である。平面形は両端が尖った卵形を呈し、指オサエとナデで成形している。側面は、棒状工具で溝をU字形に掘っている。溝の底幅は0.3～0.6cmのものがある。色調は、多くは橙色を呈するが、赤色顔料を塗布しているものが多い。軽いものが141で、重量は27.5gである。長さ5.1cm、幅2.5cm、厚さ2.9cmである。重いものが155で、約30%欠損しているが、重量は77.7gである。残存長6.8cm、幅4.8cm、厚さ3.1cmである。156～161は管状土錘である。孔径は0.4～0.7cmのものがある。軽いものが156で、重量は17.0gである。長さ4.5cm、直径2.4cm、孔径0.4cmである。重いものが159で、



第57図 出土遺物実測図 (10)

重量が24.2 gである。長さ5.2cm、直径2.5cm、孔径0.5cmである。有溝土錘に比べ軽量である。いずれも瓦質で胎土が粗く、色調は灰色を呈する。

(8) 遺物包含層等出土遺物 石器・石製品 (第55図 図版36)

162は安山岩の剥片で調整加工は見られない。重量は27.3 gである。163は打製石斧である。縦中央部分から下半分に調整加工が施され、刃部は両面に調整加工している。厚さは中央から刃部に向かって徐々に薄くなっている。重量は320 gで安山岩製である。164は磨石で、半分欠損しているが4面を磨り面としている。重量は218.5 gである。165は磨石と敲石の兼用である。4面を磨り面とし、1面のみ敲きにも利用している。下方の磨り面は擦られて平らになっており、擦痕も見られる。石材は花崗岩である。166は滑石製石鍋の底部破片である。外面に煤が付着している。幅が異なる2種類のノミ単位が見られる。両端は人為的に切断されており、転用された可能性がある。表面採集遺物である。

(9) 遺物包含層出土遺物 金属製品 (第56図 図版36)

167は銅製の飾り金具である。推定直径は3.6cm、厚さは0.5mm、重量は2.5 gである。円形の4方向に直径2 mmの穴が2穴ずつ穿たれていたと思われる。使用方法は不明である。168は中央が太く、両端に向かって徐々に細くなる鉄製品である。断面はほぼ正方形で、長さは6.3cm、厚さ0.7cm、幅0.8cm、重量は3.8 gである。鉄釘と思われる。175 (図版36) は椀形滓である。両先端が尖った卵形を呈し、長さ10cm、幅8.5cm、厚さ3.4cm、重量は265 gである。上表面に凹凸があり、3~8 mm大の石を含み、1~2.5mmの気泡がやや多く見られる。鉄滓が出土したことによって、S I Iあるいはその周辺に鍛冶炉があったとも考えられるが、鞆の羽口や埴塙は出土していない。

(10) 遺物包含層出土遺物 弥生土器 (第57図 図版36)

169から174は弥生土器である。169は外傾する口頸部に上面がほぼ水平となる口縁をもち、口縁上面に山形文を巡らす壺である。170は複合口縁の壺である。鏝の外面に鋸歯文と思われる文様を施している。裏面には指頭押圧痕が並列している。171は壺肩部である。上部に縦方向の列点文を施し、その下部1.4cm幅に8条の沈線を施している。172も壺肩部に長さ6 mm、幅3 mmの列点文を施している。173は甕底部で中央がやや深くくぼみ、上げ底を呈する。174は平底の甕底部である。

第8表 出土土器・土製品観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) (外)	主な調整(内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
49	31	2	SI1	土師器	皿	(8.8)	2.0	(5.3)	密	良	にぶい オレンジ にぶい オレンジ	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
49	31	3	SI1	土師器	杯	12.8	3.6	8.8	密	良	灰白色 にぶい オレンジ	回転ナデ、ナデ後指オサエ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り
49	31	4	SI1	土師器	椀		(2.0)	(7.5)	密	良	にぶい オレンジ にぶい 褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
49	31	5	SI1	土師器	椀		(3.5)	(7.4)	密	良	浅黄 オレンジ 浅黄 オレンジ	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り
49	31	6	SI1	土師器	甕		(4.0)		やや粗	良	浅黄 オレンジ 浅黄 オレンジ	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
49	31	7	SI1	土師器	甕		(2.4)		密	良	灰黄 褐色 にぶい 褐色	ハケ目後ナデ、ヘラミガキ ハケ目後ナデ	外面に粘土帯接合痕
49	31	8	SI1	土師器	鍋	(23.1)	(8.6)		やや密	やや良	にぶい オレンジ にぶい 褐色	ハケ目、ナデ ナデ後ハケ目、指オサエ	口縁部に多量の煤付着
49	31	9	SI1	緑釉陶器	椀	13.2	3.9	6.4	密	やや良	素地：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラケズリ	底部回転糸切り、土師質、軟質釉、蛇の目高台、京都産
49	31	10	SI1	緑釉陶器	椀	(16.3)	4.8	(7.8)	密	良	素地：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラケズリ	底部回転糸切り、土師質、軟質釉、蛇の目高台、京都産
49	31	11	SI1	緑釉陶器	椀	(16.8)	5.3	7.9	密	やや良	素地：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラケズリ	底部回転糸切り、土師質、軟質釉、蛇の目高台、京都産
49	31	12	SI1	黒色土器	椀	(14.0)	(4.3)		やや密	良	黒色 黒色 オレンジ	回転ナデ後ヘラミガキ 摩滅により調整不明	内面黒色
49	31	13	SI1	須恵器	杯蓋		(2.0)		密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
49	31	14	SI1	須恵器	皿	(15.0)	(1.8)		密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	搬入須恵器か
49	31	15	SI1	須恵器	杯身		(2.8)	6.8	やや密	やや良	灰白色 浅黄 褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り 底部外面板状の圧痕か
49	31	16	SI1	須恵器	杯身	12.1	4.2	7.2	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ	底部回転ヘラ切り
49	31	17	SI1	須恵器	杯身		(3.4)	8.7	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り
49	31	18	SI1	須恵器	甕	(17.9)	(2.4)		密	良	緑灰色 緑灰色	回転ナデ 回転ナデ	
49	31	19	SI1	須恵器	甕	(16.0)	(5.5)		密	良	灰色 灰白色	ナデ ナデ、平行文タタキ	同心円文当て具痕
49	32	20	SI1	灰釉陶器	椀		(2.7)	6.6	密	良	素地：灰白色 釉：灰オリープ色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	貼付三日月高台 猿投窯か
49	31	21	SI1	白磁	椀		(1.5)		密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	形窯・定窯系
49	32	22	SB1 (SP552)	土師器	杯		(1.0)	(6.2)	密	やや良	にぶい 黄 オレンジ にぶい オレンジ	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	円板状高台
49	32	23	SB1 (SP551)	土製品	有溝土錘	長さ：4.6	幅：2.6	厚さ：2.5	やや粗	良	浅黄 色 浅黄 色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量25.1g、赤色顔料塗布
49	32	24	SB2 (SP504)	土師器	皿	(8.4)	(1.7)		密	良	橙色 橙色	ナデ ナデ	
49	32	25	SB2 (SP504)	土師器	皿	(10.5)	2.6	5.1	密	不良	褐色 明褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 円板状高台
49	32	26	SB2 (SP521)	土師器	皿	9.0	2.5	4.0	密	良	明赤 褐色 褐色	ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り
49	32	27	SB2 (SP521)	土師器	皿	(10.3)	(1.7)		密	良	にぶい オレンジ 褐色	回転ナデ 回転ナデ	
49	32	28	SB2 (SP521)	土師器	皿		(2.0)	4.8	密	やや良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り 円板状高台
49	32	29	SB2 (SP522)	土師器	皿	(9.9)	2.5	5.3	密	やや良	にぶい 黄 褐色 明赤 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 赤色顔料塗布
49	32	30	SB2 (SP523)	土師器	皿		(1.8)	5.2	密	良	褐色 褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 円板状高台
49	32	31	SB3 (SP512)	土師器	皿		(1.5)	(5.3)	密	良	褐色 黄 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
50	32	32	SK5	土師器	皿		(1.2)	(4.4)	密	不良	にぶい オレンジ 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
50	32	33	SD1	須恵器	杯身		(2.4)	(9.2)	やや粗	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り
50	32	34	SD6	土師器	皿	(10.4)	(1.0)		密	良	褐色 褐色	ナデか ナデ	
50	32	35	SD7	土師器	皿		(0.9)	(5.9)	密	良	褐色 褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
50	32	36	SD7	緑釉陶器	皿		(1.0)		密	良	素地：灰オリープ色 釉：オリープ黄色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
50	32	37	SD8	須恵器	長頸壺	(11.0)	(1.5)		密	良	灰白色 黄 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
50	32	38	SP501	土師器	皿		(184)	(3.6)	密	良	にぶい 黄 褐色 にぶい 黄 褐色	指オサエ ナデ	円板状高台
50	32	39	SP510	須恵器	長頸壺		(4.2)		密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
50	32	40	SP524 (SB2)	弥生土器	壺		(4.7)	(9.2)	やや密	良	にぶい 褐色 にぶい 褐色	ヘラミガキ ヘラミガキ	下位に煤付着
51	32	41	遺物包含層	土師器	皿		(1.8)	5.6	やや密	やや良	にぶい オレンジ 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り
51	32	42	遺物包含層	土師器	皿	(10.4)	1.9	(5.4)	粗	不良	にぶい 黄 褐色 にぶい 黄 褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 搬入品か

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	主な調整 (内/外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
51	32	43	遺物包含層	土師器	Ⅲ	8.8	2.0	6.2	密	良	にぶい黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
51	32	44	遺物包含層	土師器	Ⅲ	(13.4)	2.5	(7.6)	密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ 摩滅により調整不明	
51	32	45	遺物包含層	土師器	Ⅲ	(7.6)	(0.9)	(4.2)	密	やや良	浅黄橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
51	32	46	遺物包含層	土師器	Ⅲ	1.0	(1.4)	3.4	やや密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	摩滅により調整不明 ヘラケズリ、ナデ	底部回転糸切り
51	32	47	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(1.8)	3.1	密	良	橙色 褐色	ナデか 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り
51	32	48	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(2.1)	3.5	密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい赤褐色	回転ナデか 回転ナデか	底部回転糸切り
51	32	49	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(2.4)	3.4	密	良	にぶい橙色 にぶい褐色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り
51	33	50	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(1.3)	4.9	密	良	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラミガキ	底部回転ヘラ切り
51	33	51	遺物包含層	土師器	Ⅲ	(9.4)	2.0	(6.3)	密	良	褐色 褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
51	33	52	遺物包含層	土師器	Ⅲ	(12.0)	(1.5)		密	良	褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ	
51	33	53	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(2.1)	3.8	密	良	褐色 褐色	摩滅により調整不明 回転ナデ	赤色顔料塗布
51	33	54	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(3.3)	5.1	密	良	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	
51	33	55	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(3.4)	7.0	密	良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り
51	33	56	遺物包含層	土師器	Ⅲ	7.9	3.5	4.2	密	良	褐色 褐色	ヘラケズリ 回転ナデ	底部回転糸切り
51	33	57	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(2.3)	5.7	密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	円板状高台
51	33	58	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(3.0)	6.4	密	良	にぶい褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	円板状高台
51	33	59	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(2.7)	6.4	密	やや良	褐灰色 褐色	ハケ目後ヘラミガキ ハケ目後ナデ	円板状高台 底部回転糸切り
51	33	60	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(2.5)	6.2	密	良	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
51	33	61	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(3.2)	6.7	密	良	褐色 にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り
51	33	62	遺物包含層	土師器	Ⅲ		(3.3)	(8.6)	密	良	褐色 褐色	摩滅により調整不明 回転ナデ、ナデ	
51	33	63	遺物包含層	土師器	椀		(2.2)	5.9	密	良	褐色 褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
51	33	64	遺物包含層	土師器	椀		(2.6)	6.4	やや粗	良	褐色 浅黄褐色	回転ナデ後ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラナデ	
51	33	65	遺物包含層	土師器	椀		(3.7)	(6.8)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	
51	33	66	遺物包含層	土師器	椀		(4.9)	7.6	やや粗	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	
51	33	67	遺物包含層	土師器	椀		(2.2)	(5.0)	密	良	褐色 褐色	ナデ 回転ナデ、ナデ	
51	33	68	遺物包含層	土師器	椀		(1.7)	6.8	密	不良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 高台に「X」ヘラ記号
51	33	69	遺物包含層	土師器	羽釜	(20.2)	(3.1)		密	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	ハケ目後ナデ ナデ	摂津産
51	33	70	遺物包含層	土師器	羽釜	(22.0)	(5.1)		やや粗	良	にぶい黄褐色 灰黄褐色	摩滅により調整不明 摩滅により調整不明	摂津産
51	33	71	遺物包含層	土師器	羽釜		(5.3)		やや密	やや良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目 回転ナデ、ハケ目	一部煤付着
51	33	72	遺物包含層	土師器	甕	(37.4)	(3.9)		やや粗	やや良	灰色 灰白色	ナデ 指オサエ後ナデ	
51	33	73	遺物包含層	土師器	甕		(3.7)		密	やや良	にぶい褐色 黒褐色	ハケ目、ヘラナデ ナデ	外面に多量の煤付着
51	33	74	遺物包含層	瓦質土器	捏鉢か	(18.8)	(3.9)		やや密	やや良	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
51	33	75	遺物包含層	土師器	脚付盤か		(3.2)		密	やや良	褐色 褐色	指ナデ 指ナデ	
51	33	76	遺物包含層	土師器	椀	長さ：6.4	幅：1.5	厚さ：2.3	密	良	にぶい褐色 にぶい褐色	ナデ ナデ	把手 下部に多量の煤付着
52	33	77	遺物包含層	緑釉陶器	椀	(12.2)	(2.4)		密	良	素地：灰色 釉：オリーブ黄色	回転ナデ 回転ナデ	素地は須恵質、釉はガラス質
52	33	78	遺物包含層	緑釉陶器	Ⅲ	(12.2)	(2.2)		密	やや良	素地：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	素地は土師質、軟質釉
52	33	79	遺物包含層	緑釉陶器	Ⅲ	(14.6)	(2.8)		密	良	素地：灰色 釉：オリーブ黄色	回転ナデ 回転ナデ	素地は須恵質、釉はガラス質
52	33	80	遺物包含層	緑釉陶器	Ⅲ	(13.2)	(1.7)		やや粗	良	素地：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ヘラケズリ、回転ナデ	素地は土師質、釉はガラス質
52	33	81	遺物包含層	緑釉陶器	Ⅲ	(9.8)	3.0	(4.6)	密	良	素地：褐灰色 釉：浅黄色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、裏面に墨書 素地は土師質、釉はガラス質
52	34	82	遺物包含層	緑釉陶器	椀か		(1.5)	6.4	密	不良	素地：灰白色 釉：灰白色	摩滅により調整不明 摩滅により調整不明	素地は土師質、蛇の目高台
52	34	83	遺物包含層	緑釉陶器	Ⅲ		(1.2)	8.4	密	やや良	素地：灰白色 釉：明緑灰色	回転ナデ 回転ナデ	素地は土師質、防長産
52	34	84	遺物包含層	緑釉陶器	椀		(1.2)		密	良	素地：灰色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	陰刻花文、素地は須恵質 釉はガラス質、狼投窯系

挿図	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考	
					口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)						
52	34	85	遺物包含層	緑釉陶器	椀		(1.9)		やや粗	良	素地：灰色 釉：淡黄緑色	回転ナデ 回転ナデ	陰刻花纹、素地は須恵質 釉はガラス質、猿投窯系
52	34	86	遺物包含層	緑釉陶器	椀		(1.4)	(6.5)	密	良	素地：灰色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	陰刻花纹、素地は須恵質 釉はガラス質、猿投窯系
52	34	87	遺物包含層	緑釉陶器	皿		(2.6)	(6.4)	密	良	素地：灰白色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラミガキ	陰刻花纹、素地は須恵質 釉はガラス質、猿投窯系
52	34	88	遺物包含層	緑釉陶器	椀		(2.3)	6.4	密	良	素地：灰色 釉：灰オリーブ色	ヘラミガキ ヘラケズリ、ヘラミガキ	素地は須恵質 京都産か
52	34	89	遺物包含層	緑釉陶器	椀		(1.7)	6.4	密	良	素地：灰白色 釉薬：オリーブ黄色	回転ナデ 回転ナデ	素地は須恵質、釉はガラス質
52	34	90	遺物包含層	緑釉陶器	椀		(1.9)	(9.8)	密	良	素地：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	素地は須恵質
52	34	91	遺物包含層	緑釉陶器	椀		(1.7)	(7.0)	密	やや良	素地：橙色 釉：明オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	素地は土師質 防長産か
52	34	92	遺物包含層	緑釉陶器	椀		(3.5)	(7.5)	密	やや良	素地：褐色 釉：黄緑色	回転ナデ 回転ナデ	素地は土師質 防長産か
52	34	93	遺物包含層	緑釉陶器	長頸壺	(8.8)	(1.5)		密	良	素地：灰白色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	素地は須恵質、釉はガラス質
52	34	94	遺物包含層	緑釉陶器	水注	1.5	3.2	2.8	密	やや良	素地：灰白色 釉：灰白色	ヘラケズリ	8面
52	34	95	遺物包含層	黒色土器	椀	(10.0)	(2.8)		やや密	良	暗灰色 黄灰色	ヘラミガキ ナデ	内面黒色
52	34	96	遺物包含層	黒色土器	椀	(11.6)	3.4	(5.4)	密	良	黒色 にぶい褐色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラミガキ	内面黒色
52	34	97	遺物包含層	黒色土器	椀	(12.1)	(3.1)		密	やや良	灰色 灰白色 灰色 灰白色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラミガキ	不完全な黒化処理
52	34	98	遺物包含層	黒色土器	椀	(15.5)	(3.5)		密	良	黒褐色 にぶい橙色	回転ナデ、ヘラナデ 回転ナデ、ヘラミガキ	内面黒色
52	34	99	遺物包含層	黒色土器	椀		(2.1)	(7.1)	やや密	やや良	黒色 浅黄橙色	ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラミガキ	内面黒色
52	34	100	遺物包含層	黒色土器	椀		(0.9)	(5.2)	密	良	黒褐色 黒褐色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラミガキ	両面黒色
52	34	101	遺物包含層	瓦器	椀	(11.3)	(3.7)		密	良	灰色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	和泉型か
52	34	102	遺物包含層	瓦器	椀		(0.7)	(4.8)	密	やや良	オリーブ黒色 灰白色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ	和泉型か
52	34	103	遺物包含層	青磁	椀	(12.8)	(4.0)		密	良	素地：灰白色 釉：黄灰色	回転ナデ 回転ナデ	越州窯
52	34	104	遺物包含層	青磁	椀		(2.5)	(7.2)	やや粗	良	素地：黄灰色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	越州窯
52	34	105	遺物包含層	青磁	椀		(2.7)	(5.0)	やや密	良	素地：灰白色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ	龍泉窯系
52	34	106	遺物包含層	白磁	椀	(9.2)	(2.0)		密	良	素地：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
52	34	107	遺物包含層	白磁	椀	(11.8)	(5.0)		粗	良	素地：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	
52	35	108	遺物包含層	白磁	椀		(14.2)	(4.1)	やや粗	良	素地：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
52	35	109	遺物包含層	白磁	椀		(1.4)		密	良	素地：灰黄色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ	高台に離れ砂付着
53	34	110	遺物包含層	須恵器	杯蓋		(1.1)		やや粗	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ヘラケズリ、回転ナデ	
53	35	111	遺物包含層	須恵器	杯蓋	(12.2)	(2.5)		密	良	青灰色 青灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	35	112	遺物包含層	須恵器	杯身	(14.0)	(3.9)		密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	35	113	遺物包含層	須恵器	杯身	(13.2)	(2.8)		密	良	黄灰色 黄灰色	回転ナデ 回転ナデ	口縁部に付着物あり
53	35	114	遺物包含層	須恵器	杯身		(1.9)	(9.0)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	35	115	遺物包含層	須恵器	杯身		(1.5)	(8.0)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラナデ	底部回転糸切り
53	35	116	遺物包含層	須恵器	杯身	(15.2)	8.5	(8.8)	粗	良	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	35	117	遺物包含層	須恵器	杯身		(4.8)	(7.0)	やや粗	やや良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り
53	35	118	遺物包含層	須恵器	杯身	(14.2)	4.9	(6.8)	やや粗	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	35	119	遺物包含層	須恵器	杯身		(2.7)	(8.0)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
53	35	120	遺物包含層	須恵器	杯身		(1.4)	(6.8)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	円板状高台
53	35	121	遺物包含層	須恵器	長頸壺		(4.4)		やや粗	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	35	122	遺物包含層	須恵器	長頸壺		(8.1)		密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	35	123	遺物包含層	須恵器	短頸壺	(11.0)	(2.7)		やや密	良	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	35	124	遺物包含層	須恵器	双耳壺		(9.0)		やや粗	良	オリーブ灰色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ	
53	35	125	遺物包含層	須恵器	壺		(2.0)		密	良	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	猿投窯系
53	35	126	遺物包含層	須恵器	壺		(1.5)		密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	猿投窯系

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内/外)	主な調整 (内/外)	備考
						口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)					
53	35	127	遺物包含層	須恵器	壺		(2.2)		やや粗	良	灰白色 灰色	回転ナデ ハケ目、回転ナデ	猿投窯系
53	35	128	遺物包含層	須恵器	鉢	(19.8)	(3.1)		やや密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	京都篠窯産
53	35	129	遺物包含層	須恵器	椀	(18.5)	5.6	8.3	密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ヘラミガキ 回転ナデ、ヘラミガキ	緑釉陶器の素地、京都産
53	35	130	遺物包含層	須恵器	壺	(13.4)	(7.2)		密	やや良	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、平行文タタキ	
53	35	131	遺物包含層	須恵器	甕	(35.2)	(7.7)		密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ヘラナデ ヘラナデ、平行文タタキ	円心円文当て具痕
53	35	132	遺物包含層	須恵器	甕	(18.6)	(5.3)		密	良	灰色 灰白色	回転ナデ、ヘラナデ ハケ目、回転ナデ	
53	35	133	遺物包含層	須恵器	壺		(3.1)	(5.4)	密	良	黄灰色 黄灰色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
53	35	134	遺物包含層	須恵器	鉢		(2.0)	(7.8)	密	良	灰色 灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラナデ	底部回転ヘラ切り
53	35	135	遺物包含層	須恵器	鉢か		(3.3)	(12.4)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、指オサエ、ナデ	底部回転ヘラ切り
53	35	136	遺物包含層	須恵器	壺		(5.4)	(10.2)	密	良	明オリブ灰色 オリブ灰色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラナデ	底部回転糸切り
53	35	137	遺物包含層	須恵器	壺		(4.2)	(8.2)	やや粗	良	明青灰色 明青灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	35	138	遺物包含層	灰釉陶器	椀		(4.3)		密	良	素地：灰白色 釉：オリブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	36	139	遺物包含層	灰釉陶器	椀		(3.2)		密	良	素地：灰白色 釉：褐灰色	回転ナデ 回転ナデ	
53	36	140	遺物包含層	灰釉陶器	椀		(1.9)	(7.1)	密	良	素地：灰色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
54	36	141	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.1	幅：2.5	厚さ：2.9	やや粗	良	浅黄橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量27.5g、赤色顔料塗布
54	36	142	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：4.9	幅：2.9	厚さ：2.7	粗	やや良	橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量35.8g、赤色顔料塗布
54	36	143	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.0	幅：3.2	厚さ：2.4	密	良	にぶい黄橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量32.5g、赤色顔料塗布
54	36	144	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：4.8	幅：3.2	厚さ：3.0	粗	やや良	橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量39.8g
54	36	145	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：4.5	幅：3.6	厚さ：2.7	密	良	灰黄褐色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量41.6g、赤色顔料塗布
54	36	146	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：4.8	幅：3.2	厚さ：2.6	粗	やや良	浅黄橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量40.8g、赤色顔料塗布
54	36	147	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.0	幅：3.0	厚さ：2.8	密	良	橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量33.5g、赤色顔料塗布
54	36	148	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.1	幅：3.3	厚さ：2.2	密	良	灰白色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量36.0g
54	36	149	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.6	幅：2.9	厚さ：3.4	密	良	にぶい橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量50.9g、赤色顔料塗布
54	36	150	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.1	幅：3.0	厚さ：2.8	密	良	にぶい橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量38.2g、赤色顔料塗布
54	36	151	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.9	幅：3.5	厚さ：2.7	やや粗	良	橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量46.0g
54	36	152	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.7	幅：3.7	厚さ：2.7	密	良	にぶい褐色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量54.9g、赤色顔料塗布
54	36	153	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.7	幅：3.5	厚さ：2.8	粗	やや良	にぶい橙色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量50.8g、赤色顔料塗布
54	36	154	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：5.6	幅：3.2	厚さ：3.0	粗	やや良	明褐色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量47.6g、赤色顔料塗布
54	36	155	遺物包含層	土製品	有溝土鉢	長さ：(6.8)	幅：(4.8)	厚さ：(3.1)	やや密	やや良	橙色	指ナデ 指ナデ	重量77.7g、赤色顔料塗布
54	36	156	遺物包含層	土製品	管状土鉢	長さ：4.5	直径：2.4	孔径：0.4	粗	良	灰色	ナデ ナデ	重量17.0g
54	36	157	遺物包含層	土製品	管状土鉢	長さ：4.9	直径：2.4	孔径：0.5	粗	良	灰色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量22.0g
54	36	158	遺物包含層	土製品	管状土鉢	長さ：4.7	直径：2.4	孔径：0.7	粗	良	灰色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量21.6g
54	36	159	遺物包含層	土製品	管状土鉢	長さ：5.2	直径：2.5	孔径：0.5	粗	良	灰色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量24.2g
54	36	160	遺物包含層	土製品	管状土鉢	長さ：5.5	直径：2.6	孔径：0.6	粗	不良	オリブ黒色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量22.8g
54	36	161	遺物包含層	土製品	管状土鉢	長さ：5.7	直径：2.5	孔径：0.45	粗	良	灰色	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ	重量23.7g
57	36	169	遺物包含層	弥生土器	壺	(19.9)	(3.4)		密	良	淡黄色	ナデ ナデ	山形文
57	36	170	遺物包含層	弥生土器	壺	(20.0)	(3.7)		密	やや良	橙色	ナデ ナデ、指オサエ	鋸歯文か
57	36	171	遺物包含層	弥生土器	壺		(2.9)		粗	良	にぶい橙色	摩滅により調整不明 摩滅により調整不明	列点文
57	36	172	遺物包含層	弥生土器	壺		(3.4)		密	良	浅黄橙色 橙色	ナデ ヘラミガキ	列点文
57	36	173	遺物包含層	弥生土器	甕		(3.2)	(7.4)	粗	良	浅黄色 にぶい黄色	ナデか ナデか	
57	36	174	遺物包含層	弥生土器	甕		(4.0)	7.8	粗	やや良	灰黄色 浅黄色	ナデ ナデ	

第9表 出土石器・石製品観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)(残存値)			重量(g)	石 材	備 考
						長さ	幅	厚さ			
55	36	162	遺物包含層	石器	剝片石器	5.3	7.3	0.8	27.3	安山岩	
55	36	163	遺物包含層	石製品	打製石斧	12.0	7.4	2.5	320.0	安山岩	
55	36	164	遺物包含層	石製品	磨石	9.8	3.7	5.8	218.5		4面磨面
55	36	165	遺物包含層	石製品	磨石・敲石	9.4	7.6	5.9	643.5	花崗岩	4面磨面、1面兼用
55	36	166	表面採集	石製品	石鍋		(3.0)		119.2	滑石	大刃と小刃によるノミ削り

第10表 出土金属製品観察一覧表

挿図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)(残存値)			重量(g)	備 考
						長さ	幅	厚さ		
48	31	1	SII	銅製品	銅印	縦：3.7	横：3.8	高：4.6	73.7	印側高6mm、一重郭、青銅製、「三川私印」、弧鈕有孔
56	36	167	遺物包含層	銅製品	飾り金具		推定直径(3.6)	0.5mm	2.5	用途不明
56	36	168	遺物包含層	鉄製品	鉄釘か	6.3	0.8	0.7	3.8	
	36	175	SII		鉄滓	10.0	8.5	3.4	265.0	椀形滓

V まとめ

1 はじめに

今回の調査によって、開明遺跡は弥生時代中期から古墳時代前期にかけての地域における拠点集落であること、尾尻遺跡は古代の官衙関連遺跡であることを、それぞれ確認することができた。以下、両遺跡の特徴的なことについてとりあげ、調査成果のまとめとしたい。

2 開明遺跡について

1) 建物跡と集落の変遷

はじめに、集落を構成する主たる要素である建物跡の存立状況から、本遺跡の集落の変遷についてみておきたい。

本遺跡では縄文時代の遺物を確認できるが、集落の成立が明確に認められるのは弥生時代の中期からである。この中期から後期までの間に、今回検出された3棟の円形竪穴建物跡（S I 1・S I 10・S I 14）が築造される。S I 1、S I 10は比較的大型の建物跡で、とりわけ出土遺物が多岐にわたるS I 10からは、良好な同時期資料を得ることができた。この時期には多くの掘立柱建物も確認できたが、このうち後期に比定されるS B 9は県内で一般的にみられる掘立柱建物とは異なり、柱穴掘方の規模が大きく、また柱間距離が短いことから、特殊な性格をもつ倉庫のような建物であったと考えられる。また、建物跡ではないが、調査区東部に位置するS K 16は、弥生時代中期の袋状竪穴（貯蔵穴）の痕跡とみられる。同一遺跡内で貯蔵穴から倉庫への時期的変化をうかがい得る資料としても注目されよう。

弥生時代の終末期になると多くの方形竪穴建物跡（S I 2・S I 8・S I 9・S I 15など）が築造され、以後古墳時代の前期（S I 7・S I 11・S I 13・S I 16などが成立）にかけてが集落の最盛期と考えられる。S I 2はこの時期の特徴的な建物跡で、今回の調査区で唯一確認できた屋外周溝をもつ方形竪穴建物跡である。同形態の住居は下関市下七見遺跡、高野遺跡、吉永遺跡など県西部の遺跡で確認できるが、県東部ではあまり類例を見ない。また、古墳時代前期に比定されるS I 7は、初現的なカマドと推定される施設を有しているが、下関市秋根遺跡や山口市吉田遺跡でのカマドを備えつけた建物跡とほぼ同時期にあたる。県内で発見された最古の事例群の一つといえ、カマド導入期の様相をうかがう上で注目されよう。このように、従来県西部や中央部で確認されていた屋外周溝やカマドをもつ建物跡を、ほぼ同時期の県東部でも確認できたことは意義深い。

古墳時代中期以降については、遺物の出土は認められるが、集落としての痕跡を確認することはできなかった。

以上のように、本遺跡は弥生時代中期に成立し、古墳時代前期まで継続して営まれた集落遺跡であるが、時期的な遺構分布のあり方から見れば、調査区西部から中央部または東部へと、生活空間が時代の推移とともに概ね西から東へ広がっていった様相をみてとることができよう。

2) 土器棺墓

今回の調査では、弥生時代終末期に位置づけられる3基の土器棺墓が確認された。リン酸・カルシウム分析の結果からは、遺体の埋葬を積極的に証明することはできなかったが、その大きさや従来の

調査事例から判断すると、新生児～幼児の遺体を埋葬したものと推定される。また、S T 2については、S I 2の周溝に切られているが、出土土器による大きな時期差は認められない。これら3基は、いずれも同時期のものとみられるS I 2周辺に分布が集中していることも注目される。

3) 遺物包含層出土ミニチュア土器群

調査区西部遺物包含層から、総数19点にのぼる弥生時代後期のミニチュア土器が一括して出土した。出土状況からすれば、本来は浅い土坑に伴っていた可能性がある。県内でこうした一括出土例は類例に乏しく、ミニチュア土器を用いた祭祀儀礼をうかがう上で貴重な資料を提示することとなった。

4) 出土遺物

本遺跡で出土した遺物は、弥生時代中期から古墳時代前期までの弥生土器、土師器を中心とする。この中で今回特に注目されるのは、山陰系（106・212・213など）、安芸系（208など）、伊予系（32・78・225など）、九州系（79・127・175など）、吉備系（133・150など）、畿内系（11・28・165など）といった外来系の土器を比較的多く確認できたことである。また、舟を描いたとみられる絵画土器(64)や県西部に多い木葉文が施文された弥生土器壺（204）の出土は、周辺では本遺跡の東約4kmに所在する田布施町明地遺跡に続く事例となった。いずれも希少な資料であり、今後の類例の増加が待たれる。そのほか、遺物包含層やS I 10から出土した、顔の具象表現された分銅形土製品（239ほか）も、集落内祭祀のあり方や伊予との交流などをうかがう上で貴重な資料である。

以上のように出土遺物からみると、本遺跡にはさまざまな地域の土器が集積している。そして、遺跡の継続期間、建物群の密集状況や規模等とも相俟って、本遺跡は各地との密接な交流を有した、地域における拠点的な集落であったといえよう。

3 尾尻遺跡について

1) 建物跡と集落の変遷

まず、調査区の状況について概観してみると、調査区の大部分は標高13～13.5mの間に収まるが、調査区の北部と南部では空間利用状況が大きく異なる。遺構は南部には存在するが、北部ではほとんど見られない。遺構面となる黄橙色粘土は、北部ほど湿性、粘性が強く地盤の安定性に欠けるため、遺構の分布密度に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

次に、今回の調査で確認できた竪穴建物跡1棟（S I 1）、掘立柱建物跡3棟（S B 1～S B 3）についてまとめてみると、これらのうち、最も早く出現するのはS I 1である。出土遺物から9世紀代に比定されるが、同時期の建物跡を今回の調査区では確認することができなかった。支柱穴やカマド、炉などの施設をもたないため、通常の居住用施設とは考えられず、銅印、重なりあう緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、鉄滓といった出土遺物から、何らかの特別な性格をもつ建物であったといえよう。

その後10世紀後半代～11世紀初頭になると、3棟の掘立柱建物跡が出現する。このうち比較的大型の建物跡であるS B 2の柱穴からは、多くの遺物が出土しており、建物の廃絶儀礼やそれに伴う資料としても注目される。また、北部で唯一検出されたS B 1は、谷状の微地形、谷奥部の安定しない地盤に孤立して立地しており、こうした立地条件や、直径75cm以上、深さ80cm以上を測る柱穴の大きさ、さらには3mを超える柱間の長さなど、きわめて特殊な要素をもつ。県内では類例に乏しく、建物の具体的な性格については不明確である。

2) 出土遺物

遺跡から出土した銅印は、関東・中部地方を中心に全国で約70点あるが、今回S I 1出土の古代銅印は県内では初例である。わが国における公印制度は、701年より始まった。当初は官印が主体であり、私印の使用は原則として認められていなかったが、実態としては奈良時代の正倉院文書にも見られ、各地で出土印として発見されている。その後、868年に家印・私印の使用について記された文書では、印面の大きさを一寸五分以内と規定している。今回の銅印はこの規定内に収まるが、弧鈕の形態は私印としては珍しい。また、印面に刻まれた「三川」に関する人物は文献からは確認できず、文献に見えない有力な氏族が遺跡周辺に居住した可能性が高い。S I 1埋土中から横向きに置いたような状態で出土したことから、祭祀行為などに伴い意図的に納められた可能性も指摘できよう。

また、今回の調査では、緑釉陶器が約70点出土した。中でもS I 1出土の京都産椀3点は、良好な一括資料であり、銅印の出土とともに特筆すべきものであろう。そのほかは、SD 7出土の1点を除きすべて遺物包含層から出土したものであり、ほとんどが小片ではあるが、県内産に加え、京都・尾張製品、及び京都産緑釉陶器の素地も含まれている。またこのほかにも遺物包含層から、青磁、白磁、灰釉陶器などが出土しており、中でもこれまで県内で出土例の少ない越州窯青磁(103・104)が出土していることは注目に値する。

なお、土錘の出土が多いことも注目されよう。有溝土錘と管状土錘で総数45点を超え、前者の占める割合が高いことが特徴である。これらのうち有溝土錘1点(23)がSB 1に伴うことから、一部は10世紀後半代の所産と考えられる。こうした土錘の存在は、生業活動の一端を示すのみならず、平安海進期における近辺への海水面の湾入を間接的に示唆するものである。

以上のことから、遺跡の性格については、銅印の出土や緑釉陶器他の土器類の組み合わせ等を踏まえれば、通常の集落跡とはみなしがたく、古代の官衙的性格をもった遺跡と考えられる。遺跡周辺に官衙関連施設が存在していた可能性が強いと推定される。また、土錘や舶載磁器、搬入土器の出土などからは、間近に迫る海や港湾関連施設の存在が浮き彫りとなり、遺跡周辺が地域の物流の拠点、海と内陸の結節点として重要な地を占めていたであろうことも想定される。なお、遺物包含層は遺物の密度が北西側ほど高く、本遺跡の北西側に官衙関連施設本体があった可能性を指摘しておきたい。

4 おわりに

今回の調査により、開明遺跡・尾尻遺跡から熊毛郡南部、ひいては周防中枢部の歴史の変遷を明らかにする上での多くの貴重な資料を得るとともに、田布施川中流域の重要性を改めて認識することができた。しかし、調査対象範囲の制約などから、遺跡の詳細な特徴を捉えるには依然として不明な点が多い。今後周辺域における新たな調査が重ねられ、これまでの調査成果と合わせて総合的に検討することで、当該地域の人々の過去の生活や社会の実態がより鮮明になることを期待したい。

引用・参考文献

『日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第79集 国立歴史民俗博物館 1999
埋蔵文化財研究会『古墳時代の竈を考える 第一分冊—朝鮮半島・九州・中国・四国・近畿篇』財団法人和歌山県文化財センター 1992
財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター『明地遺跡』1993 『明地遺跡Ⅱ』1994 『吉永遺跡(Ⅲ—東地区)』1999

(付編)

開明遺跡・尾尻遺跡における自然科学分析

(株) 加速器分析研究所

はじめに

開明遺跡は山口県熊毛郡田布施町川西地内（北緯33° 57' 59"、東経132° 1' 4"）、尾尻遺跡は山口県熊毛郡田布施町宿井地内（北緯33° 58' 6"、東経132° 1' 19"）に所在する。

本報告では、開明遺跡、尾尻遺跡より採取した試料のリン酸・カルシウム分析、開明遺跡採取試料の蛍光X線分析、開明遺跡、尾尻遺跡出土試料の放射性炭素年代測定の結果を提示し、考察を行う。

I リン酸・カルシウム分析

1 試料

試料は、尾尻遺跡のSK8から採取された試料1と、その周辺から採取された試料2、開明遺跡のST1から採取された試料3、ST2から採取された試料4、ST3から採取された試料5、SK8から採取された試料6、ST1-3周辺から採取された試料7、SP401から採取された試料8とその周辺から採取された試料9の合計9点である。

野外土性（ペドロジスト懇談会編1984）は、全試料とも重埴土（HC）に区分され、粘質な土壤である。各試料の土色は、試料1が10YR4/3にぶい黄褐、試料2が10YR3/4暗褐、試料3・4が10YR2/3黒褐、試料5が2.5Y6/4にぶい黄、試料6が2.5Y3/1黒褐、試料7が10YR4/3にぶい黄褐、試料8が10YR2/2黒褐、試料9が10YR3/3暗褐である。なお、試料の詳細は、結果とともに表示する。

2 分析の目的

尾尻遺跡、開明遺跡より採取した遺構内埋土、および遺物内埋土のリン酸・カルシウム分析を行い、対象とした遺構が墓として利用された履歴情報を得る。

3 分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法（土壤標準分析・測定法委員会1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO₃) 約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 (HClO₄) 約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸 (P₂O₅) 濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P₂O₅mg/g) とカルシウム含量 (CaO mg/g) を求める。

4 結果

リン酸・カルシウム分析結果を表1に示す。以下、遺跡別、遺構別に結果を検討する。

尾尻遺跡採取試料は、S K 8から採取された試料1のリン酸含量が1.33mg/g、カルシウム含量が2.41mg/g、S K 8の周辺から採取された試料2のリン酸含量が1.22mg/g、カルシウム含量が2.90mg/gである。2試料の間に明確な差は認められない。

開明遺跡採取試料は、S T 1から採取された試料3のリン酸含量が1.80mg/g、カルシウム含量が2.49mg/gである。S T 2から採取された試料4のリン酸含量が1.72mg/g、カルシウム含量が2.47mg/gである。S T 3から採取された試料5のリン酸含量が1.80mg/g、カルシウム含量が1.67mg/gである。S K 8から採取された試料6のリン酸含量が2.08mg/g、カルシウム含量が2.70mg/gである。S T 1-3周辺から採取された試料7のリン酸含量が1.22mg/g、カルシウム含量が2.11mg/gである。S P 401から採取された試料8のリン酸含量が2.36mg/g、カルシウム含量が2.04mg/g、S P 401周辺から採取された試料9のリン酸含量が1.18mg/g、カルシウム含量が1.58mg/gである。分析対象とした遺物(土器)内埋土は、比較試料である周辺土より高い含量を示す場合があるが、その絶対量は少ない。

表1. 土壌化学分析結果

試料 No.	遺跡名	遺構名	採取場所・ 採取試料	土 色	土性	全リン酸	全カルシウム	
						P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO (mg/g)	
1	尾尻遺跡	S K 8	遺構内埋土	10YR4/3	にぶい黄褐	HC	1.33	2.41
2			周辺土	10YR3/4	暗褐	HC	1.22	2.90
3		S T 1	遺物(土器)内埋土	10YR2/3	黒褐	HC	1.80	2.49
4		S T 2	遺物(土器)内埋土	10YR2/3	黒褐	HC	1.72	2.47
5		S T 3	遺物(土器)内埋土	2.5Y6/4	にぶい黄	HC	1.80	1.67
6	開明遺跡	S K 8	遺物(土器)内埋土	2.5Y3/1	黒褐	HC	2.08	2.70
7			周辺土	10YR4/3	にぶい黄褐	HC	1.22	2.11
8		S P 401	遺物(土器)内埋土	10YR2/2	黒褐	HC	2.36	2.04
9		S P 401	周辺土	10YR3/3	暗褐	HC	1.18	1.58

備考

(1) 土性：土壌調査ハンドブック (ペドロジスト懇談会編, 1984) の野外土性による。
HC…重埴土 (粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%)

(2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖 (農林省農林水産技術会議監修, 1967) による。

5 考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壤や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壤中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが (Bowen 1983; Bolt and Bruggenwert 1980; 川崎ほか1991; 天野ほか1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響 (化学肥料の施用など) を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g (川崎ほか, 1991) という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では6.0mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1～50mg/g (藤貫, 1979) といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壤中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壤中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

尾尻遺跡では、遺構内埋土の試料1と、比較試料である周辺土の試料2との間に明確な差が認められないことから、SK8を墓として捉える積極的な根拠は得られていない。また、開明遺跡では、遺物 (土器内) 埋土である試料3～6・8は、比較試料である周辺土の試料7・9より高いリン酸含量を保持するものの、上記した天然賦存量である3.0mg/g以下であり、さらに、カルシウム含量がリン酸の増加に比例しておらず、その絶対量は少ない。よって、今回の分析結果からのみでは、遺体が埋納されていたということを積極的に支持することは難しい。ただし、上述したように湿生な環境で遺体成分が少なからず流亡した可能性も考えられ、今後の分析事例の蓄積や他の調査手法による検証が必要と考えられる。

II 蛍光X線分析

1 試料

試料は、開明遺跡のSK1から採取されたブロック試料、遺構内埋土1点 (試料10) である (図版1)。試料全体がやや赤味を帯びた状況にあり、マンセル表色系による色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) である。顔料塊等は確認出来ないため、本調査ではブロック試料全体を対象として分析を実施した。

2 分析の目的

ベンガラ、水銀朱などの赤色顔料が土壤中に含まれている可能性が指摘されている試料を対象として、蛍光X線分析による元素分析を実施し、顔料鉱物に関する情報を得る。

3 分析方法

105℃で機械乾燥させた試料を、高速振動試料粉砕機（平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器）で粉砕・混合し、微粉砕試料（200mesh,95% pass）とした。

微粉砕試料を、シングルレイヤーペレット法による加圧成型（プリケット）試料とし、波長分散型蛍光X線分析装置（（株）リガク製、ZSX PrimusⅢ+）による定性分析を実施した。なお、加圧試料の作成条件については表2に、測定に用いた蛍光X線装置の装置条件および測定条件の詳細については、表3、4にそれぞれ掲げた通りである。また、本装置における検出可能元素は希ガスを除く ${}_{9}\text{F} \sim {}_{92}\text{U}$ までの元素である。

表2. 加圧成型試料作成条件

加圧装置	電動式試料成型機 (理学電機工業社製9302-D3)
成形リング	塩化ビニル(30mmφ)
バインダー	四ホウ酸リチウム
加圧力	10ton (100kN)

表3. 蛍光X線装置条件

ターゲット	Rh
試料マスク	30mmφ
試料スピン	OFF
ダイアフラム	30mmφ
測定雰囲気	真空

表4. 蛍光X線定性測定条件

定性元素	kV-mA	フィルタ	アッテナータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		スキャン条件			
							LL	UL	開始(deg)	終了(deg)	ステップ(deg)	測定時間(sec)
HEAVY	50-50	OUT	OUT	S2	LiF (200)	SC	100	300	5.000	90.000	0.02	0.04
Ca	40-60	OUT	OUT	S4	LiF (200)	PC	100	300	110.000	116.000	0.05	0.10
K	40-60	OUT	OUT	S4	LiF (200)	PC	100	300	133.000	140.000	0.05	0.10
Cl	30-80	OUT	OUT	S2	GE	PC	150	300	90.000	96.000	0.05	0.30
S	30-80	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	300	107.000	114.000	0.05	0.15
P	30-80	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	300	137.000	144.000	0.05	0.15
Si	30-80	OUT	OUT	S4	PET	PC	100	300	106.000	112.000	0.05	0.15
Al	30-80	OUT	OUT	S4	PET	PC	100	300	140.000	148.000	0.05	0.15
Mg	30-80	OUT	OUT	S4	RX25	PC	100	250	36.596	42.596	0.05	0.20
Na	30-80	OUT	OUT	S4	RX25	PC	100	250	45.132	51.132	0.05	0.20
F	30-80	OUT	OUT	S4	RX25	PC	100	250	74.734	80.734	0.05	0.30

4 結果

波長分散型蛍光X線分析装置による元素定性を実施した後、蛍光X線分析プログラムを利用し、ファンダメンタルパラメーター（FP）法に基づくスタンダードレス分析を用い、本結果における検出元素において100%に規格化した場合での相対含有率（mass%）を算出した。

なお、含有量（相対含有率）算出においては、検出元素を全て酸化物として取扱った条件で演算処理を実施した。

表5. 試料10の蛍光X線分析結果

分析線	X線強度 kcps	成分名	分析結果 mass%
Na-KA	0.2329	Na ₂ O	0.2265
Mg-KA	4.8093	MgO	1.4445
Al-KA	256.4217	Al ₂ O ₃	27.7521
Si-KA	445.7722	SiO ₂	59.2299
P-KA	3.5276	P ₂ O ₅	0.2718
S-KA	1.3091	SO ₃	0.1148
Cl-KA	0.1341	Cl	0.0153
K-KA	97.4123	K ₂ O	2.3276
Ca-KA	11.5798	CaO	0.3230
Ti-KA	13.1130	TiO ₂	1.1178

ただし、検出元素に含まれるタングステン (W) については粉碎容器による汚染元素であるため演算から除外している。

定性チャートを図1に掲げ、蛍光X線分析結果を表5に示す。

分析線	X線強度 kcps	成分名	分析結果 mass%
Cr-KA	0.2809	Cr2O3	0.0082
Mn-KA	10.8280	MnO	0.1868
Fe-KA	530.4626	Fe2O3	6.8170
Co-KA	1.2401	Co2O3	0.0050
Ni-KA	0.6723	NiO	0.0001
Cu-KA	0.5935	CuO	0.0002
Zn-KA	3.4188	ZnO	0.0136
Ga-KA	0.7550	Ga2O3	0.0033
Rb-KA	11.0462	Rb2O	0.0145
Sr-KA	5.5587	SrO	0.0069
Y-KB1	2.0445	Y2O3	0.0119
Zr-KB1	7.7584	ZrO2	0.0406
Ba-LA	0.3103	BaO	0.0631
Pb-LA	0.8669	PbO	0.0056
Total			100.00

5 考察

赤色顔料として利用される代表的な顔料鉱物としては、ベンガラ（赤鉄鉱；hematite [α - Fe_2O_3])のほか、水銀朱（辰砂；cinnabar [HgS])、鉛丹（鉛丹；minium [Pb_3O_4])が挙げられる。これら顔料鉱物の科学的調査法としては、蛍光X線分析法を利用し、検出される鉄 (Fe) や水銀 (Hg)、硫黄 (S) あるいは鉛 (Pb) を指標として識別する手法と、X線回折法を利用して得られる結晶構造の特徴から、赤鉄鉱、辰砂、鉛丹を同定する手法がある。

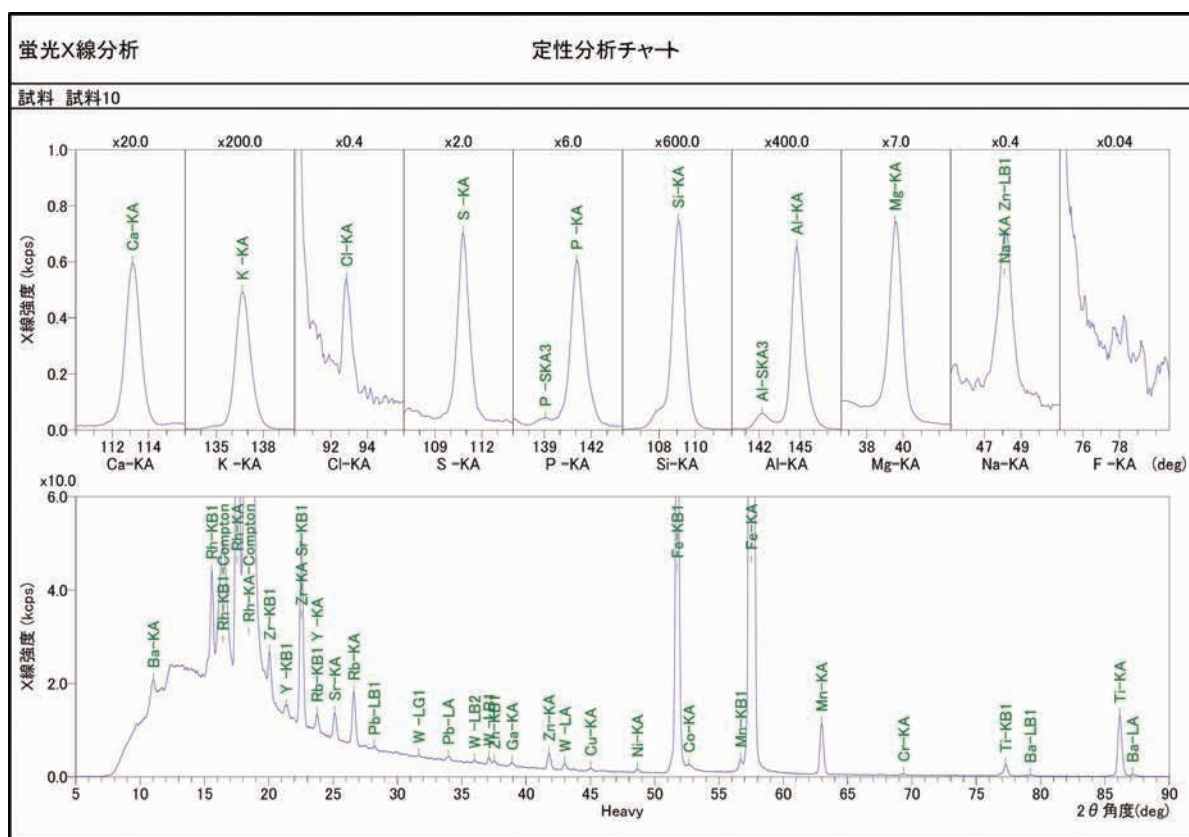


図1. 試料10 (SK1遺構内埋土) の蛍光X線スペクトル

本調査では、蛍光X線分析法による元素分析を実施し、含有元素の特徴から顔料鉱物を把握する手法を用いたが、試料からは水銀は検出限界以下、鉛は検出されてはいるもののppmオーダーで含まれるのみであるため、水銀朱や鉛丹が含まれている可能性は低いと考える。したがって、本試料に含まれる赤色顔料としてはベンガラの可能性が高いと判断されるが、本調査においては赤色顔料粒子単体を分析対象とは出来ていないため、土壌構成元素に由来する鉄との識別が困難である。蛍光X線分析結果による Fe_2O_3 の含有率は6.8 mass%であり、極端に鉄が多く含まれている状況にないことを考慮すると、赤色顔料の混入を明確に支持する結果とは言えない。今後薄片観察、X線回折分析等によって検証する余地があると考えられる。

Ⅲ 放射性炭素年代測定（AMS測定）

1 測定対象試料

尾尻遺跡の測定対象試料は、S I 1埋土1出土炭化物（No.11：IAAA-122049、No.12：IAAA-122050）の合計2点である（表6）。No.11は建物跡の床面から出土した炭化物の塊である。No.12は、床面付近で泥の中に炭化物が含まれた泥炭のような状態で検出され、そのまま取り上げられた後、室内で炭化物が取り出された。建物跡の時期は出土土器等から平安時代頃（9～10世紀）と推定されている。

開明遺跡の測定対象試料は、S I 7トレンチ部出土炭化物（No.13：IAAA-122051）、S I 8埋土出土炭化物（No.14：IAAA-122052）の合計2点である（表6）。No.13はS I 7から出土した炭化物塊であるが、トレンチ掘削時に出土したため、正確な出土位置は不明である。No.14はS I 8の埋土から出土した炭化物片である。S I 7とS I 8の間には重複関係がある。これらの建物跡の時期は、出土遺物から弥生時代～古墳時代頃と推定されている。

2 測定の意義

炭化物が出土した建物跡の時期を明らかにする。No.13、No.14については、これらの試料が出土した建物跡の前後関係を確認するための手がかりとする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表6に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（ CO_2 ）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表6)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表6に、補正していない値を参考値として表7に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表6に、補正していない値を参考値として表7に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表7に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

尾尻遺跡出土炭化物の¹⁴C年代は、S I 1埋土出土のNo.11が1180±30yrBP、No.12が1160±30yrBPである。2点の値は誤差(±1σ)の範囲で重なり、近い年代を示す。暦年較正年代(1σ)は、No.11が782～888cal AD、No.12が783～945cal ADの間に各々複数の範囲で示される。出土土器等から推定される時期と矛盾しない結果となっている。

開明遺跡出土炭化物の¹⁴C年代は、S I 7トレンチ部出土のNo.13が1620±30yrBP、S I 8埋土出土のNo.14が1890±30yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、No.13が406～532cal ADの間に2つの範囲、No.14が77～129cal ADの範囲で示される。S I 7とS I 8の重複関係に関して、年代値からはS I 7が新しく、S I 8が古いという結果になっている。また、No.13は古墳時代中期～後期頃、No.14は弥生時代後期頃に相当する年代値で(佐原2005、藤尾2009、小林2009)、出土遺物から弥生時代～古墳時代と推定されることに矛盾しない結果である。

なお、No.14が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCal09に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾寄2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いてNo.14の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新くなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表6. 放射性炭素年代測定結果1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり					
						Libby Age (yrBP)			pMC (%)		
I AAA-122049	No.11	尾尻遺跡 S I 1 埋土	炭化物	AAA	-27.84 ± 0.30	1,180	±	30	86.33	±	0.27
I AAA-122050	No.12	尾尻遺跡 S I 1 埋土	炭化物	AaA	-26.13 ± 0.44	1,160	±	30	86.56	±	0.28
I AAA-122051	No.13	開明遺跡 S I 7 トレンチ部	炭化物	AAA	-23.91 ± 0.39	1,620	±	30	81.78	±	0.26
I AAA-122052	No.14	開明遺跡 S I 8 埋土	炭化物	AAA	-24.28 ± 0.61	1,890	±	30	78.99	±	0.25

[#5420,5421]

表7. 放射性炭素年代測定結果2 (参考値)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし			暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)				
I AAA-122049	1,230 ± 30	85.83 ± 0.26		1,180 ± 25	782calAD - 790calAD (5.9%) 810calAD - 888calAD (62.3%)	775calAD - 897calAD (90.9%) 922calAD - 942calAD (4.5%)
I AAA-122050	1,180 ± 30	86.36 ± 0.26		1,159 ± 25	783calAD - 789calAD (3.2%) 813calAD - 845calAD (17.5%) 857calAD - 898calAD (31.3%) 921calAD - 945calAD (16.2%)	778calAD - 794calAD (6.6%) 799calAD - 903calAD (62.1%) 916calAD - 968calAD (26.7%)
I AAA-122051	1,600 ± 30	81.96 ± 0.26		1,615 ± 25	406calAD - 440calAD (33.2%) 486calAD - 532calAD (35.0%)	395calAD - 535calAD (95.4%)
I AAA-122052	1,880 ± 20	79.11 ± 0.23		1,894 ± 25	77calAD - 129calAD (68.2%)	55calAD - 178calAD (91.1%) 190calAD - 213calAD (4.3%)

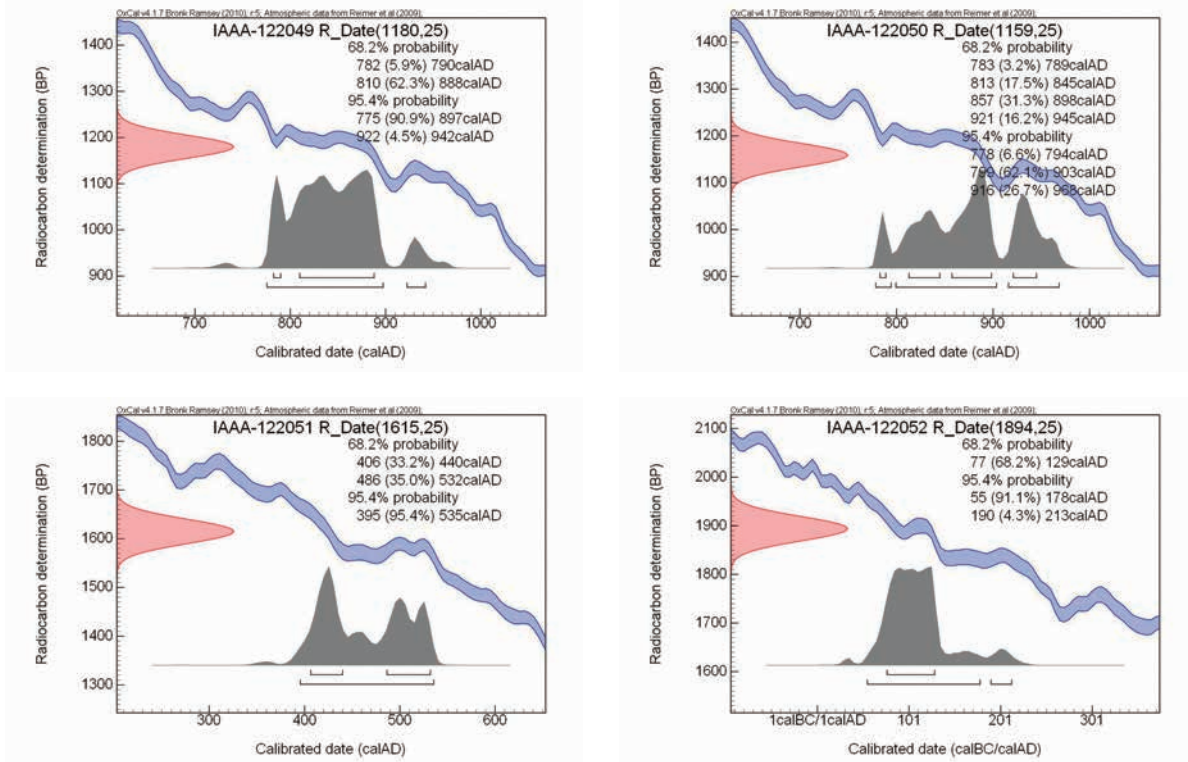


図2. 暦年較正年代グラフ

文献

- 天野洋司・太田健・草場敬・中井信 1991 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省・農林水産技術会議事務局編, 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 28-36
- Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M. 1980 土壌の化学, 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 学会出版センター, 309p
- Bowen, H.J.M. 1983 環境無機化学－元素の循環と生化学－, 浅見輝男・茅野充男訳, 博友社, 297p
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- 土壌標準分析・測定法委員会編 1986 土壌標準分析・測定法, 博友社, 354p
- 藤貫正 1979 カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52, 57-61
- 藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54
- 川崎弘・吉田滂・井上恒久 1991 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省・農林水産技術会議事務局編, 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 23-27
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1967 新版標準土色帖
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- ペドロジスト懇談会 1984 野外土性の判定, ペドロジスト懇談会編, 土壌調査ハンドブック, 博友社, 39-40
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51 (4), 1111-1150
- 佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

開明遺跡図版



両遺跡遠景（北西から）



調査区全景（北から）



調査区西部近景

図版 2



調査区中央部近景



調査区東部近景



調査区東部上層遺構面完掘状況（西から）



S I 1 完掘状況（南から）

図版 4



S I 2 完掘状況 (北から)



S I 2 周溝部南西側土器出土状況 (南東から)



S I 2 周溝部東側土器出土状況 (北から)



S I 2 内土坑土器出土状況



S I 2 内柱穴土器出土状況



S I 7 完掘状況（北から）



S I 7 土層断面（北から）



S I 7 カマド完掘状況（東から）



S I 8 完掘状況（北から）

図版 6



S I 13 完掘状況（北から）



S I 10 完掘状況（西から）



S I 15 完掘状況（南東から）



S I 15・16 完掘状況（北東から）

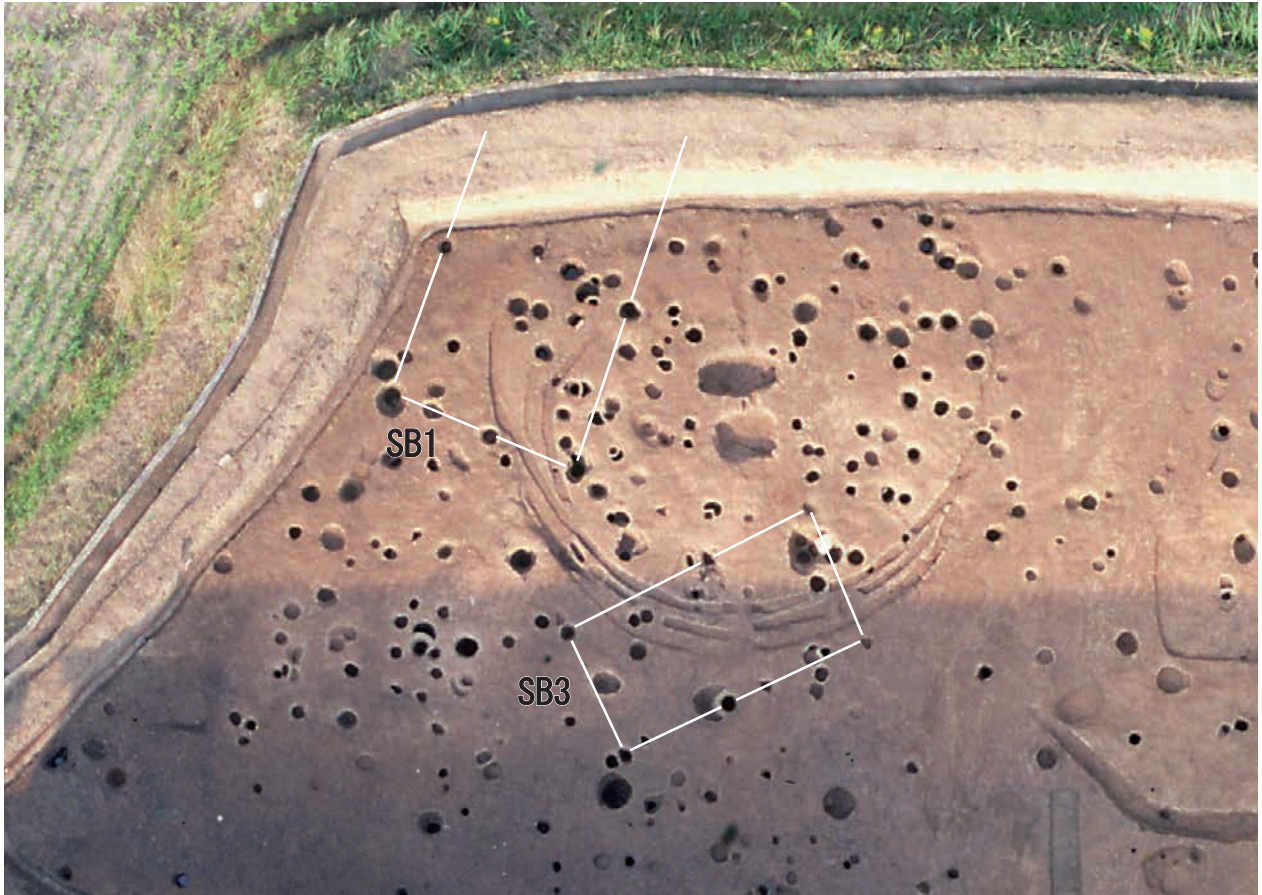


S I 16 内柱穴土器出土状況



S I 16 内柱穴土器出土状況

図版 8



S B 1 ・ 3 完掘状況



S B 9 完掘状況 (南から)



S T 1 検出状況 (北から)



S T 2 検出状況 (南西から)



S T 3 検出状況 (西から)



S K 2 土層断面 (東から)



S K 3 完掘状況 (西から)



S K 8 土器出土状況 (北から)



S K 16 土器出土状況 (北西から)



S K 6 土器出土状況 (北から)

図版 10



S D 2 土器出土状況 (東から)



S P 275 土器出土状況



S P 150 石斧出土状況



S P 901 土器出土状況



S P 220 土器出土状況



S P 353 土器出土状況



S P 281 土器出土状況



S P 219 土器出土状況



S P 401 土器出土状況



S P 399 土器出土状況



S P 909 土器出土状況



S P 467 土器出土状況



遺物包含層出土ミニチュア土器群（北から）

图版 12



出土遺物（1）



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)





出土遺物 (6)





出土遺物 (8)

图版 20



出土遺物（9）



出土遺物 (10)

图版 22



出土遺物 (11)



出土遺物 (12)

图版 24



出土遺物 (13)

尾尻遺跡図版



両遺跡遠景（北東から）



調査区全景（南西から）



調査区北部近景



調査区南部近景



S I 1 銅印出土状況（南西から）



S I 1 銅印出土状況



S I 1 銅印出土状況



S I 1 土器出土状況



S I 1 土器出土状況



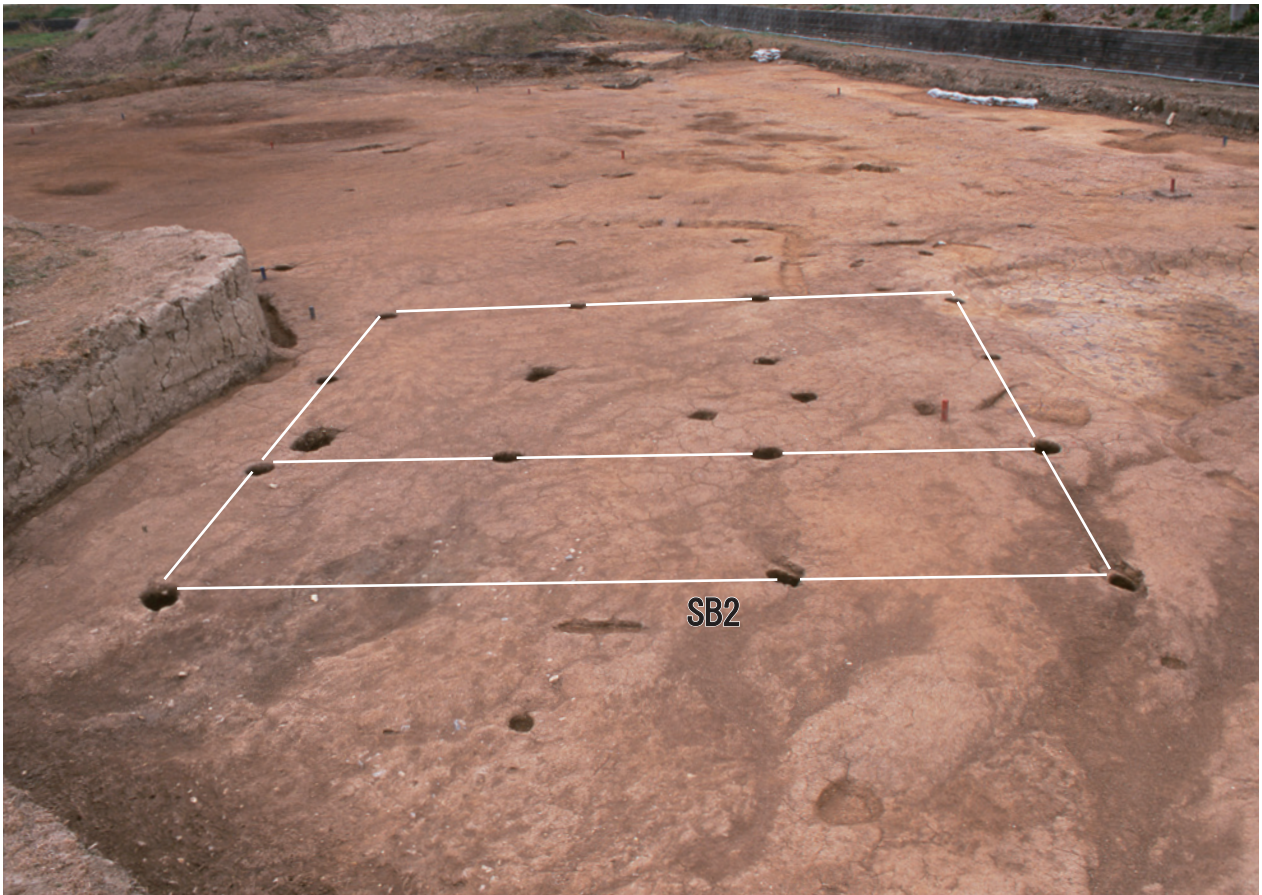
S I 1 完掘状況 (北西から)



SB1 完掘状況（北東から）



SB3 完掘状況（南西から）



S B 2 完掘状況（南東から）



S D 8 完掘状況（北東から）

図版 30



S K 12 土器出土状況（南から）



S P 521 土器出土状況



S P 524 土器出土状況



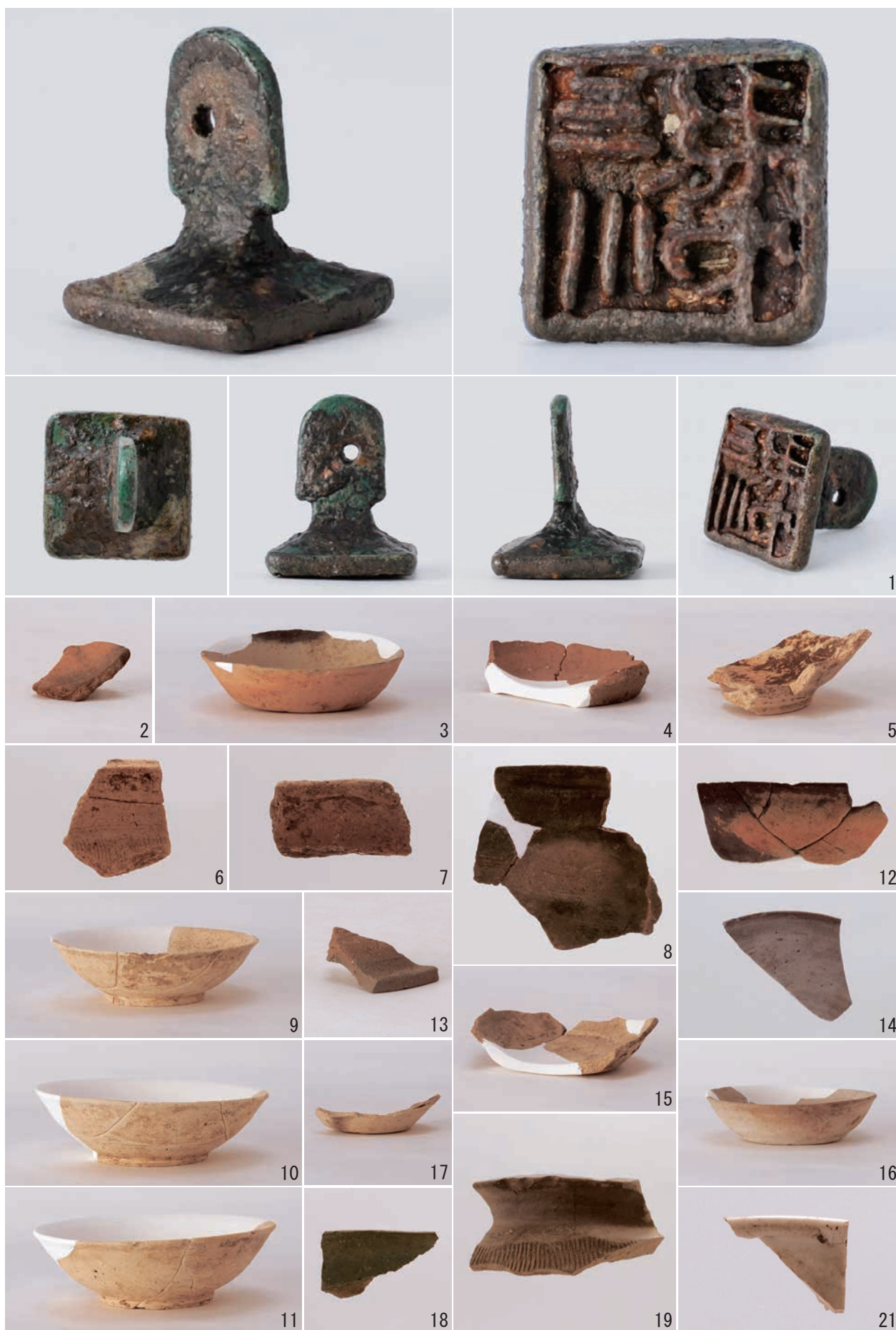
S P 523 土器出土状況



S P 522 土器出土状況



S P 529 柱根検出状況



出土遺物（1）

图版 32



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

图版 34



出土遺物（4）



出土遺物 (5)

图版 36



出土遺物 (6)

報告書抄録

ふりがな	かいめいいせき・おしりいせき	
書名	開明遺跡・尾尻遺跡	
副書名		
巻次		
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	田布施町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第81集	第3集
編集著者名	石川 彰 光永辰男 四元 努 山田圭子	池本 篤
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	田布施町教育委員会
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060	〒742-1592 山口県熊毛郡田布施町 大字下田布施3430-1 TEL0820-52-5813
発行年月日	西暦2013年3月21日（平成25年3月21日）	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいめいいせき 開明遺跡	やまぐちけん 山口県 たふせちょう 田布施町 かわにし 川西	35343		33° 57' 59"	132° 1' 4"	20111204) 20121217	2,300㎡	ほ場整備
おしりいせき 尾尻遺跡	やまぐちけん 山口県 たふせちょう 田布施町 しゅくい 宿井	35343		33° 58' 6"	132° 1' 19"	20111128) 20121217	2,700㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
開明遺跡	集落跡	弥生) 古墳	竪穴建物跡 16棟 掘立柱建物跡 20棟 柵列跡 3条 溝 7条 土器棺墓 3基 土坑 29基 柱穴 約980個	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 土製品 石器・石製品 鉄製品	瀬戸内・九州・山陰等の特徴をもつ弥生土器が出土
尾尻遺跡	官衙跡	古代	竪穴建物跡 1棟 掘立柱建物跡 3棟 柵列跡 3条 溝 13条 土坑 13基 柱穴 約180個 性格不明遺構 2基	土師器 須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器 磁器 土製品 石器・石製品 金属製品	古代の銅印が出土 中国産磁器・近畿東海地方産の緑釉陶器が一定量出土

要約	<p>開明遺跡は標高20m前後の丘陵上に立地する、弥生時代中期から古墳時代の前期を主体とする集落跡である。竪穴建物跡16棟のほか掘立柱建物跡、溝、土器棺墓、土坑などが検出された。竪穴建物跡のうち、13棟は平面形が方形で他は円形である。出土した弥生土器には瀬戸内海沿岸や九州、山陰などの特徴をもつものがある。その他の出土遺物として、舟を描いたと考えられる絵画土器や分銅形土製品、遺物包含層から19個体がまとまった状態で出土したミニチュア土器などがある。</p> <p>尾尻遺跡は丘陵下部の標高13m前後の沖積平野に立地する古代の官衙跡である。竪穴建物跡や掘立柱建物跡、溝、土坑などが検出された。県内遺跡からは初の出土例となる古代の銅印をはじめ、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁、土錘などが出土した。</p>
----	---

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第81集
田布施町埋蔵文化財調査報告 第3集

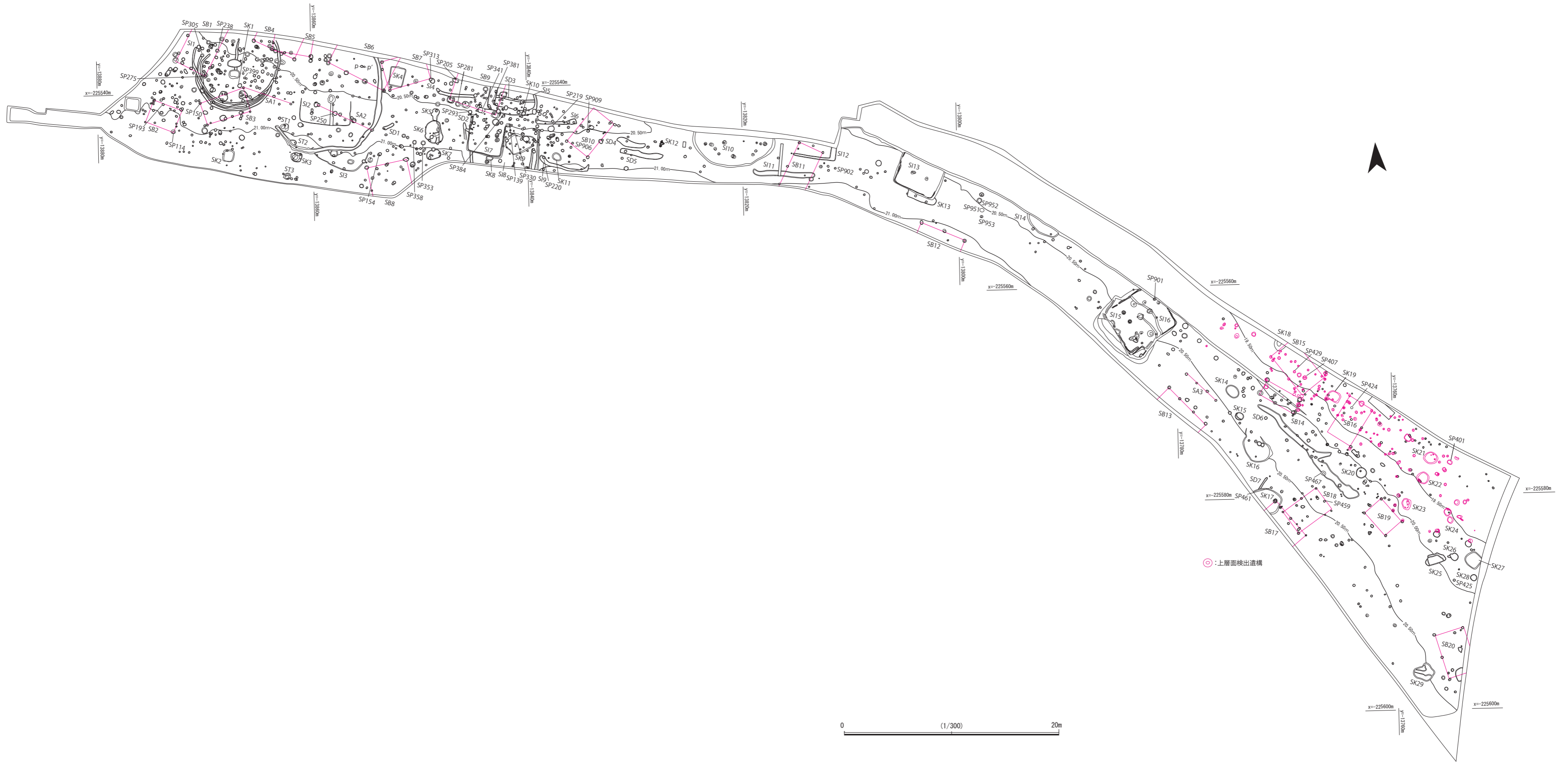
開明遺跡 尾尻遺跡

2013年3月21日

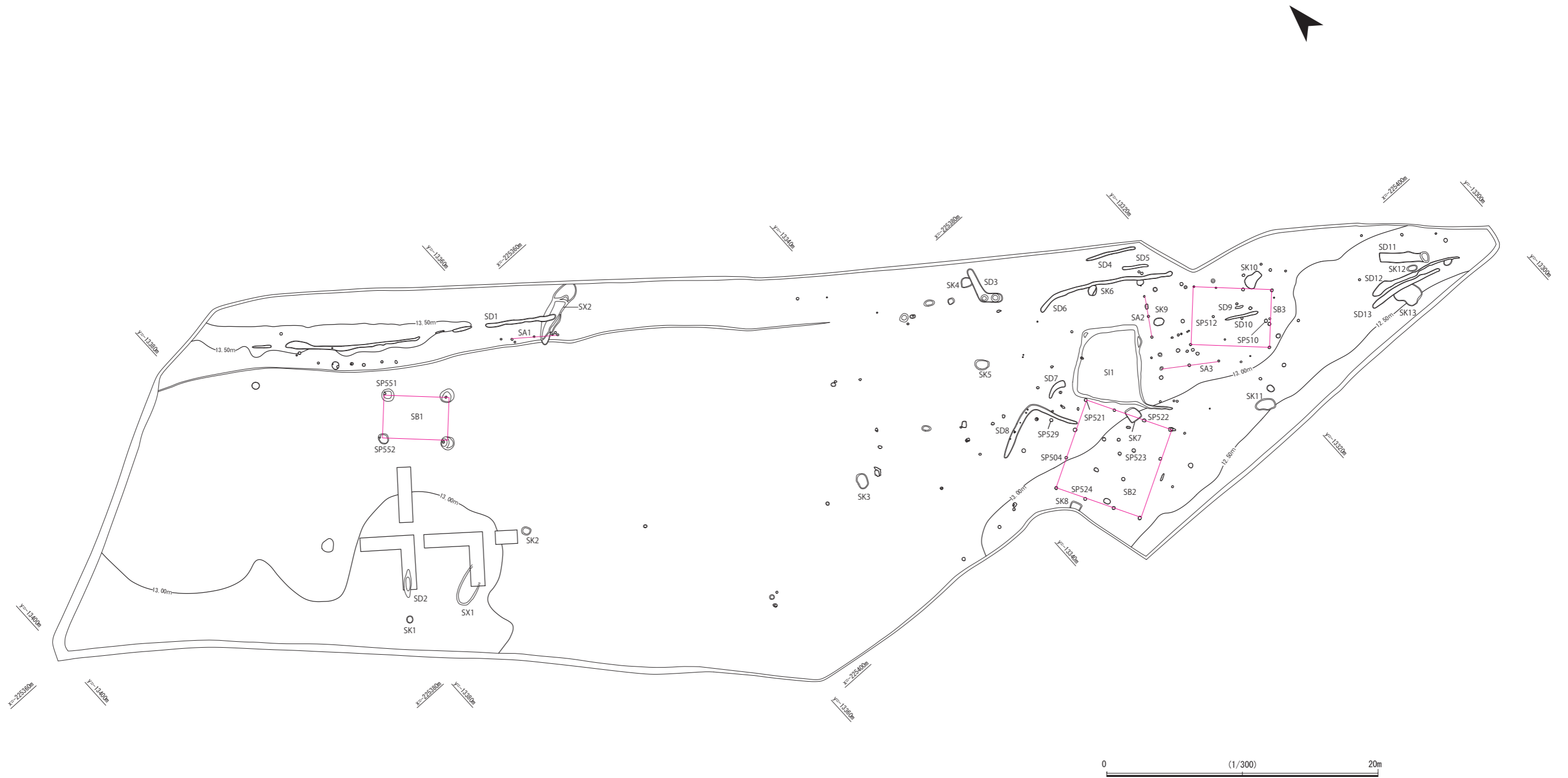
編集・発行 公益財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

田布施町教育委員会
〒742-1592 山口県熊毛郡田布施町
大字下田布施3430-1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
〒752-0927 山口県下関市長府扇町9番50号



開明遺跡 遺構配置図



尾尻遺跡 遺構配置図